2018 年度

自己点検・評価報告書

岩手保健医療大学

Iwate University of Health and Medical Sciences

目　　次

Ⅰ　委員会活動報告

- 教学委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 入試委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 広報委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 学生委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- 図書・情報管理委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- ＦＤ委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
- 実習委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46
- 地域貢献・国際交流委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
- 研究委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
- 自己点検評価委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
- 防火防災・環境保全委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
- 倫理委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

Ⅱ　教育･研究年報

- 一般教養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
- 基礎看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
- 成人看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
- 老年看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
- 母性看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・105
- 小児看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
- 精神看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
- 地域看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110

Ⅲ　外部資金獲得状況

- 外部資金獲得状況一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113

Ⅰ　委員会活動報告

2018 年度　教学委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：菊池和子

委　員：濱中喜代(学部長)、遠藤芳子、土田幸子、石井真紀子、長南幸恵、大谷良子、齋藤禎夫

庶　務：佐々木美宇（学務)、佐藤愛（学務）

2.　委員会の開催

委員会は以下の日程で毎月 1 回の開催を計画し、計 12 回開催した。

4/10、5/8、6/5、7/3、8/1、9/3、10/1、11/12、12/4、1/8、2/12、3/18　以上 11 回

3.　委員会活動目標

１）カリキュラムを申請内容にそって適正に実行する。

２）学生の学修状況の把握と学修支援体制の整備を進める。

３）学則に則った内規・細則・申し合わせ等の整備を進める。

４）学修環境を整備（試験に関すること、成績管理、講義室の機器等）する。

4.　活動内容と点検評価

１）カリキュラムを申請内容にそって適正に実行する。

（１）カリキュラムの適正な運営と評価

授業・実習科目や開講時期については申請どおり実行できた。

疾病治療論Ｉの授業に関して、非常勤講師から学生の要望で解剖生理学から講義したところ授業時間数が不足する、という意見があり、来年度は解剖学の時間数を 5 コマ増やすこととした。

保健師課程履修学生審査に関する申し合わせについて担当教員と共に整備し、教授会の承認を得て、学生に周知した。次年度学生便覧に掲載することとした。

カリキュラムに関する自由記述形式のアンケート調査を教員に行なった。今後のカリキュラムの検討資料とする。

学年末に１、2 年生を対象として、カリキュラムに関するアンケートを実施した。1 年生では、外部講師担当科目では、シラバスと授業内容が合っていないとの回答があったことから、シラバス内容と授業の整合性の課題があった。

2 年生では、基礎専門科目で授業時間が少ないと回答した科目があったため、授業内容と授業時間数のすり合わせの検討が必要である。

（２）定期試験等の準備と運営

概ね問題なく実施出来た。

（３）平成 31 年度学年歴、シラバス、時間割の作成

次年度の非常勤講師依頼、シラバス・時間割作成などについて学務担当事務が主に行い、概ね滞りなく作成ができた。

（４）ゲストスピーカーに関すること

教授会でゲストスピーカーについて周知したが今年度は申請がなかった。

（５）講師（非常勤講師）会の開催

非常勤講師 15 名、教員 22 名、職員 3 名が出席した。大学側より教育理念、教育目標、カリキユラムについて説明、授業アンケート結果の説明を行った。その後、学生の授業を通して疑問に思っていることや、教育方法の工夫点などについて非常勤講師と教員と意見交換を行い情報共有する機会となった。

（６）学士課程教育の質保証に関すること

日本看護系大学協議会や日本私立看護系大学協会の会議や研修会に参加し、情報を得た。

２）学生の学修状況の把握と学修支援体制の整備を進める。

（１）新入生及び進級学生オリエンテーションにおける履修指導

新入生及び進級学生については年度初めであることから学生便覧に沿って教育理念、教育目標、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、教育課程、履修について説明した。留年学生については、個別に担任と共に履修指導を行った。

先に述べた学期末に学生に実施したカリキュラムに関するアンケート結果では、教育理念、教育目標、カリキュラム・ポリシーについて各学年共、8 割が理解していると回答していた。2 割の学生は理解していないと回答していることから、学期初めに確認する必要がある。

（２）学生の履修状況の把握と指導

出欠管理について、学務担当事務が非常勤講師の科目の出欠管理を行い、欠席の多い学生には、事前に通達メールを送り、周知した。また、出席日数の不足する学生について学務担当事務からの連絡を受け、必要時アドバイザー等が指導を行った。

（３）学生支援プログラム等の開催

①フレッシュマン合宿

昨年度に引き続き、入学後間もない 1 年生を対象に 1 泊 2 日の日程で、フレッシュマン合宿を実施した。昨年と同じ国立岩手山青少年の家で行った。ビブリオバトルやレクリエーションを通して学生同士および学生と教職員において交流を深めることができた。

②サマーキャンプ

1 泊 2 日の日程で、1・2 年生を対象にサマーキャンプを実施した。場所は岩手県立県南青少年の家であった。野外炊事やオリエンテーリングなどの活動を通して、学年間の交流が図れた。しかし欠席する学生が目立ったため、参加した学生から不平

等との意見が出された。欠席の学生には学内でキャンプ同様の課題を課し、指導を行った。それにも欠席した学生に対しては学部長が個別に課題を課し、指導を行った。最終的には全員が課題を提出した。

事後に行ったアンケートではキャンプの「意義が見いだせなかった」という意見もあったことから、次年度に向けて企画を検討する必要がある。

③ナーシングプレッジセレモニー

2 年次後期の実習が開始されることを契機に看護学生としての新たな決意を表明する式典を開催した。参加者は学生 68 名（1 名欠席、遅刻者 1 名）、教職員 26 名、保護者 69 名であった。記念品としてプリザーブドフラワーを贈呈し、セレモニー終了後、学生、保護者、教職員の交流会を開催した。

事前に学生に各自、メッセージ「看護学生としての新たな決意」と写真を入れたカードを提出させ、セレモニー前から玄関横に掲示し、当日は来学者が見られる場所に掲示した。メッセージカードは卒業時に、本人に返却することとして、事務で保管している。

以下の課題が挙げられた。

・記念品授与の流れが速く、保護者が写真を撮るタイミングをあまりとれなかったため、授与された学生が保護者の方を見て立ち止まる時間をとる必要があった。
・交流会では保護者と教員の交流はなされたが、学生（特に保護者が来ていない学生）と教員との交流はあまりなされなかった。
・決意表明カードは学生の意識づけともなり好評であった。その活用方法について工夫が必要である。
・保護者や学生がセレモニーに対して期待をもって参加していたことから、開催場所や内容の検討が必要である。

以上のことを次年度の計画に活かしてセレモニーを開催する。

（４）成績不振学生への学修支援

学生への学修支援として昨年度より継続して学修会を行った。指導を要する成績不振学生は、呼び出しても来ないことがあり、個別の指導を必要とした。学修会に参加した学生は、自主的に学習するようになりその効果が成績にも表れた。その学生達については必要時教員が指導するが基本的には自主的に学修させることとした。

1 年生、2 年生共、本試験で不合格の科目が多い学生について呼び出して注意喚起した。最終的に不合格となった学生については学修方法等の個別指導を行った。

成績不振学生への指導は、本学の重要な課題であることから、FD 委員会と共催で「成績不振学生への学修支援」のテーマで、教員間で意見交換し、情報共有と今後の教育方略を検討する研修会を行った。

今後も継続した検討を行い、指導を強化していくことが必要である。

（５）入学前教育に関すること

2018 年度推薦入試合格者に対し、入学後に課題の確認及びフィードバック行った。

課題の確認とフィードバックでは、アドバイザーによる自己学習課題の確認と面接により行った。課題の取り組み状況は学生によりばらつきがみられた。

新入生オリエンテーション期間に、今年度入学者全員を対象に国語、数学、理科、社会の科目のスタートアップテスト（推薦入試合格者への課題テキストに付属）を実施し、入学時点での学生の基礎学力の把握を行った。概ね一般入試合格者の方が推薦入試合格者よりも得点が高い傾向にあり、特に一般入試 A 合格者は地域特別推薦入試合格者に比べ理科及び総合得点において有意に高い結果であった。

また 2019 年度推薦入試および社会人特別入試合格者 35 名に対し、前年度と同様に課題テキストおよび新聞記事のまとめの課題による入学前の自己学習を課した。さらに平成 31 年 2 月 15 日に交流会を実施し、34 名が参加した。入学前教育の趣旨、在校生からのアドバイス、高校での基礎知識の必要性の説明を行った。また、持参した課題の取り組み状況を確認し、今後の課題の取り組み方、入学までの過ごし方フィードバックをおこなった。その後グループに分かれ自己紹介や話し合いの時間を持った。参加者にはメモを取るなど積極的な参加姿勢がみられた。当日欠席者 1 名については後日来学してもらい、担当教員からの説明及び指導を行った。課題は入学後提出、アドバイザーによるフィードバックの機会を設ける予定としている。

３）学則に則った内規・細則・申し合わせ等の整備を進める。

（１）研究生受け入れに関する規程の整備

規程案を策定し、教授会の承認を得た。岩手保健医療大学規程に追加された。

来年度以降も特別聴講生、外国人留学生の取り扱い、留学の取り扱いなどについて検討していくことが必要である。

４）学修環境を整備（試験に関すること、成績管理、講義室の機器等）する。

（１）教室等の管理運営に関すること

授業中に使用する機器等がスムーズに活用されるよう、必要時メンテナンスを行った。大学祭の準備期間に教室使用の学生の要請を受け、教室の貸し出しを行った。

5. 次年度に向けた課題

１）　カリキュラムの適正な運用

２）　カリキュラムの運用上の工夫を要する点の改善の検討

３）　学生への学修支援の充実をはかる。

４）　非常勤講師との講師会の実施

５）　卒業研究ゼミナールの検討

６）　初年次教育及び学修支援プログラム（フレシュマン合宿、サマーキャンプ、ナーシングプレッジセレモニー）の適正な実行

７）　成績管理等、学務システムの充実

８）　学則の「別に定める」事項における教学関係の規程等の作成の継続　　以上

2018年度 入試委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：清水哲郎

副委員長：遠藤芳子

委　員：濱中喜代、竹本由香里、土田幸子、石井真紀子、青柳美樹、松井照雄、齊藤禎夫

庶　務：小笠原明香（学務）

2. 委員会の開催

委員会は8月を除き原則月1回の開催を計画し、計11回開催した。

4/6、5/18、6/11、7/6、9/7、10/12、11/2、12/6、1/9、2/15、3/8　以上11回

※入学試験実施要項作成担当者会議・入学試験問題検討担当者会議（随時）

3. 委員会活動目標

1）受験者数の増加に向けて、社会人特別入試を平成 31 年度入学試験から、実施する。

2）入学試験問題作成の効率化を図る。

3）完成年度後にむけて入学試験実施方針及び選抜方法を検討する。

4. 活動内容と点検・評価

1）受験者数の増加に向けて、社会人特別入試を平成 31 年度入学試験から実施する。

・社会人特別入試（推薦入試）について実施要項を検討し、今年度から実施した。第 1 次推薦入試に 1 名が応募したが不合格、第 2 次推薦入試にて同社会人の応募があり、2 回目の挑戦で合格した。

2）入学試験問題作成の効率化を図る。

・問題の作成についてはスムーズに進んだ。また、マークシート読み取り機器導入により、採点方法の簡略化がなされ、短時間での採点が可能となった。

3）完成年度後にむけて入学試験実施方針及び選抜方法を検討する。

・他大学入学試験日やセンター試験実施の日程を考慮して、推薦二次試験実施日を変更して実施した。

・2020年から始まる新大学入学試験についての情報収集と情報交換を継続し行った。

4）その他

（1）入学試験実施要項の作成

・教員委員から学務事務に移行して行った。実施要項の作成と入学試験実施説明会での説明についても学務事務ですることとなった。

（2）面接試験採点表の見直しを行った。

5.　次年度に向けた課題

1）受験者数の増加にむけて次年度からC日程を実施するため、広報委員会との連携を強化する。

2）大学「共通テスト」の情報収集と情報交換及び今後の入試方法に関する検討をする。

以上

2018 年度 広報委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：木内千晶

委　員：鹿糠全、齊藤禎夫、大井慈郎、大谷良子、甲斐恭子、佐藤つかさ

庶　務：小笠原明香(学務)、佐藤愛(学務)

オブザーバー：濱中喜代(学部長)

2. 委員会の開催

委員会は 6 月、9 月、12 月を除き毎月 1 回の開催を計画し、計 9 回開催した。

4/12、5/10、7/12、8/9、10/11、11/8、1/10、2/14、3/14

3. 委員会の到達目標

1） 受験者獲得に直結する正確・丁寧・迅速な情報を発信する

2） 大学の知名度の向上を図る

3） ブランディングの確立を目指す

4. 活動内容と点検評価

1）オープンキャンパスの広報・企画・運営を行う

①オープンキャンパスの企画・運営

予定した 3 回のオープンキャンパスを企画運営した。今年度のオープンキャンパスは、開催日（曜日を土曜より日曜）と回数（前年度計 5 回から 2 回のオープンキャンパスと大学祭協賛の 1 回の計 3 回）を変更した。結果、7 月の参加者は 173 名と盛況で、変更の効果がみられたと考える。次年度もオープンキャンパスの回数は 3 回で企画しているが、今年度の受験者は前年度を下回っていたため、参加者目標の設定や受験者の獲得へつながる企画となるよう開催時間（午後半日）や企画内容の充実などを図っていく必要がある。

【参加者の実績】

実施月	人数
7 月	173 名（高校生 122 名、保護者・その他 51 名）
10 月	44 名（高校生 28 名、保護者・その他 16 名）
3 月	32 名（高校生 21 名、保護者・その他 11 名）

オープンキャンパス準備運営工程マニュアルを見直し、運用しながら改定を重ね、実用可能なものとした。準備運営工程マニュアルの改訂では、特に事務職員と教職員の役割を整理し、準備や役割遂行の効率化を図った。

②オープンキャンパスの広報

【広報手段と内容：7 月】

広報手段	内容
盛岡駅前観光案内ビジョン	駅前滝の広場ビジョンに午前 7 時～午後 9 時、1 時間に 9 回程、テレビ CM の内容（15 秒 2 回連続で計 30 秒）を放映。　期間 6 月 22 日（金）～7 月 22 日（日）
テレビ CM	テレビ岩手、めんこいテレビ、秋田放送の 3 局で放映。期間 7 月 7 日（土）～7 月 20 日（金）
車内広告	JR 東北本線・IGR(6 月～7 月）、JR 釜石線（7 月）に車内ポスター掲載
新聞掲載	岩手日報 7 月 16 日（祝月）テレビ欄に掲載
情報誌	マ・シェリ 7 月 13 日（金）掲載
HP・SNS	HP 2 回、Facebook・Twitter・LINE 各 6 回掲載
ポスター・ちらし	5 月の高校訪問にて、岩手県内 37 校にオープンキャンパスポスター・ちらしを持参。その他、岩手県・北海道（函館地区）・青森県・秋田県・宮城県・山形県の 237 校に送付。更に、実習病院や商業施設に配布。

【広報手段と内容：10 月】

広報手段	内容
HP・SNS	HP・Facebook・Twitter・LINE は各 3 回掲載
ポスター・ちらし	8・9 月の高校訪問にて、岩手県・青森県・秋田県・宮城県の 49 校にオープンキャンパスちらしを持参。その他、岩手県・北海道（函館地区）・青森県・秋田県・宮城県・山形県の 233 校に送付。

オープンキャンパスの広報活動は 7 月に集中している。10 月や 3 月の戦略についても企画等の見直しが必要と考える。

2）高校訪問を計画する

①5 月 23 日～6 月 1 日（第 1 回訪問）

昨年度および今年度に本学へ入学者のあった岩手県内の高校 37 校の訪問を実施し、大学案内、オープンキャンパスチラシおよびポスターを持参した。訪問対象外となった県内の全高校及び北海道・秋田県・青森県・宮城県・山形県の 237 校には郵送した。推薦入学者の出身校へは推薦のお礼、入学者の様子報告、オープンキャンパスの案内を行い、引き続き在校生への周知を依頼した。高校側の対応は全体的におおむね好意的で、卒業生の本学入学後の学力面等の状況を知ることで安心感につながっている様子がうかがえた。しかし、学生及び保護者は経済的な面で本学への進学を躊躇している状況も少なくない旨の意見も複数みられた。質問としては受験倍率、実習先について多く聞かれた。

②8 月 27 日～9 月 20 日（第 2 回訪問）

岩手県 38 校、秋田 6 校、青森 3 校、宮城 2 校の 49 校の訪問を実施した。大学案内、募集要項、入試ポスターを持参し、本学受験へ向けた募集要項の説明、生徒への周知、

生徒の推薦を依頼した。訪問対象外となった岩手県・北海道・秋田県・青森県・ 宮城県・山形県の 233 校には郵送した。受験生の志望先がほぼ絞られる時期での訪問であり、本学への受験生がいる高校も複数名みられたが、生徒は国公立もしくは高等専門学校を選択するとの回答が多くの高校から聞かれた。その要因としては学力、経済面があげられた。訪問先からは入試内容だけでなく、本学の学力レベル、学習支援、実習場所などのカリキュラム内容、学費・奨学金等の金銭面まで広範囲な質問がなされた。

今年度は、より本学受験の可能性の高い高校を選択し訪問したため昨年度よりも県内外ともに総訪問数は少なくなっているが、入学実績のある高校については本学に関する一定の理解を得ているのではないかと考える。 しかしながら、学力面や経済面から本学以外の進学先を考慮するという状況に対して、本学からの対応策を検討・発信していく必要がある。また、訪問担当する教職員が方向性を統一し、本学の特色・特徴の説明、質問への返答ができるよう、情報の共有をはかっていくことも重要である。

3）大学案内の企画・作製を行う

①大学案内（2019）

2018 年 4 月 26 日に完成した。部数は 5,000 部、増刷 600 部、計 5,600 部であった。配布先は、高校（岩手県、秋田県、青森県、宮城県、山形県、北海道　計：280 校）、資料請求者、進学相談会、オープンキャンパス、実習施設、病院、教職員、学生、非常勤講師等であった。

内容は、大学と専門学校の違いをより表現できるよう、新たに実習ページ、学生支援のページを追加したことにより本学の特徴を伝えることができたと考える。

【主なページ構成（16 ページ）】

P.1-2	・キャッチコピー「大学で、看護をもっと好きになる！」 ・看護学部の 3 つの特徴 ・本学で取得可能な資格・免許と卒業後のキャリアップ
P.3-4	・カリキュラム ・科目紹介（①探求の基礎 ②チーム医療論 ③小児看護技術論 ④看護倫理 ⑤災害看護）
P.5-6	・実習カレンダー ・岩手県の実習先 ・実習紹介（①早期体験実習 ②地域看護学実習） ・学びのサイクル（徹底した事前準備、綿密なフォローアップ）
P.7-8	・学生によりそう支援（アドバイザー制度、少人数学修、フォローアップ学修支援、国家試験対策、就職支援相談室、奨学金サポート） ・教科書はタブレットに（デジタル教科書のポイント）
P.9-10	・学生、教員の声（メッセージ）
P.11-12	・キャンパスカレンダー ・学生の 1 日（1 年次前期時間割） ・学生データ（①自宅通学・一人暮らしの割合 ②在学生数の男女比） ・施設紹介

P.13-14	・建学の精神 ・学長、学部長メッセージ ・3 つのポリシー ・入学試験概要、学費、奨学金

②大学案内（2020）

2018 年 10 月より制作を開始し、2019 年 4 月末完成予定である。部数は、大学案内（2019）よりも 900 部増刷し 6,500 部を予定。また、ページ数は 4 ページ増量して 20 ページにした。

内容は、新たに本学の特徴である「早期体験実習」の特集ページを設けるとともに、学生のコメントを多く取り入れることにより、高校生等に本学の状況を知ってもらえるような工夫を行った。また、高校訪問および進学相談会等で紹介しやすいようストーリー性のある構成に改良した。

4）大学ホームページ、SNS を管理する

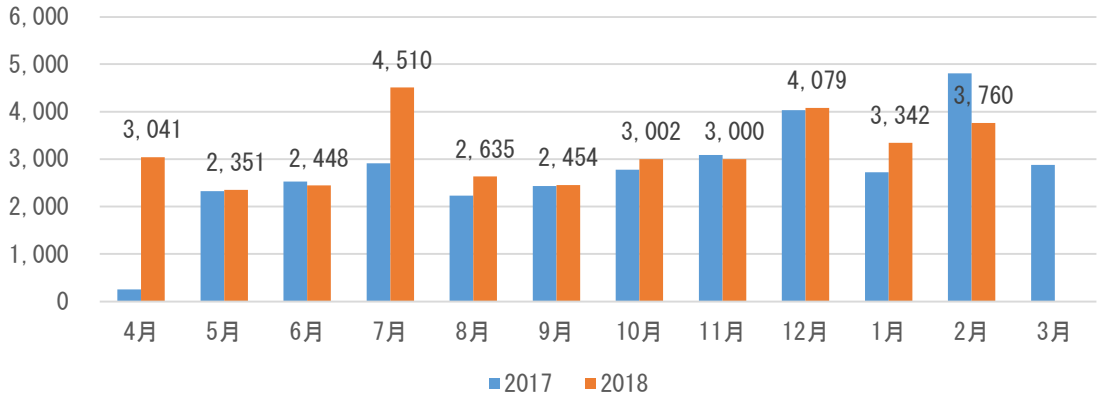
①大学ホームページ

大学ホームページは、2017 年 4 月より開設した。大学の基本情報をはじめ、「受験生」「地域の方」「在学生」に対しての情報発信にも活用している。2018 年 3 月 1 日から 2019 年 2 月 28 日までの 12 ヶ月で 30,000 人強の閲覧があった。詳細は図表 1 のとおり概ね年間計画通りに運用できている。

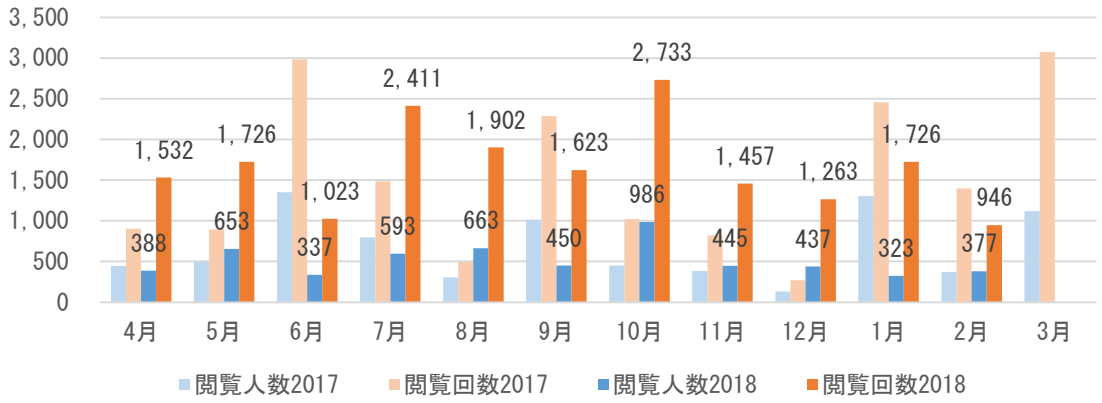
②SNS

SNS は、Facebook、Twitter、LINE の 3 種類を運用している。それぞれ閲覧者層が異なっており、ターゲットに合わせて適宜情報発信を行っている。Facebook の閲覧者と LINE のタイムライン閲覧は、増加傾向にあるが 1～2 月が昨年を大きく下回っている（図表 2、図表 4）。Twitter のインプレッションは、4～6 月と 1～2 月が昨年より大きく下回っている（図表 3）。

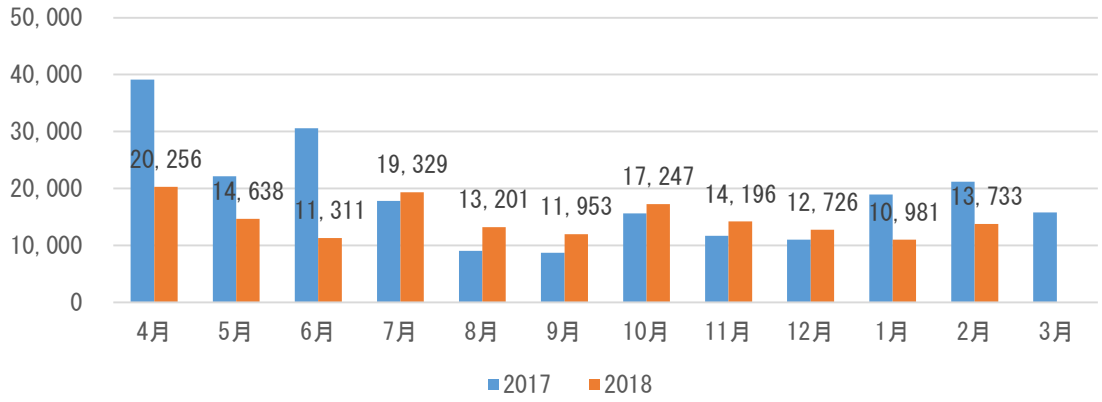
2018 年 10 月から、委員会担当者および事務担当者で、現状の HP・SNS に対する改善案を議論し、2019 年 1 月には HP を管理する業者と具体策を協議した。2019 年 2 月には、より円滑に情報を掲載が可能となるよう、HP・SNS 運用に関する内規を作成し、情報発信のプロセスを明確化した。



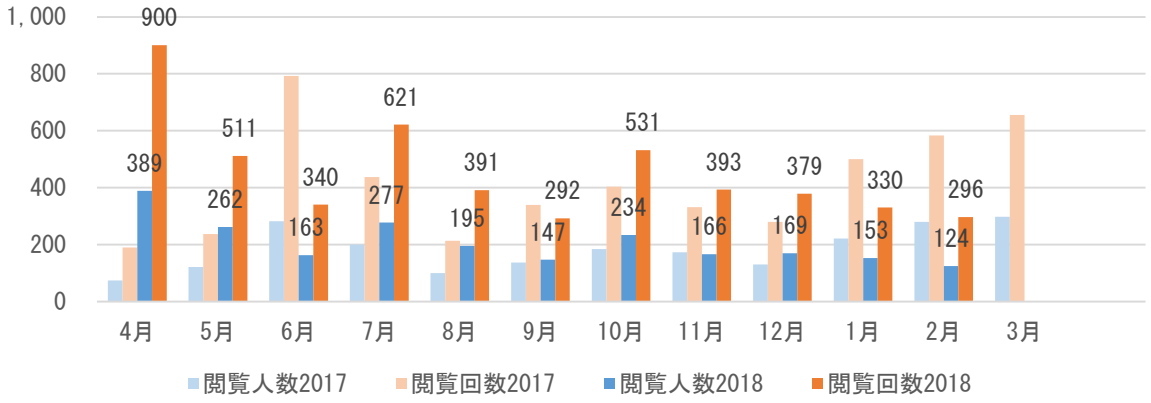
図表 1　HP 閲覧状況（ユーザー数）



図表 2　Facebook 閲覧状況



図表 3　Twitter インプレッション状況



図表 4　LINE タイムライン閲覧状況

5.　次年度に向けた課題

大学全体としての広報方針（岩手保健医療大学のビジョンや目指す方向）が明文化されておらず、今年度は、年度初めの段階で方針が確認されないままに委員会活動を進めてきた。次年度は、広報方針を落とし込み、広報で強調する視点を明確にした上で、広報委員会の活動を計画していく。

1）学力面や経済面に対する大学の対応策を踏まえ高校訪問等において発信していく。
2）高校訪問を担当する教職員が方向性を統一した説明と質問への返答ができるよう、情報の共有をはかっていく。
3）SNS の戦略的な利用方法を検討し、すべての月の閲覧者数を前年度増とする。
4）HP の閲覧数は他の広報活動の結果の反映であり受け身な部分があるが、SNS は投稿数の増加や学生の巻き込みなどを検討する。
5）オープンキャンパスの参加者目標の設定、受験者の獲得へつながる企画の充実、開催時間（午後半日）などを検討する。
6）平成 30 年度オープンキャンパスの広報活動は 7 月に集中していたため、10 月や 3 月の戦略について見直す。
7）大学案内は、他大学との差別化を図り、より本学の特徴や独自性を紹介できるような企画内容を提案してもらうコンペを実施して、業者選定を行ったうえで、例年よりも早期に制作に取りかかる。

以上

2018 年度　学生委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：遠藤芳子

委　員：竹本由香里、土田幸子、石井真紀子、青柳美樹、長南幸恵（10 月より）、作間弘美、齋藤禎夫(学務)

庶　務：伊藤庸子(学務)

オブザーバー：濱中喜代（学部長）

2.　委員会の開催

委員会は原則月 1 回開催することとし、今年度は、12 回（4/3、4/20、5/10、6/8、7/13、9/14、10/12、11/9、12/6、1/11、2/15、3/8）開催した。

3.　委員会活動目標

1）入学時・進級時オリエンテーションの企画及び実施を行う。

2）学生にかかわる支援を行う。

（1）学生の身分（退学・休学・停学・除籍）について教授会に審議の提案をする。

（2）奨学金制度への対応を行う。

（3）アドバイザー制、担任制による個人面接及び指導を行う。

（4）健康管理のためのルーム 1 の整備・管理を行う。

（5）学部長賞の選定を学部長と共に行う。

（6）看護師国家試験対策を。計画実施する。

（7）キャリアガイダンスを企画・準備する。

（8）感染症の抗体価検査及びワクチン接種の推奨、確認。

3）大学生活にかかわる支援を行う。

（1）福利厚生（各種証明書の発行、保険、学割など）に関する支援を行う。

（2）昼食販売企業の斡旋を行う。

（3）生活上（特に休暇中）の注意喚起を行う。

4）その他

（1）学生自治会活動を支援する。

4.　活動内容と点検評価

1）入学時・進級時オリエンテーションの企画及び実施を行う。

(1)入学時オリエンテーション

・「履修説明」、「事務手続」、「学生生活」、「図書・情報オリエンテーション」、の 4 項目に分け、丁寧なオリエンテーションができるよう 3 日間のスケジュールで実施した。

・新入生が看護者としての第一歩を踏む心構えの 1 つとなるよう、新入生歓迎講演（岩手日報　報道部専任部長　太田代剛様「あの日を忘れない」）を企画、実施した。

・学生生活を始めるにあたりスムーズな導入、不安の軽減につながるよう、心理カウンセラーの講話、警察署員による防犯・護身術体験、ウエルカムアワーを実施した。
・スタートアップテストの実施（教学委員会実施）
・2 年生による新入生歓迎会の実施

(2)進級時オリエンテーション

・曜日による授業時間数の不足も考慮し、2 年生は、4 月 5 日からオリエンテーションと授業を開始し、オリエンテーションと授業を並行して行えるよう企画した。

2）学生にかかわる支援を行う

（1）学生の身分（退学・休学・停学・除籍）について

・学生の退学 1 件、休学 2 件あり、教授会にて報告し、承認を得た。理由については、各学生のアドバイザー及び担任からのこの状況に至るまでの面接内容と経過を報告した。

（2）奨学金制度への対応を行う

・日本学生支援機構の奨学金については、給付奨学金 4 名、貸与奨学金・併用（第一種と第二種）8 名、第一種 16 名、第二種 18 名が採用された。（※給付奨学金被採用者は、貸与奨学金の被採用者でもある。）
・岩手県看護職員修学資金については、応募者 17 名であったが、貸付決定 13 名、貸付不承認 4 名であった。
・学生に対する説明会は、必要に応じて、複数回行った。

（3）アドバイザー制、担任制による個人面談及び指導を行う

・定期に 5 月と 11 月の 2 回、アドバイザーによる面談を予定したが、講義や実習の時間との折り合いにより、1 回の実施とした。特に気になる学生には、教学委員長、学部長、学生委員長が面談を実施した。

① 1 年生担任のまとめ

・アドバイザーから定期面談の状況について報告を受け、気になる学生がいた場合は委員会において情報共有を図った。また、定期面談以外でも、出席状況、健康面において気になる学生がいた場合は委員会で報告し、情報共有を図った。
・持病がある学生 1 名については、担任が実習前後で面談を行い、治療状況や本人の自覚症状、体調面について確認しながら継続的に関わった。早期体験実習、生活援助実習ともに担任が実習指導を担当し、学生の了解を得て実習施設とも情報を共有した。
・夏期休業中に退学の意思表示があった学生が 1 名おり、学生委員長、担任の 2 名で面談を行ったが、その後退学を取りやめたとの報告があり、後期は特に問題となるようなことなく経過した。
・前期末試験後には成績不振者に対し個別指導を行い、学習面の支援を行った。
・留年者に対しては、年度初めに学習計画の立案を促し、その後は学生自ら教員のアドバイスなどを受けるなどしながら授業に参加できていた。

② 2 年生担任のまとめ

・昨年のアドバイザーから、1年生の状況報告を受け、情報共有を行った。
・アドバイザーから定期面談の報告を受け、必要に応じて委員会で情報共有を行った。
・出席状況や健康面において気になる学生については、委員会で報告した。
・退学の意思が示された1名（N）については、アドバイザー、学生委員長と面談を行い、理由と意思を確認した。その後退学手続きが行われた。
・ADDの診断を受けた学生（M1）については、学園祭時の保護者とアドバイザーとの面談、及び学生との面談について情報共有を行い、後期後半より月2回の頻度で、学業や生活に関する学生からの相談に対応した。
・成績不振者（M2）の保護者からの電話相談に対応し、進級の規程や学生の学習状況について説明を行うとともに、傾聴に努めた。3日後に2回目の電話相談があり、学生委員長及び教学委員長に相談し、学部長に対応いただくことになった。学部長からも進級の規程や学習状況について保護者に説明された。

(4)　健康管理のためのルーム1の整備・管理を行う。

①　ルーム1の使用状況について

今年度の使用者数は延べ16名（以下の別表1参照）であった。

②　ルーム1の整備について

・鎮痛剤、下痢止め、傷薬等の薬品、湿布、包帯、絆創膏等の処置用品を常備し、2か月ごとに残数のチェック及び補充を行った。
・学生相談（心理カウンセリング）は、セラフィ佐藤さんからの希望で、相談日「第一、第三木曜日　18:00～（1名）第二土曜日10:00～（2名）」を月曜日～金曜日18：00～」と11月より変更を行い、全学に周知した。利用者は1件であった。

別表 1

番号	月/日	症　状	原　因	転　帰
1	4/26	転倒により手の指を痛めた	転倒	ルーム 1 で湿布をお渡し、その後、授業に出席
2	5/10	倦怠感	かぜ	ルーム 1 で休養
3	5/24	両眼瞼腫脹、眼脂、球結膜の充血	（不明）	病院受診
4	6/5	具合が悪い、顔色が悪い	疲れ、寝不足	ルーム 1 で休養
5	6/11	めまい		ルーム 1 で休養
6	6/14	頭痛、嘔気	寝不足による片頭痛	ルーム 1 で休養
7	6/19	頭痛、倦怠感、鼻汁	風邪	ルーム 1 で休養
8	7/2	生理痛	生理痛	ルーム 1 で休養
9	7/9	寒気、腹痛、嘔気、顔色不良、四肢冷感	教室内の冷房が効きすぎた（本人談）	ルーム 1 で休養
10	7/24	頭痛、倦怠感	食欲がなく栄養不足気味	ルーム 1 で休養
11	8/3	腹痛、嘔気	生理痛	処置（本人所持の鎮痛薬服用）後、ルーム 1 で休養
12	10/12	指のけが（出血）	元々の傷から出血	ルーム 1 で絆創膏をお渡し
13	11/9	倦怠感、嘔気	生理？（月経前症候群様）	ルーム 1 で休養
14	11/20	腹痛、月経痛	月経第 1 日目	ルーム 1 で休養、生理用パット提供
15	11/28	腹痛（みぞおち付近が痛い）	不明	ルーム 1 で休養
16	1/17	腹痛、嘔気	不明　便秘？	ルーム 1 で休養

(5) 学部長賞および学長賞の選定を学部長と共に行う。

・今年度は、対象者の推薦はなく、受賞者はいなかった。

(6) 看護師国家試験対策を。計画実施する。

・メディカ出版、さわ研究所、医教、東京アカデミー等の看護師国家試験模擬試験の実施時期、内容等について情報収集した。

・2 年生には、10 月 1 日（月）さわ研究所の国家試験ガイダンス後、模擬試験を実施した。模擬試験は、1 年次後期末に実施した模擬試験の全国正答率が

70%以上、及び国家試験過去問題の正答率が 70%以上の必修問題を中心に組み合わせ、50 問作成した。平均得点は 28.6 点（正答率 57.2%）であった。各問題の関連学習事項を学生に示し、国家試験ノートの作成を促した。国家試験ノートを提出させ、学習内容の確認を行った。

・2 年生 2 月 22 日（金）に、メディックメディアの「低学年模試（解剖生理 50 問、病態生理 50 問）」を実施した。正答率 60%未満の学生 61 名（89.7%）には、国家試験学習ノートを 4 月 2 日（火）に提出することとした。平均得点は 46.7 点であり、正答率 50%未満の得点者は 66.2%であった。1 年次の模試において正答率 40%未満の学生が 75.4%であっが、25%に減少していた。

・1 年生には、メディカ出版の科目別実力テスト「解剖生理学（90 問）」を実施した。平均得点率 34.5%であり、30%未満の者が 26 名（32.5%）であり昨年度 1 年生得点と比較すると約 10%高かった。

・後援会費からの補助が各学年 1 回の模擬試験に対して行われた。

・模擬試験の申込、解答の送付は担当教員が実施し、費用の払い込みは事務担当者に依頼した。

・模擬試験当日の運営は、各学年教員 3 名（試験監督）で行った。

・3 月 4 日（月）にマイナビ「キャリアサポートセミナー2019」に参加し、108 回国家試験の振り返り、看護学生の国家試験を見据えた実習指導等の講習を受けた。

(7)キャリアガイダンスを企画・準備する。

①進路に関する情報提供

・進路指導室内の進学および就職関係の資料の整理を行い、閲覧しやすい環境整備に努めた。

・岩手県および近隣の病院などからの就職説明・会見学会等やインターンシップなどに関するポスター掲示を行い、学生に周知し、タイムリーな情報提供に努めた。

②2 年生を対象に就職ガイダンスを 2 月 22 日模擬試験終了後に実施した。

就職決定までのスケジュールをもとに、①就職先の選び方　②就職活動の開始時期③就職活動のスケジュールを説明した。

③進路状況の把握

進路調査票を作成し、2 年生に対し後期授業ガイダンスで調査を実施した。その結果、進学 3 名、就職 64 名、未定 3 名であった。また、今後取得したい職種としては 33 名が保健師を希望していた。

(8) 感染症の抗体価検査及びワクチン接種の推奨、確認

・今年度入学生の抗体価検査は、入学前に学生自身が検査を受け、必要な場合はワクチン接種も行い、検査結果およびワクチン接種証明書を大学へ提出することに変更した。ワクチン接種が必要な学生は麻疹が 53 名、風疹が 37 名、流行耳下腺炎 28 名、水痘 7 名、B 型肝炎が 78 名であった。B 型肝炎以外の抗体価は、A 日程の約半数と B 日程の学生が、入学までのワクチン接種が間に合わず、入学後、接種指導を行い、1 月の生活援助実習までに理由のある 2 名を除き全員接種

を終了した。B 型肝炎ウイルスワクチンについては、2 回目までの接種が 1 名を除き全員終了している。2 年生の B 型肝炎ウイルスワクチン接種は、2 名が 3 回目の接種を未実施のため指導を継続している。

・インフルエンザワクチン接種は、1・2 年生の臨地実習の時期を考慮し、11 月初旬に大学にて一斉接種を実施した。

3）大学生活にかかわる支援を行う。

（1）福利厚生（各種証明書の発行、保険、学割など）に関する支援を行う。

・今年度の「海外渡航届（私事渡航）」提出者数は延べ 8 名（以下の表参照）であった。

渡航先国名	人数（名）
台湾	1
フランス	2
グアム	5

（2）昼食販売企業の斡旋を行う。

・都南カナンさんとヤクルトさんが販売を継続している。その他には希望される会社は無く、学生からの要請もない。

（3）生活上（特に休暇中）の注意喚起を行う。

・8 月 10 日に「夏期休暇中の大学からの連絡と諸注意」を話した。内容は、以下の通りであった。

◆夏期休暇の過ごし方について（学部長：濱中）
◆試験結果の表示、再試について（教学委員長：菊池）
◆進級要件について（実習科目）
◆保健師選択者の選考について
◆ナーシングプレッジセレモニーについて
◆大学の施設利用（体育館・グラウンドの用具使用含む）について（学務：齊藤禎）
◆海外渡航の手続きについて（学務：齊藤禎）
◆緊急時対応と緊急連絡網及び緊急時対応ポケットマニュアルについて（防火防災・環境保全委員：齋藤）
◆国家試験対策について（学生委員会国試対策担当：竹本）
◆B 型肝炎ワクチンの接種について（学生委員会 R1 担当：作間）
◆大学祭企画について(大学祭実行委員長：秋場)
◆サマーキャンプオリエンテーション（教学委員会）

4）その他

（1）学生自治会活動を支援する。

・昨年から継続して支援した。自治会役員として選出された会長、副会長、庶

務、会計、書記の計 8 名で学生自治会を発足し、活動した。主な活動として、事業の実施、大学祭開催への支援などであった。また月 1 回、自治会本部会（役員会）会議を開催している。

・大学祭支援については、昨年ほどの教員は関与せず、大学祭実行委員の活動の自主性に任せた。学生同士の協働体制に困難があったものの、準備、実行、後始末まで実施できていた。大学からの補助金の使途（宿泊費など）および収支報告（報告の仕方）について指導が必要であった。

・平成 30 年度は 8 つの新しいサークルが設立された。なお、昨年度設立された 8 つのサークルのうち、6 つから「継続届」、1 つから「解散届」が提出されたため、平成 30 年度は計 14 個のサークルが活動した。（※昨年度設立されたサークルのうち 1 つは、代表者の学生が休学していることもあり「継続届」は提出されていない）

・一部のサークルについて、学内において学外者（社会人）と活動していることが判明したため、事故時の責任の所在を明確にする等の目的で「学生団体学外者参加届」を提出してもらうこととした。また、活動実績のないサークルも存在するようなので、今年度から「学生団体活動報告書」を提出してもらった。提出状況は、3 月 19 日現在で 4 件である（締め切り 4 月 12 日（金））。

5. 次年度に向けた課題

1）アドバイザー制度

・学生の変化を見逃さず、適宜、適切に対応していく。退学に至ることがないように、早めに対応を行うとともに、休学などの活用を勧める。

・3 年生、4 年生対応のアドバイザー制を検討し、実施していく。

・学生の身分にかかわる事態が発生した後の対処についてアドバイザーと担任へ周知していく。

2）健康関連

・次年度のインフルエンザワクチン接種は、3 年生の領域実習が始まるため、3 学年の臨地実習時期を考慮し、接種時期を検討する。

・ルーム 1 の置き薬については、今後も担当教員と共に常備・整備・管理していく。

・フレッシュマン合宿やサマーキャンプなどの大学行事や、ボランティア等のサークル活動時に一時的に対応できるよう、持ち出し用救急箱の設置の準備を進める。

3）看護師国家試験関連

・1 年生に実施する模擬試験の内容を検討し、決定する。

・2 年生について、1 年生で実施した模擬試験の結果、状況等を踏まえて、内容と実施時期を決定する。

・3 年生の国家試験対策のスケジュール（国家試験についての説明、模擬試験の実施等）について、実習スケジュール等を考慮して決定する。

・4 年生の模擬試験を含めた国家試験対策のスケジュールおよび実施方法（支援方法）

について検討する。

4)キャリア関連

・キャリアガイダンスを全学年対象として計画・実施する。

①新年度の授業ガイダンス（4/2）に、業者による社会人としてのマナー講座を実施する。

②就職・進路相談室の利用について説明し、活用を促進する。

・2年生以上を対象に進路調査を定期的に実施する。

・進路相談（進学選択、就職先の選択など）対応方法について検討する。

5）その他

・夏期休暇前の生活上の注意喚起とインフルエンザの予防接種は引き続き行う。

・学生自治会、大学祭ともに学生主体の活動を尊重しつつ、引き続き支援を行う。

以上

2018 年度　図書・情報管理委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：江守陽子

委　員：木内千晶、大井慈郎、木村ちひろ（司書）、庶務：後藤泰輔(総務)

2.　委員会の開催

委員会は原則毎月 1 回の開催を計画し、計 12 回開催した。

4/11、5/7、6/6、7/4、8/1、9/5、10/3、11/7、12/5、1/9、2/6、3/6　以上 12 回

3.　委員会活動目標

1）図書、資料、視聴覚教材の整備を進める。

2）図書館の円滑な運営を行う。

3）情報ネットワークシステム、学内ラン運用・管理、情報管理を行う。

4.　活動内容と点検評価

1）図書、資料、視聴覚教材の整備を進める。

・図書や視聴覚教材の整備のために、図書・史料購入計画に基づき年 5 回に分け、図書選定と発注作業を行った（別表 1 参照)。

・今年度予算に対する発注済み金額：5,723 千円

・発注した図書・視聴覚教材数：和書；1,699 冊、洋書；132 冊

・図書・視聴覚教材総数：23 点

・文献検索システムの同時アクセスオーバーが発生する事態を受け、次年度からアクセス数を 4 口に増口した。

・図書館機能を充実させるための設備・備品（DVD 視聴用パソコン、検索データ印刷用プリンター）を整備した。

今年度の図書冊数の整備状況は順調であるが、予算額では余剰がでたため、その残金については、次年度以降の図書購入に充てる。

2）図書館の円滑な運営を行う。

(1)図書館の一般公開および利用についての規程整備

図書館の円滑な運営のために、岩手保健医療大学学外者図書館利用規程、学生便覧「図書館の利用について」、を検討し、整備した。

(2)図書館の利用促進活動

・新入生を対象に図書館の概要や利用方法等に関するオリエンテーションを行なった。

・学生を対象にデータベースを活用した文献検索ガイダンスを行った。

・9 月～12 月まで「大学生へのヒント」というテーマで図書の展示紹介を行った。同時に、図書館入口に設置している掲示板や本学 HP を活用して展示の広報活動を行った。

・1 月から新着図書の展示を開始し、週に 1～2 回のペースで展示する図書の入替を行った。
・昨年度の年間入館者数、貸出冊数、データベース利用数、オンラインジャーナル利用数は別表 2 のとおりであった。

多くの教職員、学生に図書館利用を促すための工夫をしている。文献検索ガイダンスや図書館の広報活動を行った直後は、図書館の利用が増えるなどの効果が認められた。よって、次年度以降も定期的な文献検索ガイダンスや広報に努めたい。
さらに、図書館の一般公開に向けての準備を促進する必要がある。

3) 情報ネットワークシステム、学内ラン運用・管理、情報管理を行う。

(1)ネットワークシステム管理

・ネットワークシステム管理については、学内担当者がサーバの定期点検を月 1 回行った。
・業者による定期保守・点検は実施していない。
・ネットワークの不具合が 2 回、内インターネットとファイルサーバの不具合が 1 回ずつ生じた。インターネットの不具合は学内担当者が対応し、ファイルサーバは業者に修理を依頼した。
・ファイルサーバに関しては、昨年度から同様の問題が起きていた。その都度の記録からおおよその原因が特定できたため、業者に設定変更を依頼した。その後問題は起きていない。

(2)情報管理・情報保護

・学内全体のファイアウォールにて不正アクセスの遮断と、ウィルス対策を行った。また、本学の教職員パソコン、共用パソコンにおいてもエンドユーザーのウィルス対策を行った。
・本年度は、すべてのパソコンのウィルス対策ソフトを一元管理に切り替えることに成功し、管理の面でもコストの面でも大幅な改善をすることができた。
・共用パソコンについては担当者が毎月アップデートを行った。
・教職員に一台ずつパソコンを貸与している。これらに関しては各自での管理としている。
・「教員」「職員」「学生」と学内ネットワークへのアクセス権を分けた運用を行っている。あわせて「総務」や「基礎看護学」など必要に応じたアクセス権の区分けも行い、不特定多数の人間が学内の機密情報にアクセスすることがないよう、情報の保護を行っている。
・大学メールは、現在は教職員・在校生に Gmail の 1 つずつアカウントを付与している。
・複合機（プリント・スキャン）は、全教職員が学内のいずれかの複合機でプリント・スキャンができるよう設定している。
・プリンターは、情報処理室にモノクロ・カラー2 台、図書館にモノクロ 1 台を設置した。利用後に使用報告書の記載を義務づけている。

(3)情報教育

・教職員、学生に対して、情報管理と保護、学内ネットワークの利用方法に関する説明と注意喚起を適宜実施している。
・新入生に対しては、1 年次前期に利用方法やリテラシーについてのオリエンテーションを実施した。

（4）その他

・ネットワークシステム管理

定期点検：　　不定期実施

確認点検：　　毎月（大井）実施

5.　次年度に向けた課題

1)　図書、資料、視聴覚教材の整備・充実
2)　図書館利用者の活性化、増加
3)　閉架式書棚の設置
4)　学内情報ネットワークの常時保守・点検システムの確立
5)　学内情報ネットワーク設備の強化
6)　ファイルサーバの使用規程の作成

以上

【平成30年度図書購入済み冊数及び金額】

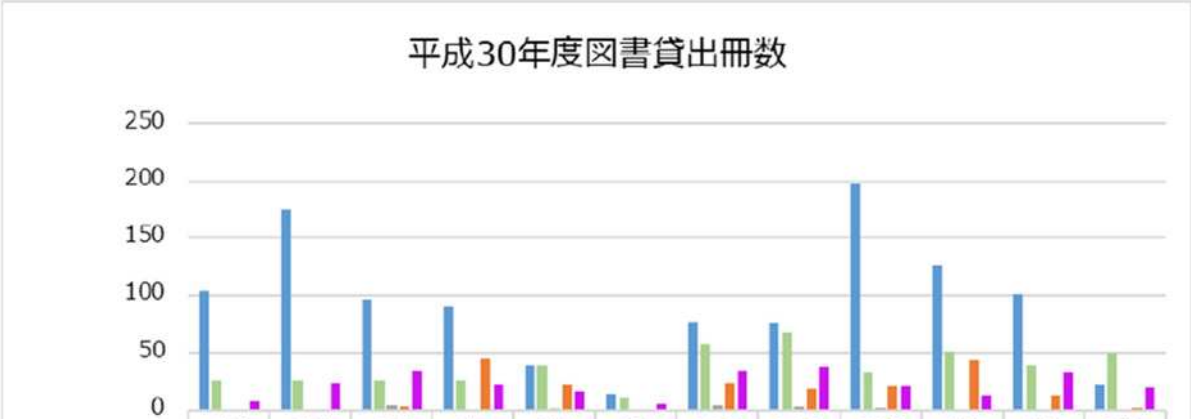
	和書	洋書	視聴覚資料	合計冊数	合計金額	備考	内訳
5,6月	358	19	0	377	1,023,071	選書の他1冊について、教員より急ぎでの購入希望に対応	和書361冊選書うち4冊入手不可(紀伊國屋書店)　842,314円 洋書19冊(丸善雄松堂)　178,133円 教員より急ぎでの購入和書1冊(丸善雄松堂)　2,624円
	(314)	(32)	(0)	(346)			
7,8月	386	21	16	423	1,492,450		和書390冊選書うち3冊入手不可(丸善雄松堂)　938,045円(丸善) DVD16点(丸善雄松堂)　372,792円 和書1冊(紀伊國屋書店)　3,915円 洋書21冊(紀伊國屋書店)　177,698円
	(314)	(32)	(0)	(346)			
9,10月	279	28	1	308	951,776	選書の他視聴覚資料1点について、講義で使用するため急ぎでの購入(直販)	和書283冊選書うち4冊入手不可(丸善雄松堂)　648,303円 洋書6冊(丸善雄松堂)　78,945冊 洋書22冊(紀伊國屋書店)　223,228円→うち4冊は未納(2019.2.13現在)→うち3冊は入荷遅延のお知らせあり(2019.2.18) DVD1点(直販：ゆずりは)　1,300円
	(314)	(32)	(0)	(346)			
11,12月	310	51	3	364	1,204,331	選書の他1冊について、教員より急ぎで購入希望対応(先生ご自身が発注・立替払い)	和書314冊選書うち4冊入手不可(丸善雄松堂)　742,985円 洋書47冊(丸善雄松堂)　360,760円 洋書4冊(紀伊國屋書店)　29,246円 教員立替払い購入和書1冊　4,860円 DVD2点(丸善雄松堂)　62,052円 DVD1点(直販：Septante)4,428円
	(314)	(31)	(0)	(345)			
1,2月 (見込)	366	11	3	380	1,030,930	見積段階のため冊数及び金額は確定ではない(2019.2.13現在)	
	(314)	(0)	(0)	(314)			
29年度		2		2	21,032		29年度に発注したが、納品が遅れ30年度に入ってから納品及び請求書が発行された図書 29年度2,3月選書(丸善雄松堂)
合計	**1,699**	**132**	**23**	**1,854**	**5,723,590**		
	(1,570)	(126)	(0)	(1,696)			

※　(　　)は購入予定数

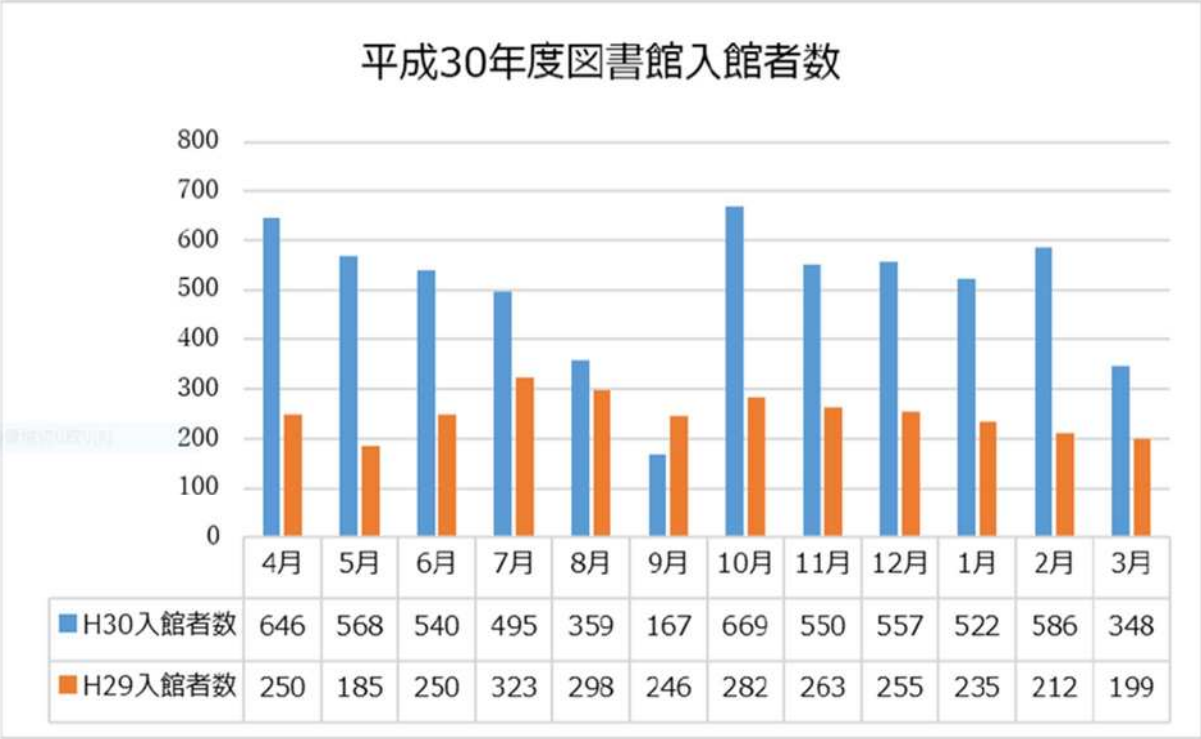
※　洋書について、未納図書があるため見積時の冊数と金額を記載。流通状況によっては入手不可の場合あり。

※　平成30年度の予算は16,999千円(データベース、雑誌等も含む)である。

別表 2



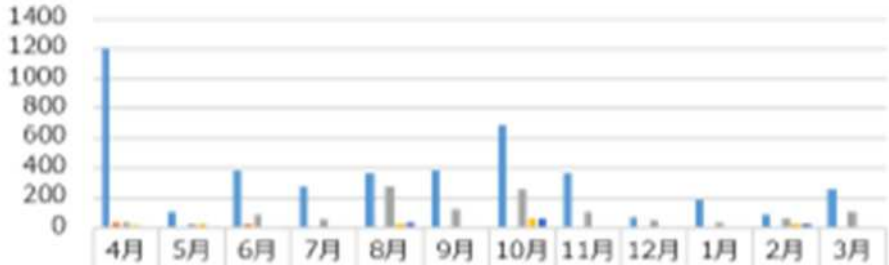
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
H30学生	104	174	97	90	40	15	77	76	198	126	101	23
H30教員	26	26	26	26	40	11	58	68	33	51	40	50
H30学外者			5	0	2	0	5	4	3	1	1	0
H29学生	0	0	4	45	23	1	24	19	22	44	13	3
H29教職員	8	24	34	23	17	6	35	38	22	13	33	20



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
H30入館者数	646	568	540	495	359	167	669	550	557	522	586	348
H29入館者数	250	185	250	323	298	246	282	263	255	235	212	199

平成30年度データベース利用統計

(検索件数)



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
H30医中誌Web	1206	107	385	275	370	388	687	372	77	187	95	260
H30最新看護索引Web	35	0	23	2	3	5	10	10	0	1	1	7
H30メディカルオンライン	35	27	91	57	277	123	266	106	51	34	69	111
H30CINAHL	15	26	7	3	28	1	64	5	4	0	26	0
H30MEDLINE					33	1	64	6	4	0	26	0

平成30年度データベース利用統計

(ログイン回数)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
H30医中誌Web	342	39	103	69	104	124	196	124	35	61	55	116
H30最新看護索引Web	85	5	25	8	17	15	24	13	1	5	6	10
H30メディカル	10	15	34	20	35	35	59	41	17	14	15	33
H30CINAHL	68	10	3	1	5	1	8	3	2	0	5	0
H30MEDLINE					6	1	8	3	2	0	5	0

平成30年度電子ジャーナル利用統計

(ダウンロード回数)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(H30)AJN:American Journal of Nursing	1	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0
(H30)Cancer Nursing										1	0	0
(H30)Journal of Gerontological Nursing										0	0	0
(H30)MCN: American Journal of Maternal Child Nursing										1	0	0
(H30)Nurse Educator										0	5	0
(H30)Nursing Research	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
(H29)AJN:American Journal of Nursing	0	3	3	0	0	1	0	0	8	0	0	0
(H29)Nursing Research	0	0	1	0	0	0	0	0	4	2	0	0

2018 年度　FD 委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：石井真紀子

委　員：菊池和子、成田真理子、金谷優輝、佐藤恵

庶　務：後藤泰輔(総務)

オブザーバー：濱中喜代（学部長）

2. 委員会の開催

委員会は 8 月を除いた月 1 回開催し、計 11 回開催した。

4/3、5/7、6/4、7/2、9/3、10/1、11/5、12/3、1/7、2/12、3/4　以上 11 回

3. 委員会活動目標

1)　「ケア・スピリット」の理解、共有を通して授業の中で具現化できるための研修会を開催する

2)　方針に沿った趣旨の研修会に該当する教職員を派遣する

3)　外部講師を招聘し、方針に沿った FD・SD 研修会を開催する

4)　他委員会と協同でニーズに沿った FD・SD 研修会を開催する

5)　授業評価アンケートを実施し授業内容の改善に向けたデータを提示する

6)　本学の実態に沿った体系的な FD・SD を構築するための情報収集および検討を行う

4. 活動内容と点検評価

活動目標に沿って報告する。

1)　「ケア・スピリット」の理解、共有を通して授業の中で具現化できるための研修会を開催する

7 月と 10 月の計 2 回開催した。7 月は教員対象（FD）で、10 月は職員を対象（SD）に実施した。

7 月の研修会では、「ケア・スピリットと教育」をテーマに取り組んでいる研究メンバーより平成 29 年度の研究成果が報告され、その次に清水学長からケア・スピリットについて講義があった。これらを受けて、参加者同士で意見交換を行った。授業でどのようにケア・スピリットを具現化するか、という視点で活発に意見交換が行われた。

10 月の研修会（SD）は、初の試みとして事務職員を対象に上述の研究成果報告と清水学長の講義を行った。職員も高校訪問で本学の紹介を行う機会や、オープンキャンパス等の行事に携わる機会があるため、SD として企画した。終了後のアンケートでは「ケア・スピリット」の理解が深まり有意義であったという意見が寄せられた。「ケア・スピリット」に対する理解が漠然としたものから明確になり、短時間ではあったが有意義な研修であった。

次年度は 3 学年が在籍することになる。特に 3 年生は年間を通して本格的な臨地実習が開講される。臨地実習では、学生が対象を通して「ケア・スピリット」の学びを

深める貴重な機会であるため、引き続き「ケア・スピリット」の研修会を継続することが今後も必要と考える。

2) 方針に沿った趣旨の研修会に該当する教職員を派遣する

8 月に「大学新任教員のための研修会」に 3 名の教員を派遣し、報告会を開催した。10 月には「自大学の強みや使命を活かす CQI（看護学教育の継続的質改善）」に 1 名の教員が参加した。12 月に入って「看護師の特定行為研修会説明会」に 2 名の教員が、同じく 12 月に「学生生活にかかる喫緊の課題に関するセミナー」に職員 1 名を派遣した。研修会に参加した教職員には、それぞれ伝達講習会（1 月 18 日金曜）の場で報告してもらった。今年の伝達講習会は FD・SD 合同開催とした。

終了後のアンケートには、FD・SD 合同開催により、これらのテーマについて教職員で共有できて良かった、という意見や職員には難しい内容であった、などの意見が寄せられた。アンケート結果を検討しながら、次年度以降も FD・SD 合同開催の企画を継続する。

3) 外部講師を招聘し、方針に沿った FD・SD 研修会を開催する

齋藤有紀子氏（北里大学医学部附属医学教育研究開発センター）を招いて「看護研究における倫理的配慮」というテーマで FD 研修会を開催した。参加者からは、研究に取り組む姿勢を理解できた、研究における倫理的な配慮について考えることができた、研究倫理を概観することができた、という意見が聞かれた。一方で、質疑応答の時間がもっと欲しかった、具体的に困っていることについて相談したかった、理解するためにもっと時間が必要、という意見も出された。研究倫理については、切り口を変えて今後も開催する必要性が認識された。

また今年度は SD として招聘講演を開催できなかったため、次年度は教職員合同もしくは別々の形での開催を検討する。

4) 他委員会と協同でニーズに沿った FD・SD 研修会を開催する

実習委員会と合同で「実習指導に関する FD 研修会」を 6 月に開催した。新任の若手教員が着任し、5 月の早期体験実習や療養援助実習 I が終了したこの時期に、実習指導の在り方についての講義や、実際に実習指導を行ってみての課題等を踏まえて情報交換を行った。アンケートの意見としては、一堂に会して意見交換ができたことで有意義であった、という意見が出された。一方で、教育力の向上を目指した内容が要望されていた。

倫理委員会との共同開催については、9 月に上記 3)を実施した。

11 月には教学委員会と合同で、「成績不振学生への学修支援」と題して FD を実施した。小グループに分かれて、本学の学修支援が必要な学生の状況と課題、方策をテーマとして討議した。このテーマは本学の喫緊の課題であり、各グループで熱心な議論が展開された。参加者の意見として、国家試験合格率は大学の存続にも関わることであり体制づくりが必要との意見が出されてた。

昨年度と比較すると他委員会との共同開催が 3 件に増えた（昨年度は 1 件）。これについては昨年度の反省を踏まえて年度当初から委員会に呼びかけ、準備をしたことが成果につながったと考える。

次年度も各委員会と情報交換を行いながら、有意義な FD・SD の開催を検討し企画

する。

1)～4)に該当する研修会一覧は下記の通りである。

平成 30 年度 FD・SD 研修会 一覧

回	月日	場所	内容	担当	出席率
1	6月25日(月) 14:40～16:10	大会議室	● 実習指導に関する FD 研修会 1. 講義「臨地実習指導の在り方」 学部長　濱中 喜代 2. フォーラム「早期体験実習および療養援助実習Ⅰについての情報交換会」 実習委員会委員長　江守 陽子	実習委員会 FD 委員会	85.7%
2	7月 9日(月) 14:40～16:10	大会議室	● 科学研究費補助金獲得に向けての FD 研修会 1. 科学研究費補助金に採択されるために 学長　清水 哲郎 2. 科学研究費補助金獲得に向けた方略 教授　江守 陽子	研究委員会	66.6%
3	7月23日(月) 14:40～16:10	演習室 1・2	● 「ケア・スピリット」について理解を深めよう 1. 平成 29 年度研究成果報告 講師　石井 真紀子 2. ケア・スピリットについて 学長　清水 哲郎	FD 委員会	100.0%
4	8月23日(木) 16:00～16:30	講義室 4	● 研修報告会「2018 年度大学新任教員のための研修会」 1. 看護系私立大学とは 助手　金谷 優輝 2. 看護系私立大学の教員になるには 助手　添田 咲美 3. 若手看護教員のための FD ガイドラインについて 助手　佐藤 つかさ	FD 委員会	66.6%
5	9月10日(月) 13:30～15:30	講義室 1	● 看護研究における倫理的配慮 北里大学医学部附属医学教育研究開発センター　医学原論研究部門 齋藤 有紀子　氏	倫理委員会 FD 委員会	76.2%
6	10月16日(火) 13:00～13:30	事務室	● 「ケア・スピリット」について理解を深めよう ― SD 研修会 1. ケア・スピリットについて 学長　清水 哲郎 2. 平成 29 年度研究成果報告 講師　石井 真紀子	FD 委員会	100.0%
7	10月19日(金) 14:40～16:00	演習室 1・2	● ナーシング・グラフィカ説明会 メディカ出版　須原丈智　氏	学内共同研究班(タブレット)	78.3%

回	月日	場所	内容	担当	出席率
8	11月15日(木) 13:30～15:00	演習室1・2	● 成績不振学生への学修支援 1. 成績不振学生の課題を共有する 2. 成績不振学生の学修支援の方策を検討する	教学委員会 FD委員会	95.7%
9	11月29日(木) 13:00～14:00 11月30日(金) 15:00～16:00	地域交流室	● 一次救命処置講習会	防火防災・環境保全委員会	95.0%
10	1月18日(金) 10:30～11:30	大会議室	● 研修報告会（FD・SD研修会） 1. 自大学の強みや使命を活かすCQI 講師　石井 真紀子 2. 看護師の特定行為研修説明会報告 准教授　土田 幸子 3. 平成30年度 学生生活にかかる喫緊の課題に関するセミナー 学務課　伊藤 庸子	FD委員会	73.6%
11	2月18日(月) 14:00～15:00	情報処理室	● FDマザーマップについて 1. FDマザーマップの活用について 2. FDマザーマップ・支援データベースへの登録、評価	FD委員会	62.5%
12	2月18日(月) 15:30～17:00	講義室3	● タブレット教育方法FD 特任講師　大井　慈郎	学内共同研究班（タブレット）	78.3%
13	2月28日(木) 13:00～14:00	大会議室	● 2018年度実習指導反省会 1. 教員と臨地実習指導者の役割について　学部長　濱中 喜代 2. インシデントの共有	実習委員会	90.5%
【通年】 6月28日（木）～ 2月28日（木）まで 第2・4木曜開催、 各回所要時間:1時間程度（計16回）		講義室4	東大インタラクティブ・ティーチング	FD委員会	毎回 2～5名 参加

5) 授業評価アンケートを実施し授業内容の改善に向けたデータを提示する

臨地実習と演習科目（基礎ゼミナール）以外の全開講科目について、授業評価アンケートを実施した。

前期分については結果をまとめホームページ上に公開した（資料）。後期分は集計を終えまとめの段階にある。

今年度は2学年が在籍ということもあり、昨年と比較すると対象科目数が増えたため、アンケートの実施は複数の委員で体制を整え実施した。次年度は3学年の体制になるため、アンケート実施体制を検討する必要があり、次年度の課題とする。

6) 本学の実態に沿った体系的な FD・SD を構築するための情報収集および検討を行う

昨年度の課題として、研修会後に実施するアンケート結果を十分に検討し計画的に FD・SD を実施する、ということを掲げていたが、結果として十分ではなかった。また、これについては「研修会の回数が多い」「その時の話題での開催になっていないか」、という意見が寄せられていたことから、次年度は年度当初の時点で、開学 2 年間の実績をもとに、おおよその年間計画を立案することを課題とする。

特に 3 年目以降は各領域の臨地実習指導のため、教員が学内に居られる期間が限られてくることから、計画的に FD・SD を開催することが必要となってくる。

7) その他

若手教員を対象とした、オンライン講座（東京大学配信）を 6 月 28 日（木）～2 月 28 日（木）にかけて 16 回開催した。テーマは「インタラクティブ・ティーチング」で、アクティブ・ラーニングや学習者の心理、クラスデザイン、シラバスの書き方等であり、特に新任教員に有意義で活用の可能性が高い内容であった。今年度の参加者は 4 名で昨年と比較すると減少したが、ほぼ全員が毎回出席していた。

最終日には参加の証明として学長より修了証を授与した。

好評であったことと次年度も新たな教員が着任する予定から、特に若手教員向けに開講する予定である。

昨年度、大学として契約した FD マザーマップ®[1]については、本格的な検討・活用には至らなかったため、次年度の課題とする。

5. 次年度に向けた課題

1) 下記の内容について FD・SD の視点で本学の現状を分析し、ニーズに合った研修会を計画的に開催する。

(1) 「ケア・スピリット」を学生の内に涵養するための教育方法

(2) 各委員会で希望する研修会の開催支援（もしくは共同開催）

(3) 外部で開催の研修会への教職員の派遣

2) FD マザーマップ®の活用

3) 授業評価アンケートの検討（実習、演習科目について）

以上

[1] 本学の FD 体制を構築する目的で FD マザーマップ®を平成 30 年に導入した。

資料

平成 30 年度前期 学生を対象とした授業評価アンケート結果

1. 概要

授業内容の精選・改善により本学全体の教育の質の向上を図る目的で、学生を対象とした授業評価アンケートを実施した。対象科目は平成 30 年度前期に開講した科目のうち、実習科目及び一部の演習科目を除いた 27 科目であり、アンケート内容と結果を公開する。

2. 対象科目：27 科目

	1 年生	2 年生
基礎科目（9 科目）	探求の基礎、情報処理、対人コミュニケーション、人間と心理、地域の文化、暮らしの科学	英語Ⅱ、家族という社会、憲法
専門基礎科目（8 科目）	自然科学、環境生態学、生化学、形態機能学（解剖学）、形態機能学（生理学）、ヘルスアセスメント	疾病治療論Ⅱ、臨床栄養学
専門科目（10 科目）	看護学概論、基礎看護援助論	看護倫理、療養援助技術論、看護過程論、成人看護援助論、老年看護援助論、母性看護学概論、小児看護学概論、精神看護学概論

3. 実施方法

1） 学生を対象とした授業評価アンケート（別紙 1 の 2）

(1) 実施日時

各科目の授業最終回の終了 5 分前（期末試験の前）

(2) 内容

① 学生自身の取り組み（授業に臨む姿勢や態度、自己学習、授業を受けるマナーなど）4 項目

② 授業の内容（量、難易度、満足感など）6 項目

③ 授業の技法（教員の話し方、教材や板書の使い方、資料の活用など）6 項目

④ 総合評価（教員の熱意、到達目標の達成具合、授業に対する満足感など）4 項目

⑤ この授業を履修してよかった点とその理由（自由記述）

⑥ この授業を履修して改善してほしい点とその理由（自由記述）

※ ①～④については4段階評定（4：はい、1：いいえ、その中間に2と3を設ける）で回答を求めた。点数が高い方が評価も高い。

※ 実施にあたり、アンケートの目的、結果は統計処理により個人の匿名性が保たれること、答えたくない内容には答えなくてもよいことを説明し、アンケートへの回答をもってこれらの内容に同意したものと判断した。また一教員に対して授業内容とは関係のない、批判的もしく中傷ともとれる内容の記載が過去に見られたことから、自由記述の内容は担当教員に知らされるため、節度をもった書き方をするように説明を加えた（別紙1の1)。

(3) アンケートの配布・回答・回収はGoogle Formsで行った。

2) 授業評価アンケートに対する担当教員からの回答

(1) 方法

集計したアンケート結果（別紙3）と自由記述の内容を科目担当の教員に配布し、下記の内容で回答を依頼した。

(2) 回答内容（別紙2)

① 学生による授業評価アンケートからみた問題点・課題

② 受講している学生の状況と課題等

③ 次学期以降へ向けた取組み（改善策）

④ 授業評価アンケートに対する要望、意見

4. 結果

1) 授業評価アンケート（別紙3の1、3の2、3の3)

アンケートの回答率は61.0%～100.0%と、幅があった。中でも回答率61.0%の科目が3科目あった。回答率が低い要因として、授業が終了時刻ギリギリまで終わらなかったためアンケートに回答する時間がなかったことが考えられた。特に今回は次の授業への移動や、最終（5限目）の授業の場合、電車やバスの時刻が気になり、いずれも回答する余裕がなかったことが考えられ、今後に向けた対応が必要である。

(1) 学生自身の取り組みについて

① 全体の平均は3.55であり、科目区分で比較すると専門基礎科目（3.59)、専門科目（3.56)、基礎科目（3.51）の順であった。

② 項目間を比較すると、予習・復習などの自己学習への取り組みは3.34と最も評価が低く、授業マナーを守れているかという項目は3.70で最も評価が高かった。

(2) 授業の内容について

① 全体の平均は3.54であり、科目区分で比較すると基礎科目（3.64)、専門科目（3.53)、専門基礎科目（3.42）の順であった。

② 授業の難易度が適切かに関しては6項目中最も評価が低く（3.44)、3つの科目区分の中では専門基礎科目の評価が低かった（3.29)。

③ 授業前後の課題の量に対する評価は、科目区分による差はほとんどなかった（全平均3.57、基礎科目3.69、専門基礎科目3.50、専門科目3.55)。

(3)　授業の技法について

①　全体の平均は 3.60 であり、科目区分で比較すると基礎科目（3.70)、専門科目（3.55)、専門基礎科目（3.53）の順であった。

②　項目間を比較すると、教室等の環境整備が最も高かった（全平均 3.71、基礎科目 3.77、専門基礎科目 3.68、専門科目 3.67)。

(4)　総合評価

①　全体の平均は 3.57 であり、科目区分で比較すると基礎科目（3.65)、専門科目（3.55)、専門基礎科目（3.48）の順であった。

②　教員の熱意に対する評価が最も高かった（全平均 3.69、基礎科目 3.76、専門科目 3.66、専門基礎科目 3.61)。

③　学生自身が到達目標を達成できたか、については評価が低かった（全平均 3.46、基礎科目 3.57、専門科目 3.44、専門基礎科目 3.36)。

(5) 学年間の比較をすると（別紙 3 の 2、3 の 3)

①　「1.学生自身の取り組み（4 項目)」全体の平均は 1 年生が 3.51 で 2 年生が 3.55 であった。項目で比較すると「授業の予習・復習などの自己学習をしましたか」で 1 年生の平均が 3.19、2 年生は 3.48 であった。また「学生としての役割（積極的な発言、協調性等）は果たせましたか」は、1 年生の平均が 3.46、2 年生は 3.56 であった。全体平均とこの 2 項目は、2 年生の評価が高かった。

②　「2.授業の内容について（6 項目)」全体の平均は 1 年生が 3.48 で 2 年生が 3.54 であった。項目で比較すると「授業の難易度はあなたにとって適切でしたか」は、1 年生の平均が 3.38、2 年生は 3.49 であった。「毎回の授業のねらいは明確でしたか」は、1 年生の平均が 3.48、2 年生は 3.62 であった。「毎回の授業の内容は興味・関心が持てるものでしたか」は、1 年生の平均が 3.46、2 年生は 3.61 であった。「授業を受け満足感はありましたか」は、1 年生の平均が 3.44、2 年生は 3.61 であった。全体平均とこの 4 項目は、2 年生の評価が高かった。

③　「3.授業の技法について（6 項目)」全体の平均は 1 年生が 3.57 で 2 年生が 3.60 であった。項目で比較すると「教室等の環境、整備は適切にされていましたか」を除く 5 項目については、差は少ないものの 2 年生の評価が高かった。

④　「4.総合評価（4 項目)」全体の平均は 1 年生が 3.53 で 2 年生が 3.57 であった。どの項目も 2 年生の評価が高かった。

傾向として、全体的に 2 年生の評価が高かった。2 年生の過去のデータを遡ると「授業の予習・復習などの自己学習をしましたか」については、1 年次前期が 3.21、1 年次後期には 3.35 で今回が 3.48 であり、僅かずつではあるが値が上昇している。「学生としての役割（積極的な発言、協調性等）は果たせましたか」についても 3.32（1 年次前期)、3.52（1 年次後期)、3.56（今回）と上昇している。これらの結果から 2 年生は 1 年生の学修体験を通して、予習や復習などの自己学習が習慣化し、大学生としての授業に臨む態度も定着したと考える。また「毎回の授業のねらいは明確でしたか」を遡ると、3.44（1

年次前期)、3.57（1年次後期)、3.62（今回）と僅かずつではあるが上昇している。よって授業のねらい(目標)に関心をもってする出席する傾向が2年生の中に出てきたことが推察される。

2) 授業改善に向けた今後の課題に対する担当教員からの回答

(1) 受講している学生の状況と課題等

① 集中して授業に臨んでいた

② 概ね受講態度は良好であった

③ 遅刻（特に1限目の授業）や欠席が目立った

④ 寝ている学生が若干いる

⑤ 私語が目立った

⑥ まじめだが全体的に発言に消極的で受け身の学生が多い

⑦ 高校で修得している知識に差があり、この差が論理的思考力の差につながるのではないか

⑧ 学修の進捗状況に差がある

⑨ 予習・復習が効果的に行われていない

⑩ 双方向の授業展開ができなかった

⑪ グループ学習の前提である個人学習に差がある

⑫ グループワークで活発な意見交換が行われない

⑬ 到達目標に達していない学生がいる

⑭ 「与えられる」ことに慣れすぎ「自分で獲得する」という考え方に乏しい印象

⑮ 学習に時間をかけず、できるだけ短時間に「効率」よく知識を得たいという態度が気になる

(2) 学生による授業評価アンケートからみた問題点・課題（改善策）

複数の教員が担当する科目では教員により教え方や説明が異なるという意見があり、これに対して教員間での授業内容や教授法の擦り合わせが必要との回答が寄せられた。また内容が難しい評価に対して、学習進度と学生の理解度を考慮した授業内容の精選を検討するとの回答が寄せられた。さらに学生自身が授業の到達目標に到達していないと捉えていることを問題点として挙げ、改善策を検討するという意見が寄せられた。

授業内容や技法に関する改善点では、見やすい資料の工夫や分かりやすい説明、話すスピードの工夫が挙げられていた。

教室や設備等の環境に対する評価は概ね良好であったが、授業中に一部の設備面での不具合が生じていた。これについては対策が既に講じられていた。

別紙１の１

授業アンケートについて

本学では、授業の精選・改善を目的として各科目の最終回に授業評価アンケートを行っています。

授業内容についてどう感じたか、ご自身が授業に対してどのように取り組んだかを素直に答えてください。

このアンケートの回答は統計的に処理されます。本アンケートの回答により、個人が特定されたり、成績に関係したりすることはありません。また、本アンケートは本来の目的以外には使用しません。

自由記述欄に書かれた内容は、担当教員に伝えられます。節度を備え、授業の改善につながる建設的な意見になるようにしましょう。

【アンケートの実施方法】

アンケートは、Google Forms を用いて行います。

1. 総務課より送られたメールの URL からアンケートを開きます。
2. 各項目について 4 段階評価（4：はい⇔1：いいえ）の中から選択し、回答します。
3. アンケートの最後に、この授業の良かった点や改善点を記述する欄があります。今後の授業の改善のため、ご意見がありましたらお書きください。

岩手保健医療大学　総務課

別紙１の２

授業評価アンケート

【科目名：大学で入力】【授業コード：大学で入力】

この授業評価は、本学の授業と教育システムを改善するための参考資料となるものです。学生の皆さんからのご意見を取り入れるためにご協力をお願いします。なお、このアンケートは成績評価等には一切影響ありません。

＊教員が複数で担当している場合は概ねの状況で判断し、特記事項については自由記述欄に記入してください。

以下の質問について、あてはまると思う番号を選択してください。

１．学生自身の取り組み いいえ				はい
１）意欲的に授業に参加しましたか	4	3	2	1
２）授業の予習・復習などの自己学習をしましたか	4	3	2	1
３）学生としての役割（積極的な発言、協調性等）は果たせましたか	4	3	2	1
４）授業を受けるマナー（遅刻、居眠り、私語、携帯電話等をしないこと）を守れましたか	4	3	2	1
２．授業の内容について				
１）授業の内容は量的に適切でしたか	4	3	2	1
２）授業前後の課題の量は適切でしたか	4	3	2	1
３）授業科目の難易度はあなたにとって適切でしたか	4	3	2	1
４）毎回の授業のねらいは明確でしたか	4	3	2	1
５）毎回の授業の内容は興味・関心が持てるものでしたか	4	3	2	1
６）授業を受け満足感はありましたか	4	3	2	1
３．授業の技法について				
１）教員の話し方は適切でしたか	4	3	2	1
２）教材（視聴覚教材を含む）や板書の使い方は適切でしたか	4	3	2	1
３）授業のテキストや資料の活用は適切でしたか	4	3	2	1
４）課題やレポートと授業内容の関係は適切でしたか	4	3	2	1
５）発言や質問の機会は適切でしたか	4	3	2	1
６）教室等の環境、整備は適切にされていましたか	4	3	2	1

４．総合評価				
１）教員の熱意を感じられましたか	４	３	２	１
２）あなたはこの授業科目の到達目標を達成できたと思いますか	４	３	２	１
３）この授業科目で得たものは多かったと思いますか	４	３	２	１
４）総合的に考えてこの授業科目に満足できましたか？	４	３	２	１

この授業科目を履修して、よかったと思う点を、その理由とともに書いてください。

この授業科目を履修して、今後改善してほしいと思う点を、その理由とともに書いてください。

ご協力ありがとうございました。

別紙 2

授業評価に対する回答票

授業科目名：		授業コード：
担当教員氏名		
開講年度・時期	平成　　年度　　前期・後期・通年（どれか 1 つを囲む）	

1. 学生による授業評価アンケートからみた問題点・課題

2. 受講している学生の状況と課題等

3. 次学期以降へ向けた取組み（改善策）

4. 授業評価アンケートに対するご要望、ご意見等がございましたらご記入願います

平成　　年　　月　　日までにご返答願います。

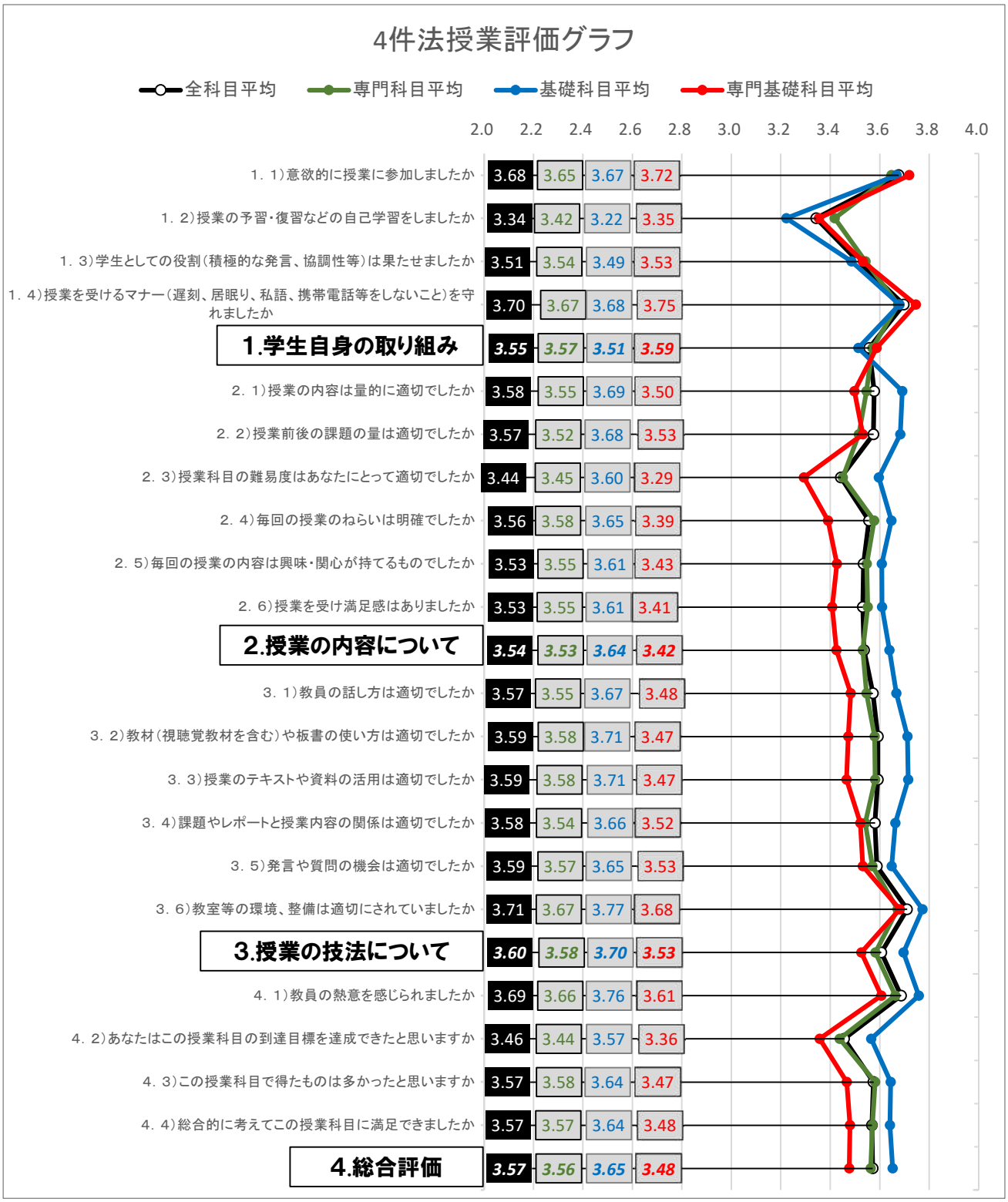
別紙３の１

授業評価アンケートまとめ

【全学年】

授業評価対象科目数：27

基礎科目数：9　専門基礎科目数：8　専門科目数：10

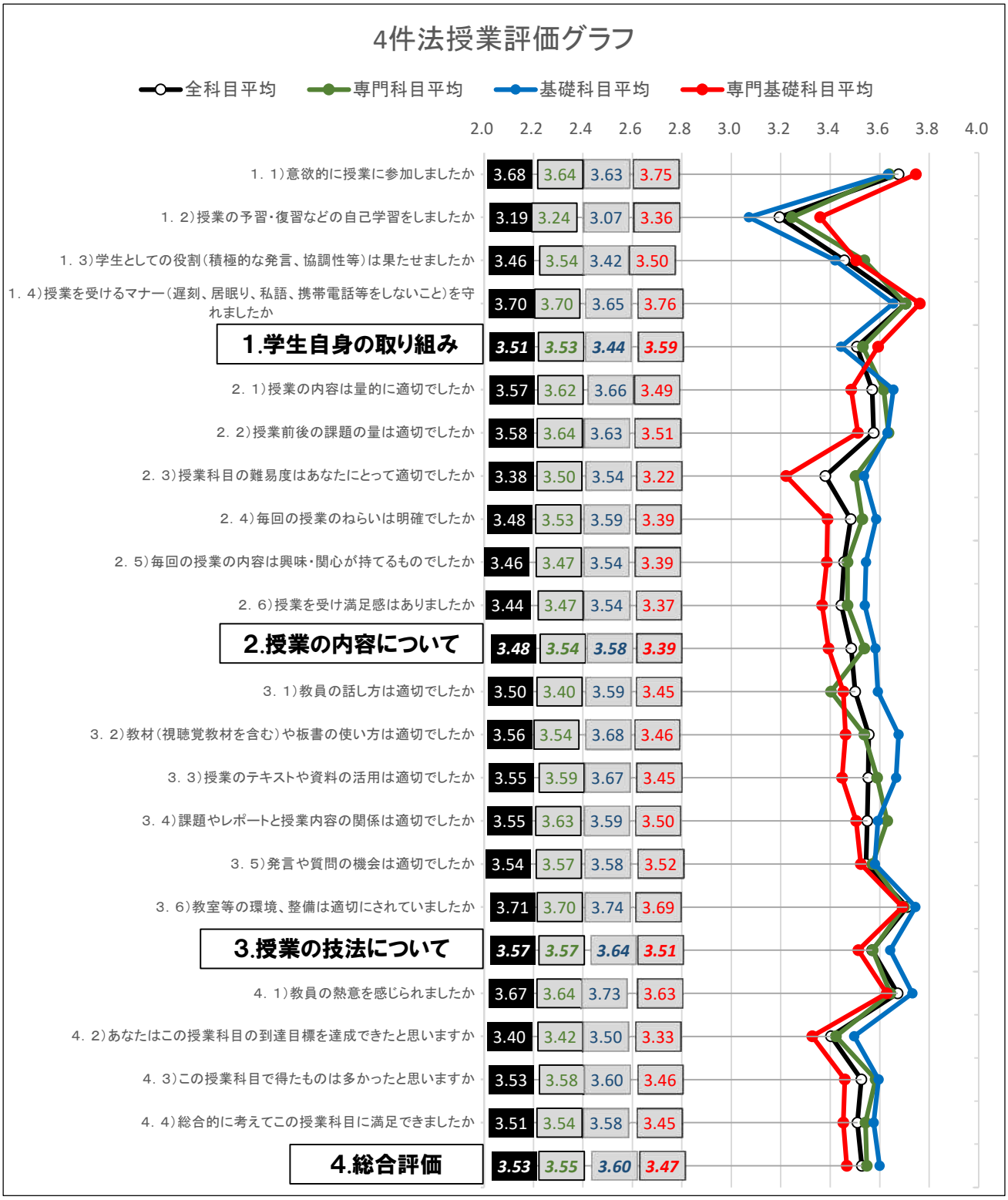


【1 学年】

授業評価対象科目数：14

基礎科目数：6　専門基礎科目数：6　専門科目数：2

別紙 3 の 2

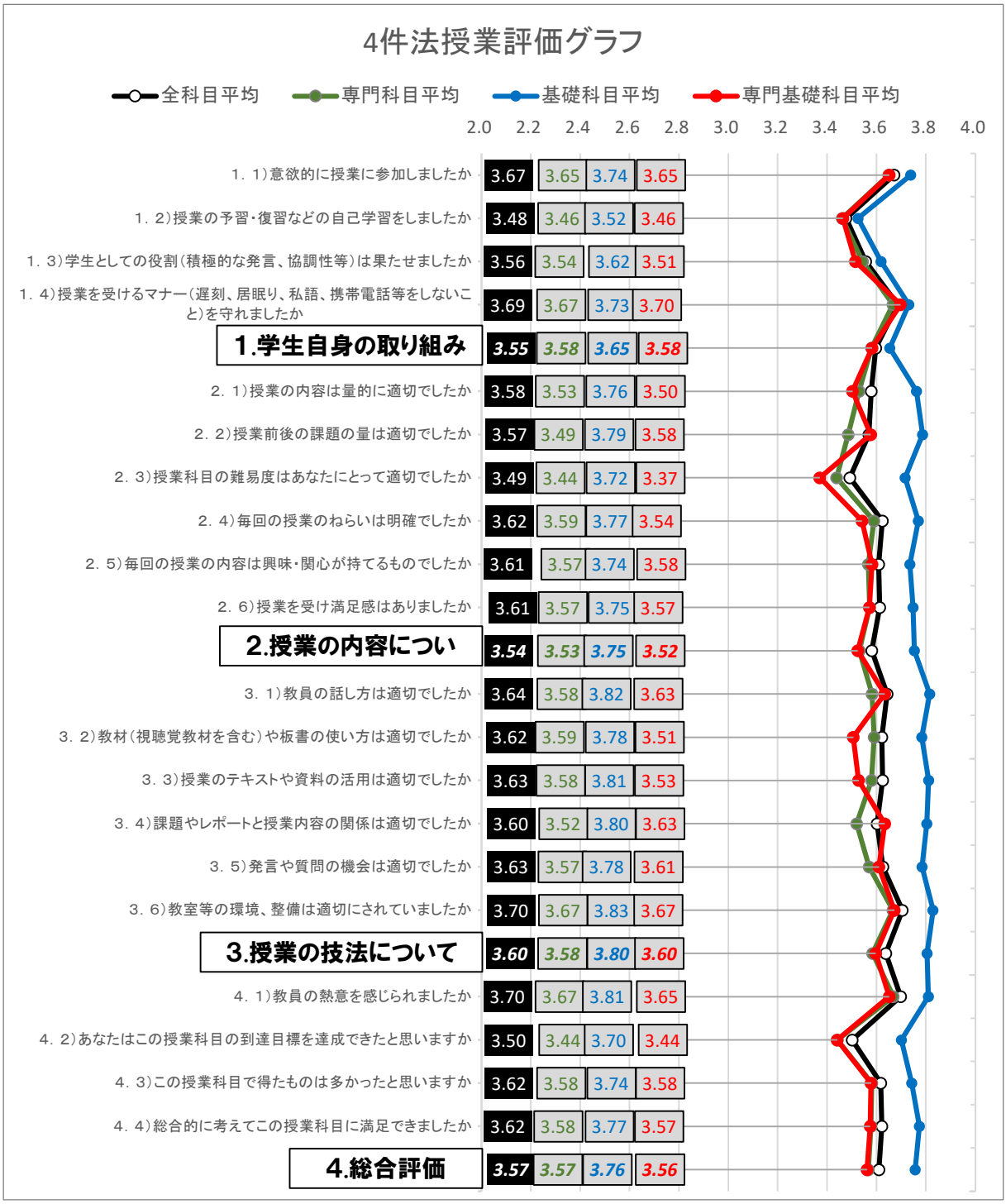


【2 学年】

授業評価対象科目数：13

基礎科目数：3　専門基礎科目数：2　専門科目数：8

別紙 3 の 3



2018 年度　実習委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：江守陽子

委　員：土田幸子、木内千晶、作間弘美、齋藤史枝、甲斐恭子、長南幸恵、青柳美樹

：佐々木美宇（学務課）

2.　委員会の開催

委員会は 8 月・12 月を除いた月 1 回開催し、計 9 回開催した。

5/21、6/18、7/23、9/18、10/22、11/19、1/10、2/25、3/18　以上 9 回

3.　委員会活動目標

1）実習施設との連絡調整、関係の強化を図り、臨地実習を効果的に実施する。

2）新たな実習施設の開拓、より教育的な実習形態を模索し、実習環境を整える。

3）実習指導教員および臨地実習指導者の指導力向上を図る。

4）完成年度以降の臨地実習体制の準備を開始する。

4.　活動内容と点検評価

1）臨地実習の計画、運営、評価を以下のとおり行った。

（1）実習施設との連絡調整、関係の強化を図り、臨地実習を効果的に実施するために、各実習の準備を進めた。

＜2018 年度早期体験実習の実施・評価＞

臨地実習に関する教員オリエンテーション：4 月 4 日、13～15 時、１F 会議室

臨地実習に関する学生オリエンテーション：5 月 11 日、8 時 50 分～12 時、第 1 講義室

教員評価会議：6 月 25 日、15 時～16 時 30 分、１F 会議室

早期体験実習については 78 名の全学生が受講し、合格となった。

＜2018 年度生活援助実習の実施・評価＞

生活援助実習に関する教員オリエンテーション：11 月 5 日、13～14 時 30 分、大会議室

生活援助実習に関する学生オリエンテーション：12 月 7 日、13～15 時、第 1 講義室

教員評価会議：2 月 26 日、10～12 時、演習室 1・2

生活援助実習では 78 名全員が出席日数を満たし、実習評価の対象となり合格となった。インフルエンザの流行期と実習時期が重なるため、感染予防の指導の徹底が必要である。

＜2018 年度療養援助実習Ⅰの実施・評価＞

臨地実習に関する教員オリエンテーション：4 月 4 日、13～14 時、１F 会議室

臨地実習に関する学生オリエンテーション：5 月 19 日、9～11 時、第 1 講義室

教員反省会：7 月 10 日、16 時 30 分～17 時 30 分、１F 会議室

療養援助実習Ⅰについては、8 病院 12 名の教員で教育・指導に当たった。欠席者 2 名、

遅刻者 2 名があったが、全学生が受講し、そのうち 1 名が不合格となった。
＜2018 年度療養援助実習Ⅱの実施・評価＞
臨地実習に関する教員オリエンテーション：11 月 5 日、13～14 時、4F 演習室
臨地実習に関する学生オリエンテーション:11 月 12 日､14 時 40 分～15 時 40 分、第 2 講義室
実習評価会議：2019 年 1 月 21 日、13～14 時 30 分
療養援助実習Ⅱでは受講生 70 名中３名の学生が病欠、早退３名、遅刻 8 名が報告された。また、看護過程展開を中心とした実習であったが、アセスメントや看護計画立案に難航する学生が見られた。学生 3 名が単位認定不可と判定され 65 名が合格となった。

＜2019 年度早期体験実習の実施予定＞
臨地実習：2019 年 5 月 13 日～17 日
＜2019 年度生活援助実習の実施予定＞
臨地実習：2020 年 1 月 27 日～2 月 7 日
＜2019 年度療養援助実習Ⅰの実施予定＞
臨地実習：2019 年 5 月 20 日～5 月 31 日
＜2019 年度療養援助実習Ⅱの実施予定＞
臨地実習：2019 年 12 月 9 日～12 月 20 日
＜2019 年度領域別実習の実施予定＞
臨地実習：2019 年 6 月 10 日～12 月 21 日
次年度実習に向けての準備は順調に進められている。

(2) 臨地実習の学生配分を検討した。
2018 年度早期体験実習、生活援助実習とも基礎看護学領域中心に、学生の現住所を参考に学生の配分を決定した。
療養援助実習Ⅰ、療養援助実習Ⅱについては、成人看護学領域、高齢者看護学領域を中心に､早期体験実習､生活援助実習を考慮して学生のグループを決定した。
領域別実習では、学生数 63 名であることからグループを 12 とし、グループ内男子学生数、学生の実習支援必要度、学生の既実習施設、自宅住所等を勘案し、学生を配分した。

(3) 2018 年度実習指導者会議を開催し運営した。
2019 年 3 月 6 日、14～16 時 30 分、第 1 講義室にて開催した。
病院・施設参加者、23 施設、46 名（当日欠席者 3 名）、本学教職員 24 名、
計 77 名の出席を得た。本年度実習報告、次年度実習説明を中心に、本学の教育方針や臨地実習教育を中心に討議し、理解を共有した。

(4) 臨地実習中の事故および感染等の対応・対策を再検討した。
2019 年度実習要項に掲載済み。実習委員長に報告し、実習委員長から学部長へと

いう流れを、責任領域長から実習委員長・学部長への連絡を同時に行う方式に改めた。本年度臨地実習において、いくつかのヒヤリ・ハット・アクシデントの報告と、検討すべき教員・学生間指導体制、教員・臨床指導者間指導分担体制等の課題が浮上した。実習指導教育に慣れない教員と、複数の管理を異にする病院施設での実習のため、共通の認識・価値観を造成していく必要がある。

(5)　臨地実習の教育内容、単位等の見直し、再編、将来計画を検討した。
本年度は、1 年次学生と 2 年次学生の実習が進行した。
生活援助実習の時期に、2 年次学生の講義が入っていないこと、後期試験後の追・再試験日程が余裕をもってとることができないこと等の課題が浮上した。
また、2019 年度の領域別実習については、学生総数に伴い 12 グループに変更することになった。

(6)　臨地実習中の欠席･遅刻連絡および事故等の連絡体制、対応･対策を再検討した。
・臨地実習中の欠席・遅刻連絡は、現行では学生が大学に連絡し、大学から担当教員へ連絡する方法をとっているが、連絡の時間が遅すぎるため実習体制の変更が遅れるなどの弊害が出ている。学生から教員への直接の連絡が望ましい。
・緊急連絡の対応が遅れる可能性がある。

2)　新たな実習施設の開拓、より教育的な実習形態を模索し、実習環境を整えた。
(1) 本年度の実習施設と、次年度以降の実習施設の状況
＜2018 年度早期体験実習施設＞　病院：5　施設：11
＜2018 年度生活援助実習施設＞　病院：10
＜2019 年度早期体験実習施設＞　病院：5　施設 11
＜2019 年度生活援助実習施設＞　病院：10
＜2018 年度療養援助実習Ⅰ施設＞　病院：8
＜2019 年度療養援助実習Ⅰ施設＞　病院：8
＜2018 年度療養援助実習Ⅱ施設＞　病院：8
＜2019 年度療養援助実習Ⅱ施設＞　病院：8
＜2019 年度領域別実習施設＞
母　性：病院 2、子育て支援センター２
小　児：病院 2、保育園２
成人Ⅰ：病院 4
成人Ⅱ：病院 3
高齢者：高齢者福祉施設 5
精　神：病院３

(2)　2020 年度総合実習、在宅実習、地域看護実習、公衆衛生実習の準備を始めた。
総合実習については、共通実習目標を見直し微修正するとともに、それに沿って各領域で実習要項案を作成・実習施設の確保を開始した。1 領域およそ 8～12 人の学

生のための実習計画を準備することとした。ただし、次年度に限れば学生総数が 60 名余のため、1 領域 6～10 人となる予定。

3）実習指導教員および臨地実習指導者の指導力向上を図る目的で、研修を行った。
2019 年 2 月 28 日、13 時～15 時、大会議室において本学実習指導担当教員に対し、実習指導における教育体制の在り方および本年度発生した実習中の問題・課題について意見交換し、共通認識を持つ努力をした。

4）完成年度以降の臨地実習体制の準備を開始した。
・総合実習に関する教育目標および運営方法を検討した。
・臨地実習全体の教育内容、単位等の見直し、再編、将来計画を考えるまでに至らなかった。
・臨地実習の再編および中期将来計画を策定するまでには至らなかった。

5. 次年度に向けた課題

1） 臨地実習の計画、運営、評価
・次年度に始まる領域別実習の計画、内容の具体化、具体的運営
・次々年度に始まる在宅・地域・総合実習の準備

2） 臨地実習施設の再編、委嘱
・次年度に始まる領域別実習の施設の契約の締結
・学生数の増減に伴う実習施設数の調整
・実習施設として真にふさわしい施設の検討
・次々年度に始まる在宅・地域・総合実習の実習施設の開拓

3） 臨地実習の学生配分の検討
・早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・Ⅱの学生配分の検討
・次年度に始まる領域別実習の学生配分の検討
・教育的・経済的公正、公平な学生配分法の検討

4） 臨地実習指導者および指導教員の研修
・新任教員、臨床実習指導者に対する研修
・臨地における新任教員の実習指導体制の支援

5） 実習指導上の環境整備
・連絡のための携帯電話（PHS） の購入
・実習指導非常勤助手の確保
・実習病院（特に県立中央病院）での指導教員の休憩室確保
・実習病院へのコピー機の搬入

以上

2018 年度　地域貢献・国際交流委員会活動報告

１．委員会構成

委員長：竹本由香里

委　員：勝野とわ子、長南幸恵、甲斐恭子、作間弘美

庶　務：七尾明恵（総務）

オブザーバー：清水学長、濱中学部長

２．委員会の開催

委員会は原則月 1 回（5,9,1 月は除く）開催し、計 9 回開催した。

4/12、6/4、7/9、8/6、10/8、11/5、12/3、2/12、3/4　以上 9 回

３．委員会の活動目標

1）公開講座の企画、運営を行う。

2）地域交流室における地域貢献活動を支援する。

3）出前講義を推進する。

4）国際交流についての具体的な活動を検討する。

5）産学連携、高大連携、地方自治体との連携協定等に関して検討する。

４．活動内容と点検・評価

1）公開講座の企画、運営を行う。

（1）平成 30 年 7 月 28 日（土）にマリオスロード地区協議会の「サマーフェスティバル」参加企画として一般市民向け公開講座を開催した。

・1 講座 60 分の演習形式で「子どもの事故防止と救急処置～みんなの力で子どもを守ろう～」（担当：小児看護学領域）と「家庭でできる感染予防～実践しよう！正しいマスク装着と手洗いの方法～」（担当：基礎看護学領域）の 2 講座を開催し、他に血圧測定などの測定コーナーを企画した。参加人数はのべ 15 名であった。

・公開講座当日の運営は、担当領域の教員（地域貢献・国際交流委員兼務）、事務職員により行った。

・一般市民向け公開講座の広報活動は、委員会においてチラシを作成し、マリオスロード地区協議会の参加企業・町内会、本学学生等を通して配布した。

・参加者が少なかった要因として、サマーフェスティバル自体の盛岡駅西口への人の流れが悪く全体的に盛況とはいえないものであったこと、対象にあった広報活動が行えていなかったこと、他大学とのイベントと重なっていたことなどが挙げられ、時期と広報活動の検討が必要であった。

（2）平成 30 年 11 月 10 日（土）に看護等医療従事者向け公開講座「今から最期までの意思決定支援」（講師：清水学長）を開催した。

・120 分の講義形式で開催し、参加人数は 83 名、81 名からアンケートを回収（回収率 97.6%）できた（資料「2018 年度第 2 回公開講座アンケート集計結果」参

照)。

・看護等医療従事者向け公開講座の広報活動は、委員会においてチラシを作成し、岩手県内の医療機関、看護系教育機関、実習施設等 91 施設に案内を送付した。関係施設の勤務表作成時期を考慮し、早めに案内を送付できたことで参加者を集めることができた。

・公開講座当日の運営は、地域貢献・国際交流委員と事務職員により行った。

・アンケート結果からは清水学長による継続した講座を希望する記述が多く、医療従事者へ有益な学習の機会を提供することを目的に、次年度以降も継続して開催していくこととした。

2）地域交流室における地域貢献活動を支援する。

・年度当初に地域交流室を活用した地域貢献活動企画を教員から募り、昨年度から実施している「学長が担当する医療・ケア従事者との懇話会」と、今年度の企画として「亡くなった方への対処方法～面影を取り戻すには～」が開催された。

・「学長が担当する医療・ケア従事者との懇話会」（担当：清水学長）は昨年度から継続的に開催され、今年度は 5 月（テーマ：臨床倫理事例検討「心不全終末期患者の心肺蘇生について考える」、参加人数 11 名)、12 月（テーマ：厚労省「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン（改訂)」について、参加人数 11 名)、1 月（テーマ：厚労省「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン（改訂)」について Part2、参加人数 8 名）の 3 回開催された。広報活動は大学ホームページ・SNS への掲載が中心である。

・「亡くなった方への対処方法～面影を取り戻すには～」（担当：齋藤助教）は 9～11 月に 3 回（1 回/月）開催され、2 名の参加があった。広報活動は大学ホームページ・SNS への掲載、実習施設（病院）への案内の送付（チラシ同封）により行った。

・各教員による地域貢献活動に係る支出は個人研究費を財源とするが、案内を送付する通信費は大学運営費からの支出とした。

・次年度も引き続き地域貢献活動企画を募り、必要時、地域交流室使用の調整、広報・運営の支援を行う。

3）出前講義を推進する。

・「岩手保健医療大学出前講義実施要項」により出前講義の申し込みを受け付け、実施した。

・今年度は教授・准教授・講師・助教の各教員から講義可能なテーマを「一般向け」「中学・高校生向け」「医療従事者向け」と対象者別に提出してもらい、ホームページに再掲載した。

・対象者を拡大するために県内の中学校にも周知を図ることとし、チラシ 2 種類を作成して岩手県内の中学校 118 校に案内を送付するとともに、高校訪問時に配布し、ホームページにも掲載した。

・今年度は 8 件の依頼があり、一般市民、保健福祉医療従事者、高校生を対象とした出前講義を実施した（資料「2018 年度出前講義の実績」参照)。昨年度から 6 件依

頼が増えており、本学の取り組みが徐々に周知されていると評価できる。

4）国際交流についての具体的な活動を検討する。

・1, 2 年生（全学生）を対象とした海外での看護活動経験のある講師（元 Nihon Clinic 看護師長：浪原周子氏）による招聘講演会「アメリカの看護師の役割と機能～日系クリニックでの看護実践を通して～」を 12 月 7 日（金）に企画・開催した。学生はアメリカと日本の医療体制の違い、看護師の役割等について関心をもって講演を聞いていた。

・海外研修等の経験のある教員（作間助教）による特別講義「『勢いでやってみた。カナダでの教員チャレンジ』―カナダでの看護と教育方法を学ぶ―」を平成 31 年 2 月 13 日(水)に企画・開催した。学生は自由参加とし、1 年生 25 名、2 年生 7 名、計 32 名の参加があった。学生は、日本との看護教育の違いやカナダの看護学生の看護学を学ぶ意識の高さ等について関心をもって聞いていた。参加人数が少なかった理由として、後期試験前であり試験勉強を優先していたことが考えられるため、次年度以降に計画する際は試験日程や時間割を考慮し、多くの学生が参加できる日程に調整する必要がある。

・次年度も引き続き、海外研修等の経験のある教員による特別講義を企画し、学生の国際交流への意識を高める活動を継続する。

5）産学連携、高大連携、地方自治体との連携協定等に関して検討する。

・高大連携について、高校への出前講義の件数は 1 件（秋田県立大曲高等学校）であり少なかった。今後は広報活動を行い、件数を増やしていきたい。

・学長が盛岡市社会福祉協議会を母体とした盛岡駅西口包括支援センターと互いの概要・実情についての情報交換をし、今後の地域交流・協力の可能性について意見交換を行った。今後は、どのような連携が可能であるか検討していく。

5．次年度に向けた課題

1）公開講座の企画運営

次年度は、①学長による医療従事者を対象とした公開講座、②老年看護領域による公開講座（時期・対象等は領域に一任）の 2 講座を開催する。公開講座の開催日は、学会や盛岡市内のイベント等の開催日との重複を避けて決定することが必要である。また、一般市民を対象とした公開講座を企画する場合は対象を明確にし、その対象に合った広報活動が重要となる。盛岡市内で配布されている情報誌への掲載や他団体等との連携など、今後の広報活動のすすめ方についても検討していく。

2）出前講義の推進

大学ホームページに 2018 年度実績を掲載し、本学の取り組みとして周知を図る。また、広報委員会とも協働して高校訪問等で出前講義広報用のチラシを配布する。

３）国際交流に関する活動の継続

海外研修の経験のある教員による特別講義を継続し、学生の国際交流についての関心を高めていく。

４）産学連携、高大連携、地方自治体等との連携についての検討

他大学の状況について情報収集をしながら検討をすすめ、高大連携については出前講義の推進を行う。

以上

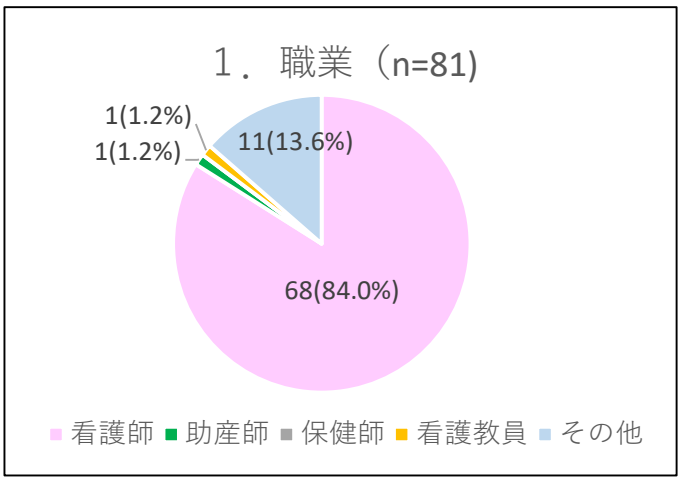
平成 30 年度医療従事者向け公開講座　アンケート集計結果

平成 30 年 11 月 10 日開催

83 人中 81 枚（回収率 97.6%）

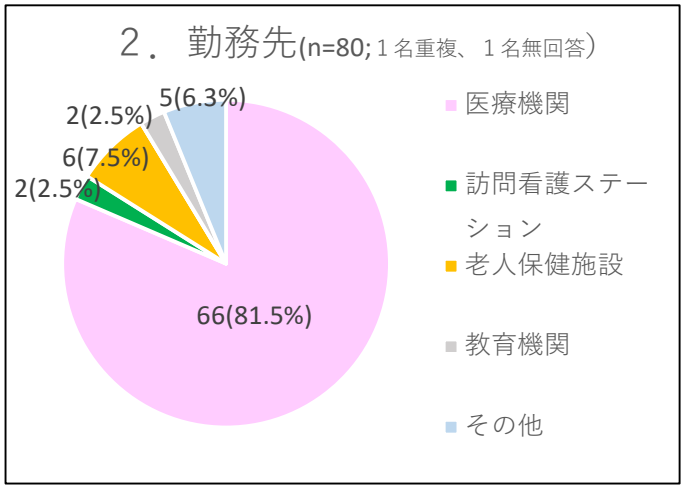
1．　あなたのご職業を教えてください

①看護師　68 名
②助産師　 1 名
③保健師　 0 名
④看護教員 1 名
⑤その他　11 名
（医師(1)、MSW(2)、作業療法士(1)、
ケアマネージャー(1)、
介助事業所運営／代表ケアマネ(1)、
NPO(1)、准看護師(1)、高校生(1)、無回答(2)



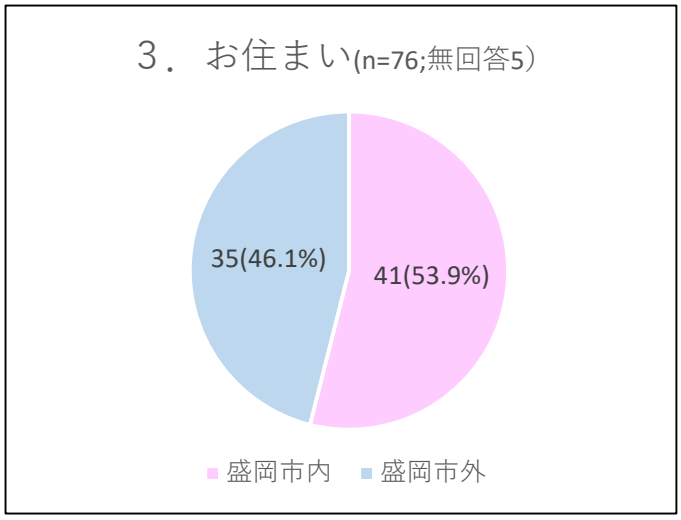
2．　あなたの勤務先を教えてください

①医療機関　66 名
②訪問看護ステーション　2 名
③老人保健施設　6 名
④行政機関　0 名
⑤教育機関　2 名
⑥その他　5 名
（養護老人ホーム(1)、介護事業所(1)、
NPO 法人(1)、無回答(2)）



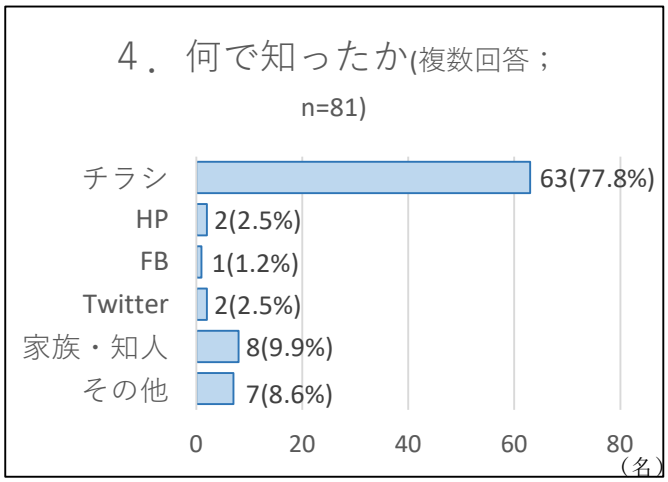
3．　あなたのお住まいを教えてください

①盛岡市内　41 名
②盛岡市外　35 名
・久慈市(1)、大槌町(1)、滝沢市(6)
八幡平市(1)、雫石町(1)、紫波町(1)
矢巾町(2)、花巻市(2)、北上市(2)
奥州市(4)、遠野市(1)、函館市(1)
※無回答 12



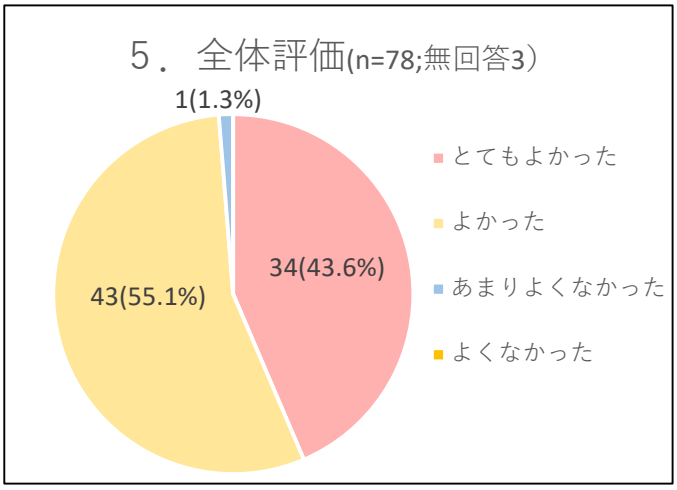
4．　あなたは今回の公開講座を何でお知りになりましたか？（複数回答可）

①施設に送付されたチラシ　63 名
②大学のホームページ　2 名
③大学の Facebook　1 名
④大学の Twitter　2 名
⑤家族・知人　8 名
⑥その他　7 名
（看護協会(2)、上司(1)、
職場の研修案内(１)、無回答(3)）



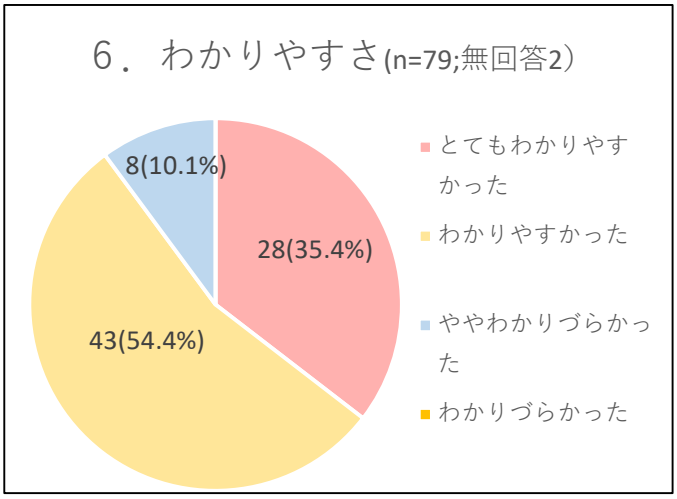
5．　今回の公開講座はいかがでしたか

①とてもよかった　34 名
②よかった　43 名
③あまりよくなかった　1 名
④よくなかった　0 名
※無回答 3 名



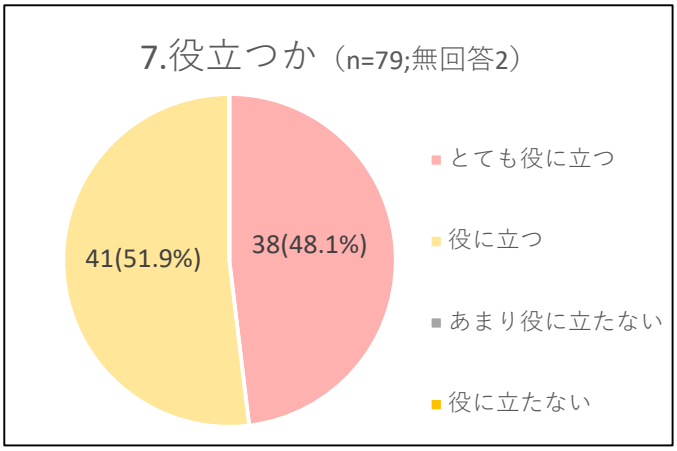
6．講演はわかりやすかったですか

①とてもわかりやすかった　28 名
②わかりやすかった　43 名
③ややわかりづらかった　8 名
④わかりづらかった　0 名
※無回答 2 名



7．講演内容はあなたに役立つものでしたか

①とても役に立つ　38 名
②役に立つ　41 名
③あまり役に立たない　0 名
④役に立たない　0 名
※無回答 2 名



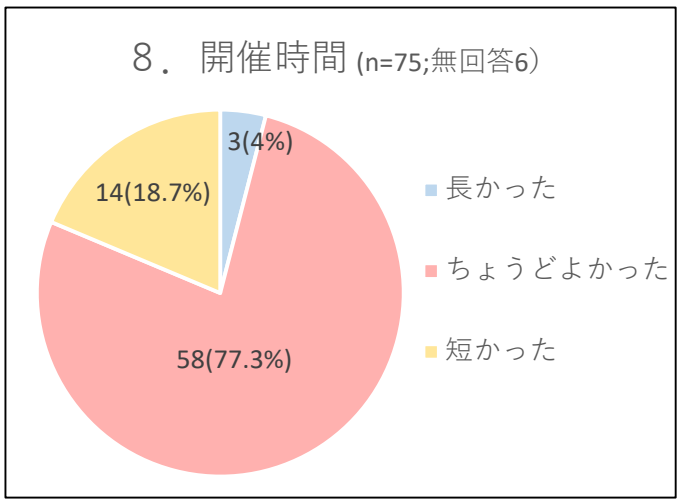
7．　開催時間（120 分）はいかがでしたか

①長かった　3 名

②ちょうどよかった　58 名

③短かった　14 名

※無回答 6 名



8．　全体を通してのご感想を自由にお書きください

・心づもり、ACP に取り組んでいるのでとても参考になりました。

・たくさんの人がこれを聞いて、興味を持って実践できればよいと思った。

・私達のような提供する側ではなく、一般市民への方々に浸透するまで何年かかるのかと思いました。そうなるために有効な手段も今のところ取られていないと思うので、病院、看護ではなくて本来もっと身近なメディアなどを通して浸透させてほしい

・中途半端な「決定の分業」は「責任の分業」だと思った。患者が本当に求めるのは「決めてほしい」という気持ちとそれで起こった結果を「間違えじゃなかったんです」という言葉だけだと思いました。

・アメリカ・イギリスからの考えの導入ではなく、日本独自のものを考案している方はいないのでしょうか。

・病院勤務ですが、これからも ACP について考えていかなければと思います。ありがとうございました。

・ACP についてまだわからないことがあり、聞きに来ました。やっぱり難しい。医療現場では、人生をどうするかというより、延命をどうするかと話がされているように感じている。生き方というのを考えるきっかけになったし、興味を持った。

・説明と合意形成のしくみ、考え方がやっと理解できたように思います。意思決定支援のためのコミュニケーションが大事ですよね

・ACP やエンドオブライフなど概念がいろいろあることを学べた。今日の学びを今後の実践に活かしたいと思う。ありがとうございました。

・養護老人ホームは、ほぼ自立の入所者の集まりです。まだまだ十分に考えることができる人が多くいる為、今年 4 月からその話題で取り組んでいる所です。気持ちの変化が多く、ゆっくり本人の気持ちを聞いている段階です。本日のご講演をお聞きして、大変うれしく思いました。今後も参加させていただきたいと思います。

・臨床フレイル・スケールは興味深かった。勤務する施設での意思決定支援の場面で活かしていきたいです。

・興味深い内容でしたので、また参加したいと考えています。

・これからの時代を知っておきたくて受講しました。とてもよかったです。

・とてもよかったです

・わかりやすくとても勉強になりました。ありがとうございました。
・意思決定支援の具体的方法
・ファシリテートの仕方
・ACP にとどまらない思慮の変遷を感じました
・今後の活動の中で生かせる内容であった
・貴重なお話を聞けて良い機会になりました。臨床の現場で働いていますが、今回のお話で感じたことを何か生かしていけたらと思います。
・意思決定プロセス　患者の人生の価値観や気持ち、家族の思いをくみ取ることが重要そのような意思決定はまだまだ不十分である
・医療現場で意思決定支援をしっかりとした看護観をもっていきたいと思っていました。とても参考になりました。まだまだ研鑽が必要です。
・自分が思っていたことが間違いじゃなかったと自信がもてた。当院の医師たちにも聞いていただきたいと思いました。もうちょっと聞きたかった。
・死を迎える患者さんやご家族と関わっていく中で、それぞれの立場の方の意志や価値観がなかなか引き出されることなくもどかしさが残ることがあり、何とか少しでも思いに沿った最後をむかえてほしいとずっと感じていました。そんな中で、この先生の講義を受講できたことはこれからの患者さん、ご家族はもとより、自分自身や家族への人生の考え方の基礎になると思います。
・透析に従事する看護師です。現在、外来通院している患者さんの最後の時をどのように関わるかを少しずつパンフレットなどを作成しております。患者さん、家族等にお話しをきかせてもらい、話し合いを行い合意を得て、対応しているのですが、まだまだ難しい事例が多いです。ご本人は最期を施設での居室と望んでも、苦しそうでみていられないし、訴えられたら困るからと…救急車を呼び、人工呼吸や無理なく CPR を行うケースが多いです。また、死亡診断書を書いてもらうなどの事務的な手続きの為だけに施設においておけないと入院を強く希望されるケースも多くあります。在宅の看護・介護に携わる方々にもっと深く考えていただきたいと思います。また、現在の日本の法的な問題も改善しないとせっかく話し合い尊重したい患者さんの希望、思いに沿えないことがままだあると感じております。難しいです…
・最期に対しての意識を改めて考えることができた。小さなことでもいい、本人が何をしたいかを大切にして、一緒に考えながら看護を提供していけるようにしたい
・医療職側からの説明そしてその説明を良くわかったうえで同意すること（してもらうこと）そして患者様の意思決定を大切にしていきたいと思いました。ターミナルの患者様もいるのでどのようなケアをしていくことがベストなのか患者様や家族様も含めて考えていけたらとも感じました。
・意思決定支援については課題も多く、難しい問題でもあると考えます。ACP,ACP と言いながら、うわべだけのケアにならないよう、私達医療者は注意深く意識して、ご本人、家族に接していく必要があると感じました。清水先生の熱意がとても伝わり、充実した時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
・現場での自身のジレンマ（他職種との対人援助に対する考え方の方向性の違いなど）を自分の中で整理する機会にも恵まれました（MSW の方）

・ACP について、事例や例を入れてお話しくださりイメージしやすかったです。活用の話も聞ければよかったと思います。
・素敵なお話を聞けて良かったと思っていますが遠くから来ていたので可能であれば資料の最後までお話を聞き理解したかったです（盛岡市外、場所は無回答）
・老健施設で働いている者です。ACP について最後まで聞きたいと思いました。
・最後まで聞ければよかった（2）
・最後まで聞きたかったです(笑)今後機会がありましたら受講します
・最後までスライドの話をしてほしかった。
・最後まで講座を聞きたかったのであと 1 時間くらい長くてもよかった。無料なのはうれしいです。
・もっと清水先生の講義を聴きたかったです。特に最後の「ACP の成果を活かす」についてももっとちゃんと聴きたかったです
・時間は守っていただきたいです。時間配分など。
・先生の言わんとするところは理解できる。ただプロセスのところがやや難しいか
・最後まで聞けなかったのが残念でした。シリーズ化して回数を増やすとか
・清水先生の講義を無料で学べたことに感謝します。ただ、内容が難しい印象があり、頭や心に入ってこなかった。
・実際の臨床場面での患者・家族との関わりについてどのように関わっていくか、声掛けを行うか、情報提供を行うか等、臨床で役立てられる知識も欲しかったです。

9．　今後受けたいと思う講座の内容、本学へのご要望等がございましたら自由にお書きください
・看護記録、看護計画について
・このような最新の情報や考え方を聞かせてほしい
・心不全末期の家族ケア
・ターミナルケアについて学びたいです。
・災害看護について
・医療機関と施設で最期をむかえる違い
・家族支援の着眼点でのお話も聞きたいです
・今日の続きをお願い致します（2）
・また同じような講座があれば聞いてみたい。
・初めて受講させていただきました。次回も参加したいと思いました。
・「ACP の成果を活かす時」ぜひご講座お願いいたします。
・ACP の成果を活かす時。ぜひ聞きたいです。現場でどのようにすればいいか、イメージしたいです。
本当に勉強になりました
・ACP の成果を活かすとき（今回の続き）について学びたいというか聞きたいです
・このような出会いを増やしてほしい
・また参加したいです

平成30年度　出前講義の実績

	日時	団体・施設名	場所	テーマ	対象	人数	講師
1	9月4日（火） 10：00～11：30	田野畑村地域子育て支援センター	田野畑村アズビィホール （下閉伊郡田野畑村和野278-3）	こどもの急病時のホームケア講座	未就学のこどもを持つ保護者	7	甲斐恭子
2	9月4日（火） 17：00～18：30	医療法人社団敬和会	日高見クリニック （北上市北鬼柳22-46）	急変時対応　―急変が起こる前と後―	医療従事者	48	齋藤史枝
3	10月10日（水） 13：20～15：35	秋田県立大曲高等学校	秋田県立大曲高等学校 （秋田県大仙市大曲栄町６-7）	看護学入門	高校１・２年生	74	菊池和子
4	11月20日（火） 13：30～15：00	岩手県予防医学協会	岩手県予防医学協会 （盛岡市北飯岡4-8-50）	若年者の生活習慣病予防の重要性	岩手県、各市町村の健康推進課担当の部長・課長他	79	青柳美樹
5	11月29日（木） 9：35～11：15	滝沢市健康福祉部 健康推進課	岩手保健医療大学	女性の健康について	滝沢市保健推進員	33	大谷貝子
6	12月13日（木） 18：15～19：50	岩手県奥州保健所	水沢地区センター （奥州市水沢聖天85-2）	“自分らしい人生”を支援するために ～ケア従事者のための倫理と死生学入門～	各保健所管内の保健・医療・福祉等関係機関に従事する看護職員等	45	清水哲郎
7	1月19日（土） 13：00～14：30	岩手県立図書館	岩手県立図書館 （盛岡市盛岡駅西通1-7-1）	健康の秘訣（高血圧とのつき合い方）	一般市民	29	菊池和子
8	2月7日（木） 13：00～15：15	紫波郡医師会	紫波郡地域包括ケア推進支援センター （紫波郡矢巾町又兵エ新田5-335）	介護予防から看取りまで続く本人・家族の意思決定支援	居宅介護支援専門員、訪問看護師等の在宅療養支援関係者他	87	清水哲郎
	保留	医療法人社団敬和会	日高見クリニック （北上市北鬼柳22-46）		医療従事者		

2018 年度 研究委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：木内千晶

委　員：濱中喜代、江守陽子、青柳美樹

庶　務：星雅俊(会計)

2. 委員会の開催

委員会は 8 月を除き、前期は月 1 回、後期は 2 か月に 1 回の開催を計画し、計 8 回開催した。

4/10、5/9、6/6、7/5、9/11、11/6、1/15、3/5　以上 8 回

3. 委員会活動目標

1）研究を活性化する

2）競争的資金の獲得を推進する

3）研究環境を整備する

4）研究に関する規程を整備する

4. 活動内容と点検評価

1）研究を活性化する

・学内共同研究は、3 題のプロジェクト研究、3 題の共同研究が申請され全課題を採択した。告知を 4 月 20 日（4 月教授会後）に行い、申請締め切りを 5 月末日としたが、その期間が短く申請書の内容が不十分なものも認められた。

・7 月 9 日に清水学長と江守教授による「科学研究費補助金獲得に向けての FD 研修会」を開催した。教員 16 名の参加があった。具体的な質疑応答等があり活発な研修会となった。

・9 月 10 日に外部講師齋藤有紀子先生による研究倫理 FD 研修会を開催した。教員 16 名の参加があった。FD 研究会に参加した教員には「研修会受講証」を発行した。参加者の事後アンケートでは概ね良好な回答が得られた。要望として、研究倫理についての具体的な事例検討や、教員間でのディスカッションが挙げられた。

・3 月 14 日に 2018 度岩手保健医療大学学内研究報告会を開催した。学内共同研究 6 題（内プロジェクト研究 4 題）、個人研究 4 題の発表があり、全教員 23 名の参加があった。活発な質疑応答があり研究成果を共有することができた。

2）競争的資金の獲得を推進する

・科研申請個別指導方法を検討し、准教授以下の教員に、計画書作成の指導を受けることができる担当教授を割り当て、学内フォローアップ体制を整備した。また、学内の最終チェックは濱中学部長と江守教授が担当した。科研費の申請は昨年度の 5 件から 9 件に増加した。

・外部資金獲得のための研究助成公募等の情報を収集し、全教員宛にメールにて情報を配信した。

3） 研究環境を整備する

・ 学内共同研究申請の審査要領を作成し審査基準の適切性、明確性を整備した。
・ 統計ソフト SPSS 用にノートパソコン 2 台を購入し、AMOS ソフトを 1 台購入した。ほぼ常時貸し出しされている使用状況である。
・ リサーチマップの登録・更新に関して、「research map－登録と活用－」の資料とともに全教員にメール配信し活用を促した。

4） 研究に関する規程を整備する

・ 「岩手保健医療大学学内共同研究規程」「規程の運用に当っての考え方」に、共同研究の中断と辞退に関する条項を整備し改定を行った。

5. 次年度に向けた課題

・ 学内共同研究の研究計画を綿密に行い、研究期間を十分確保できるよう、募集告知および申請の時期、審査期間を検討する必要がある。
・ 科研費の申請は全教員が行うことを目指し指導を強化していく必要がある。
・ 科研費の「研究活動スタート支援」は採択率が高いことから、対象となる新任の教員に早い時期に「研究活動スタート支援」についての周知を新任教員に早期に行う。

以上

2018 年度　自己点検評価委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：濱中喜代

委　員：松井照雄、清水哲郎、菊池和子、竹本由香里

庶　務：七尾

オブザーバー：池本理事

2.　委員会の開催

委員会は以下の日程で計 5 回開催した。

6/2、7/4、9/5、1/8、3/13　以上 5 回

3.　委員会活動目標

設置審査に提出した内容に沿って、進められているかどうかの視点で点検・評価を行う。

１）自己点検・評価報告書の作成及び公表に関すること

① 各委員会から出された活動内容に関して、事業計画も含めて必要な内容が網羅されているか点検し、必要時検討を求める。

② 年度末に各委員会から活動報告を提出してもらう。また研究業績に関しても領域毎に報告してもらう。点検整備したうえで教育・研究年報として小冊子を作成する。(学内版)

２）文部科学省の設置計画履行状況報告（AC）への対応に関すること

文部科学省にもとめられる調査等に対して滞りなく対応する。

３）　外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関すること。

今後に向けて必要なデータの整理および情報収集に努める。

4.　活動内容と点検評価

１）自己点検・評価報告書の作成及び公表に関すること

初回の委員会で、自己点検評価委員会の基本方針および活動計画の確認し、上記に決定した。また各委員会から出された活動目標・活動内容に関して、必要な内容が網羅されているか委員会で点検し、必要時検討を求め、修正してもらった。

教育・研究年報についての書式および内容等の検討を委員会で行い、3 月 27 日までに各委員会から活動報告を提出してもらった。また研究業績に関しても領域毎に報告してもらった。その他社会貢献については各自から書式に沿ってデータを収集し、今年度からは報告書の最後に全教員の社会貢献をまとめた表を作成掲載し、委員会メンバーで総括する文章を入れることとした。そのうえでそれぞれ出された内容を点検整備したうえで教育・研究年報として小冊子を作成した。(学内版　60 冊)またＷｅｂ上の公開について検討を行い、ＰＤＦ版で公表した。

２）文部科学省の設置計画履行状況報告（AC）への対応に関すること

文部科学省から求められた設置審査に関する書類作成等および関連調査については

委員長を中心に随時滞りなく対応した。

３）外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関すること

独立行政法人　大学改革支援・学位授与機構主催の研修会に委員長が出席し、今後に向けて情報収集することが出来た。また今年度設立された日本看護学教育評価機構について、報告会に委員長が出席し情報収集に努めた。完成年度後の外部認証機関の選定について話し合い、高等教育評価機構で評価を受けることとした。

全体総括として、今年度計画していた活動については問題なく進めることが出来た。次年度以降も継続して対応していきたい。

5.　次年度に向けた課題

１)自己点検・評価報告書の作成および公表に関すること

２)次年度予定の大学設置分科会の実地調査に適切に対応すること

３）完成年度後の自己点検評価に向けた情報収集の継続

４）高等教育評価機構で評価を受ける

以上

2018 年度　防火防災・環境保全委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：齋藤史枝

委　員：濱中喜代(学部長)、鹿糠全、成田真理子、添田咲美、大﨑真、

庶　務：後藤泰輔(総務)

2.　委員会の開催

委員会は、前期は毎月 1 回の開催及び必要時計画し、計 8 回開催した。

4/16、5/10、6/7、7/5、7/30、9/6、10/10、2/14　以上 8 回

3.　委員会活動目標

1)学生・教職員の危険防止のため、AED を含めた一次救命処置技術を習得する。

2)防災訓練の企画・運営を行い、的確な行動を取れるように訓練を行う。

3)確実に対応できるよう学生・教職員を対象とした緊急連絡システムの訓練を行う。

4)不法侵入に関する対応等を検討し、周知する。

4.　活動内容と点検評価

1)学生・教職員の危険防止のため、AED を含めた一次救命処置技術を習得する

一次救命処置講習会を 11 月 29 日(木)・30 日(金)の 2 日間に分けて実施した。職員全員対象、教員は主に今年度入職した教員を対象とした。参加者は職員 12 名、教員 8 名であり、2 日間に分けて実施したことで職員は全員参加することができた。一次救命処置は急変時対応に必須の技術であり、アンケート結果からも一次救命処置技術講習会を継続することで実践に活用できる講習会であったと評価することができた(添付資料 1)。一次救命処置技術は定期的に訓練することがスキルの維持につながるため、次年度も企画・実施していく必要がある。

学生を対象とした一次救命処置講習会は、科目との調整もあり開催することができなかった。次年度以降、科目の中で学生が学ぶことのほかに、学生から希望がある際は講習会を実施検討していく。

2)防災訓練の企画・運営を行い、的確な行動を取れるように訓練を行う。

教職員に対する防災訓練事前学習会を実施し、全教職員を対象とし、災害対策組織図に基づき各班に分かれ、発災時の机上シミュレーションおよび今年度入職者への防災設備の案内、説明を行った。7/25(水)に消防職員立ち合いのもと、教職員・学生対象の避難訓練及び 1 年生を中心とした防災訓練を行った。また、8/10(金)には盛岡市シェイクアウトを行い、防災行動の周知徹底を図った。教職員および学生へのアンケートの結果、80%以上が避難までの流れを理解でき、落ち着いて避難することができたとの回答であった(添付資料 2,3)。本学の防災設備に関しても 80%以上が理解し、使用するイメージが持てたとの回答であった。しかし、「放送で地震が起きたのか火事が起きたのか言われなかったため、どのように逃げる前の準備をすべきか分からな

かった」「メガホンでの指示が聞こえなかった」など、訓練開始時の放送や集合後の連絡について聞こえなかったとの意見があり(添付資料 2, 3)、今後学内施設の放送設備や放送の方法を含め検討が必要である。また、災害対策組織図への要望や備蓄の充実に関する要望が挙げられた。特に備蓄は十分に整備されておらず、次年度に向けて検討していく必要がある。

3)確実に対応できるよう学生・教職員を対象とした緊急連絡システムの訓練を行う。

9 月に教職員･学生を対象とした安否確認連絡システムのトレーニングを実施した。昨年とは違い、直接受信した画面上から返信可能な設定でのテストを試みた。結果、回答率は 91%であり、54%が当日中に返信し、うち 25%が 1 時間以内の返信であった。操作に関しては、ログイン作業がなく回答ができたとの意見がある反面、通常使用していない機器から Gmail を操作しようとし、逆に手間がかかったとの意見もあり、今後もより簡便に返信しやすい方法を検討していく必要がある(添付資料 4)。また、教職員の緊急連絡網の訓練についても年 1 回は実施し、啓発を行っている。

4)不法侵入に関する対応等を検討し、周知する。

不審者侵入対応マニュアルを作成し、大学祭前に学生、教職員へ啓発を行った。また不審者侵入への対応フローチャートは、ラミシートで覆い使用しやすいよう事務室内に提示した。周知状況について確認することはできなかったため、今後教職員の認識について確認を行い、マニュアル内容周知の徹底を行っていく必要がある。

5)その他

・環境保全として実習室の管理に関して、電気･ガスを使用する実習室の火元責任者･管理者を置き、明示を行い、管理体制を整えた。

・長期休暇前に、「緊急時対応ポケットマニュアル」をもとに緊急時対応について説明し、綱紀粛正について啓発を行った。また、レジャーでの危険等を含め健康管理についても説明を行い注意喚起した。次年度も新たに 1 年生が入学するため、啓発を継続していく必要がある。

・感染管理として、感染や季節ごとに流行する症状に合わせ注意喚起のためのポスターを作成し、啓発を行った(添付資料 5)。また、学内の擦式アルコール消毒を 6 ヶ月ごと(6 月、12 月)に交換を行い、使用量について調査を行った(添付資料 6)。結果、時期により流行する感染症や症状に関して、学内で拡大することはなかった。特にインフルエンザ罹患者は、学生 5 名、教員 1 名であり、感染拡大に至ることはなかった。次年度より、1 年次から 3 年次までと実習も増え、外部との接触による感染のリスクも増加することが予測されるため、感染症等に関する啓発は次年度以降も継続していく必要がある。

5. 次年度に向けた課題

1)防災に関する講習会の実施

・教職員、学生を対象とした一次救命処置講習会の定期実施

・防災訓練・避難訓練の実施

・緊急連絡システム及び緊急連絡網のテストの実施によるトレーニングの継続とシステムの検討

2)災害対策マニュアルの見直し

3)学生・教職員用の防災グッズや備蓄の検討

4)感染に関する啓発の継続

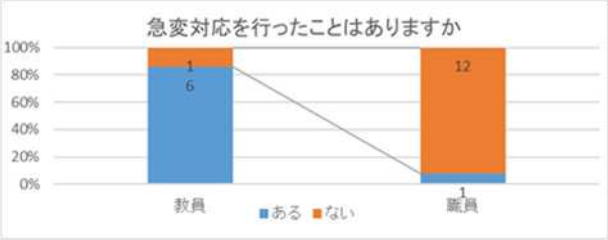
以上

一次救命処置講習会アンケート結果

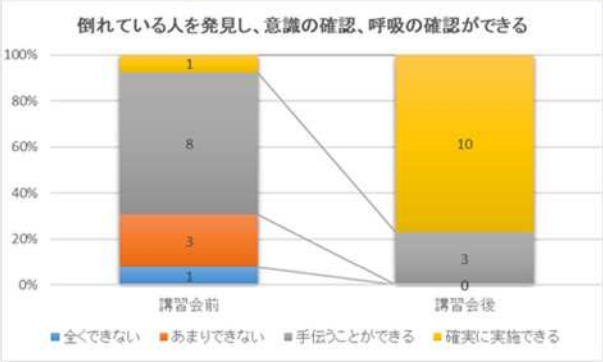
添付資料 1

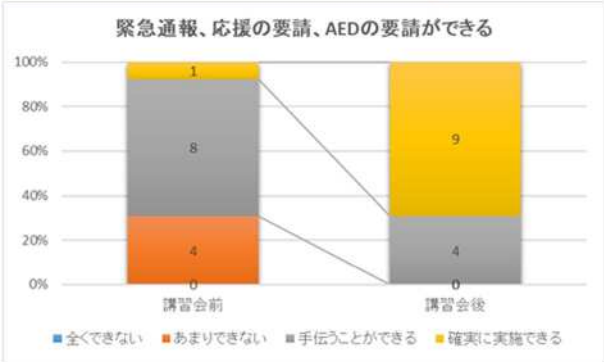
救命処置講習会参加者：20 名

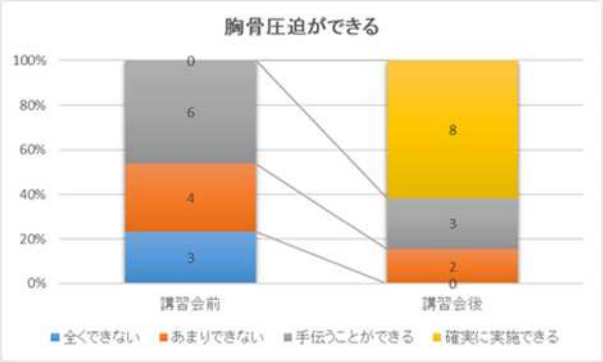
出席率：95%

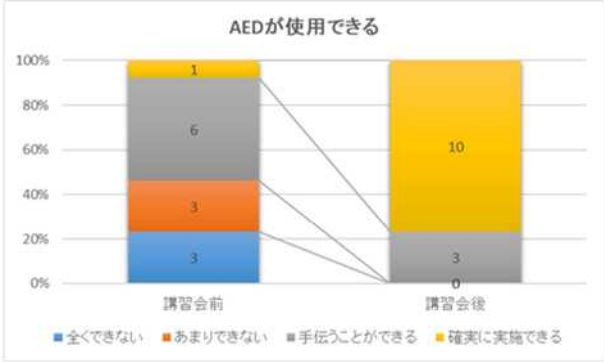


救命処置技術はどの程度実践できますか？　：　職員

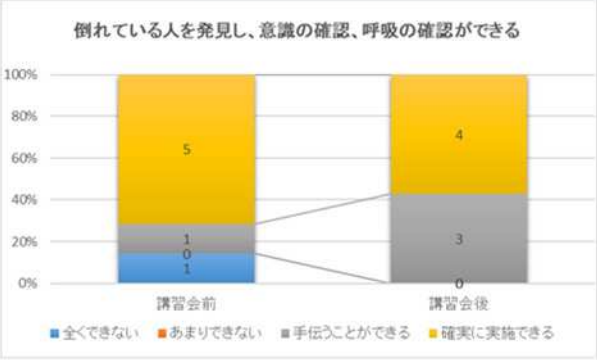


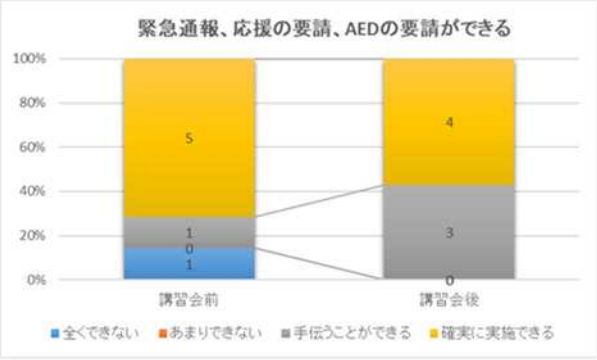


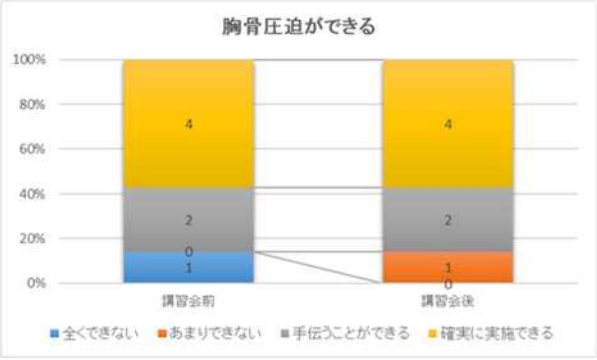


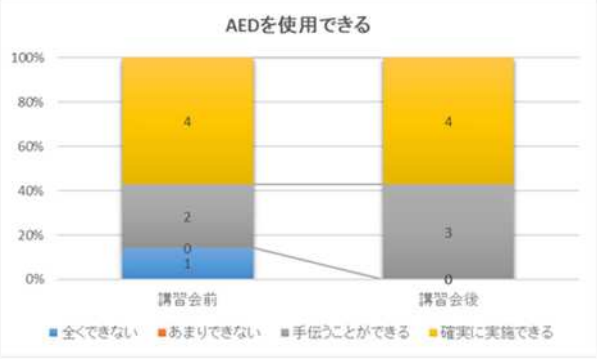


救命処置技術はどの程度実践できますか？　：　教員





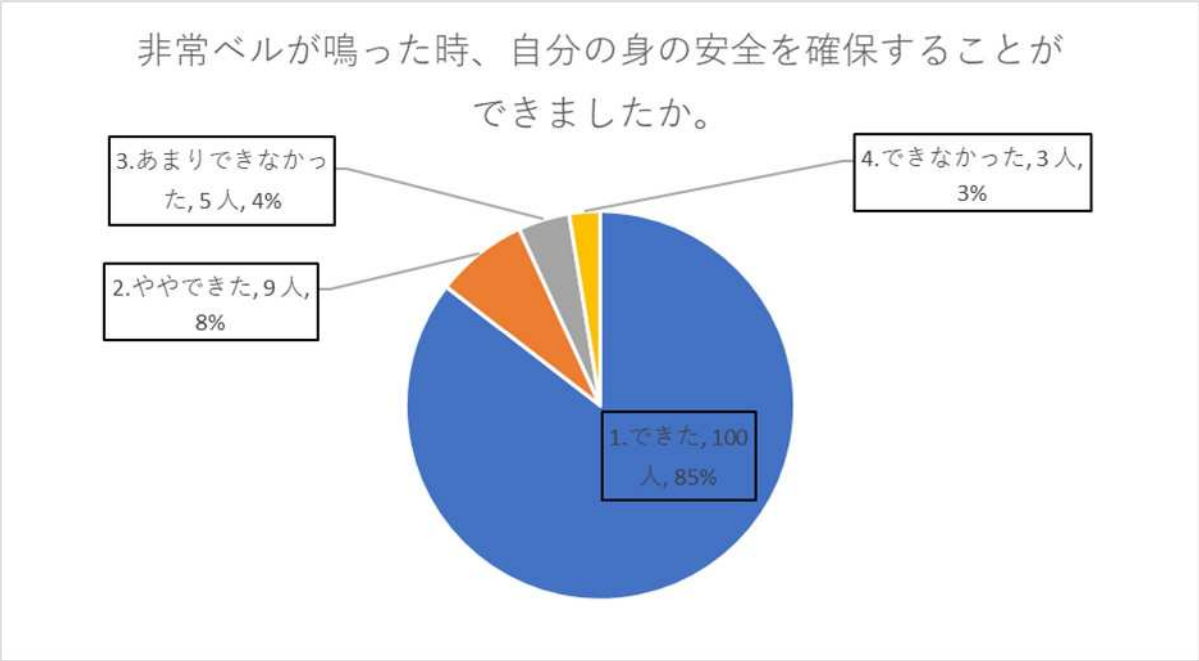


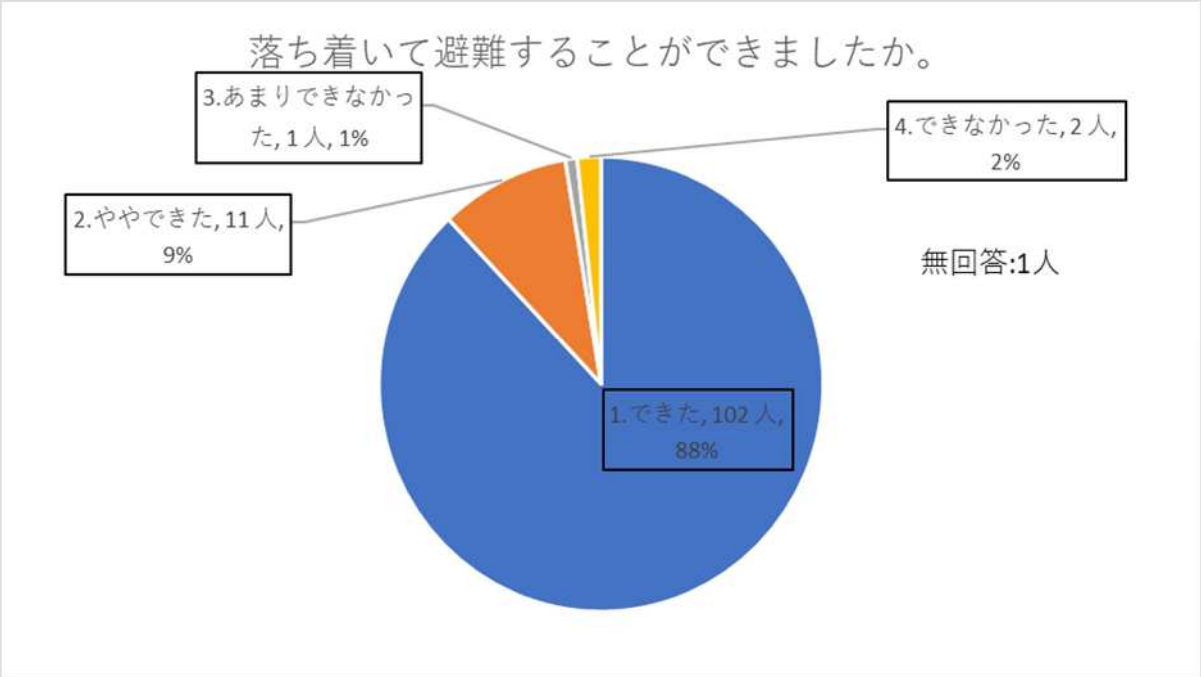


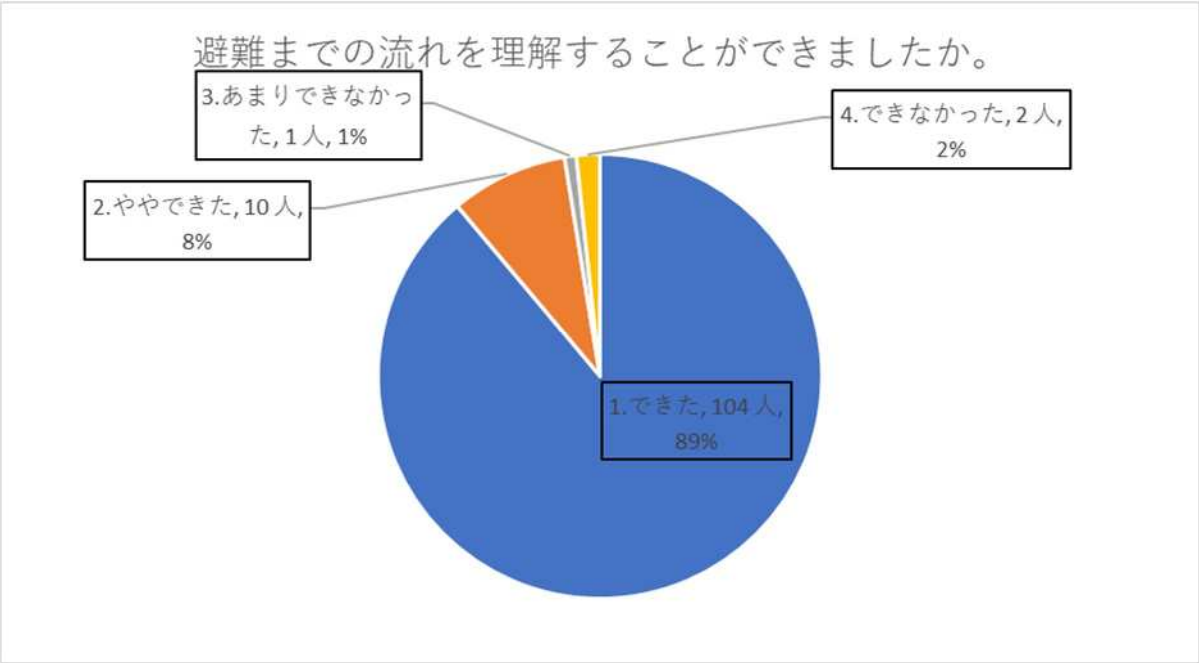
避難訓練・防災訓練に関するアンケート（学生）

アンケート総回答数：117（回答率 76.4%）

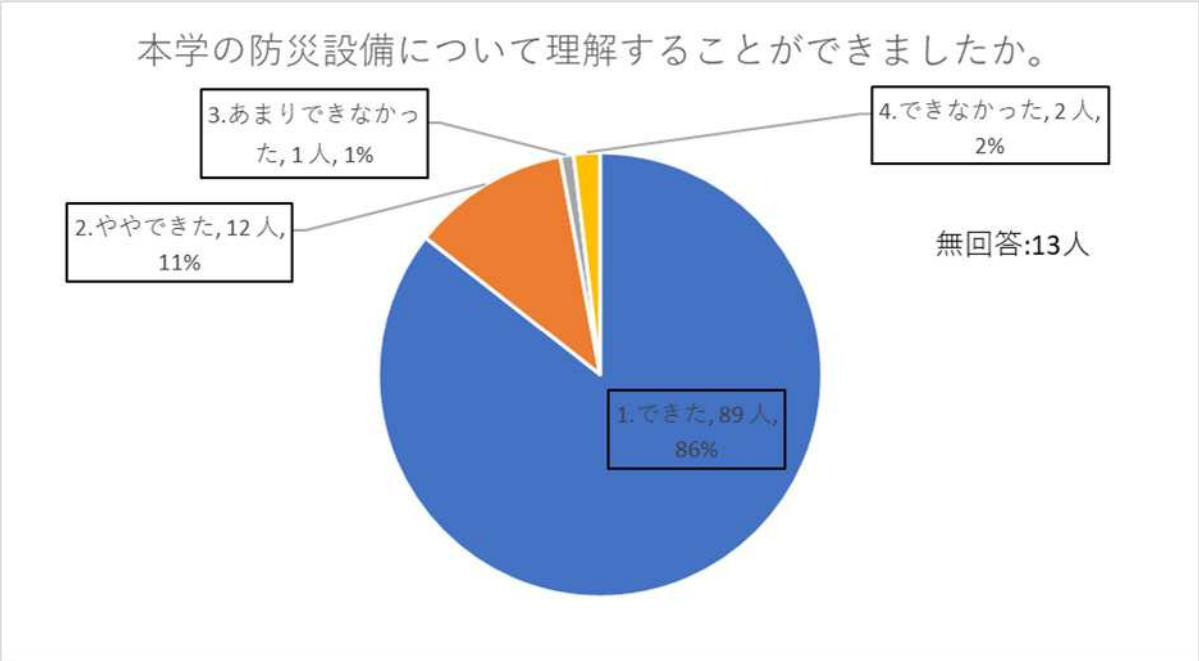
● 避難訓練について

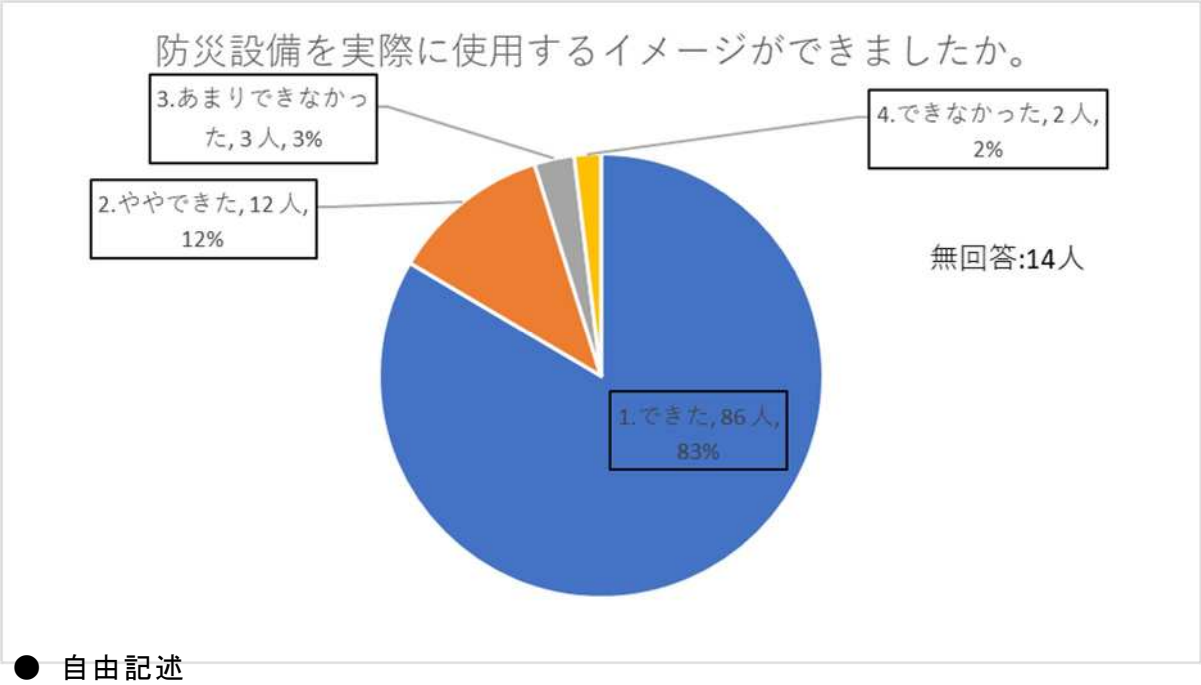






● 防災設備等の説明について





● 自由記述

避難訓練・防災訓練に関してお気づきの点がありましたらご記入ください。

- サイレンが鳴っても話していたり、避難する時に訓練だから適当にやっている感じがあったように見えた。
- 暑いのに何度も外に出て話を聞くのはどうかと思いました。今の時代、熱中症が騒がれているのにどうなんでしょうか。
- 実習室から火災が発生しているのに校庭に逃げるのは危ないと思った。
- 放送の際に地震が起きたのか火事が起きたのか言われなかったため、どのように逃げる前の準備をすればいいのか分からなかった。
- 机の下に隠れるのは大きい人には無理そうな気がしました。
- 放送が聞こえなかった。本当に災害とかが起きた時、焦って聞こえなくなるんじゃないかと思った。
- 避難訓練の大切さが皆に伝わってないためか、私語が多すぎて放送が聞こえない。
- 今までに避難訓練をやってきているからという理由で今回の訓練は緩すぎたと思います。この大学で何か火事などが起こったときにしっかり自分の身を守れるか心配です。
- とても為になった
- グラウンドに集まった時に話している人の声が聞こえなかった。
- 先生が日焼けを気にして、防災訓練中なのに日陰でしゃがんでいるのはどうかと思いました。
- 避難訓練なのに私語が多いと思った。この避難訓練をやってみて、ゆるい雰囲気でもしも地震や火事が起きたら、命を落とすのではないかと不安な気持ちになった。
- 机の下に隠れるのは狭く窮屈で避難指示が出てもすぐに動けないと思う

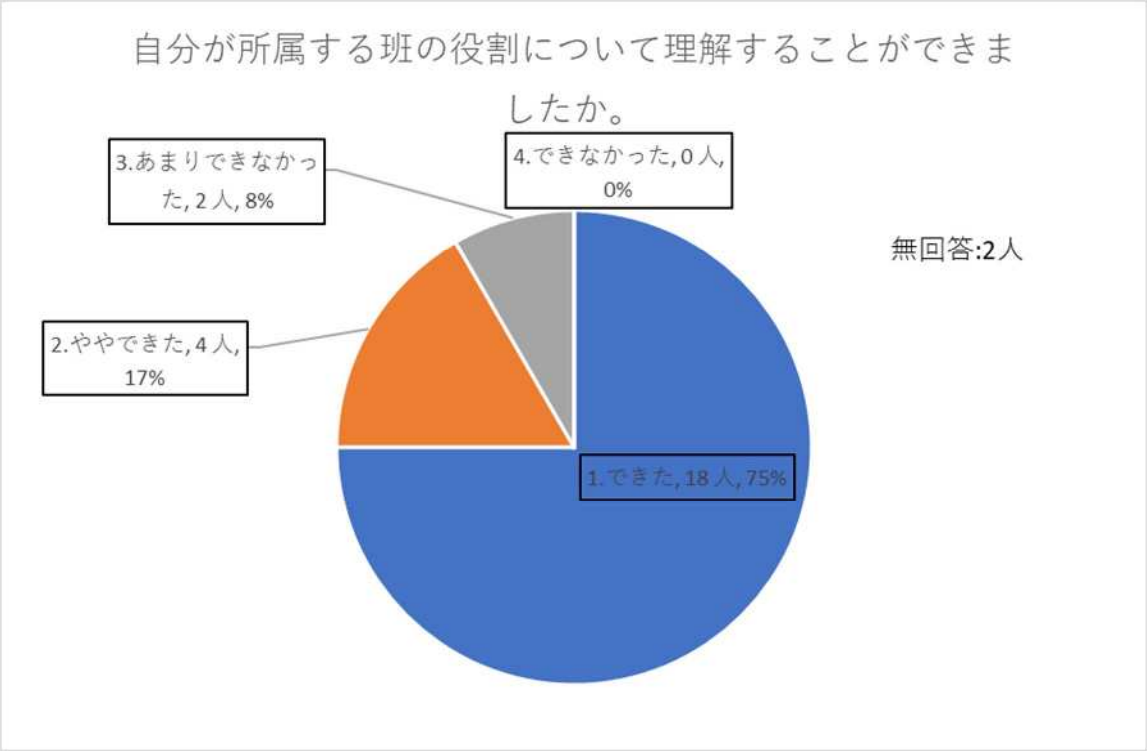
その他、防災関連でお気づきのことがありましたらご記入ください。

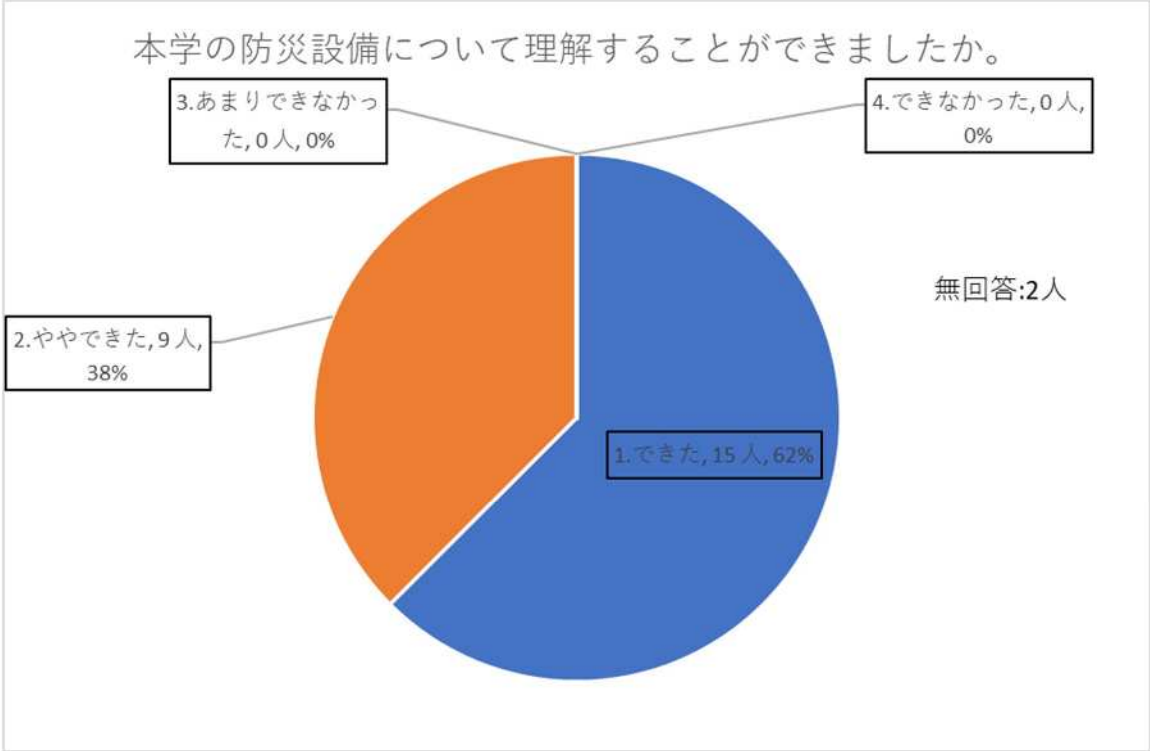
- グランドは分かってたけどグランドのどこかがあまり分からなくてそこら辺も配慮してくれるともっと良いと思った
- 消防士さんと写真が撮れてよかったです。

避難訓練・防災訓練に関するアンケート（教職員）

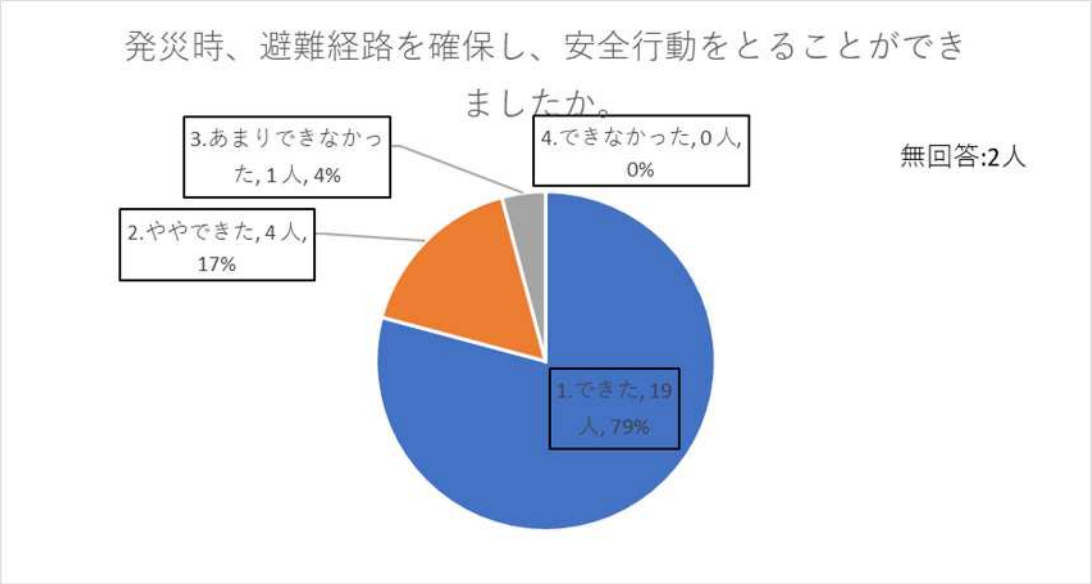
アンケート総回答数：26（回答率 70.2%）

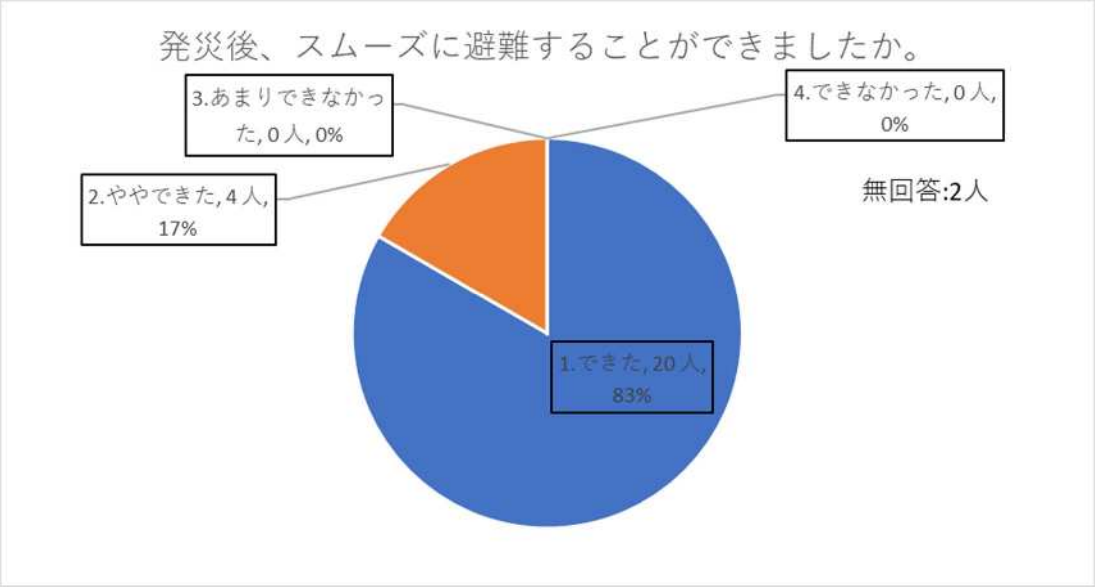
● 防災訓練事前学習会について

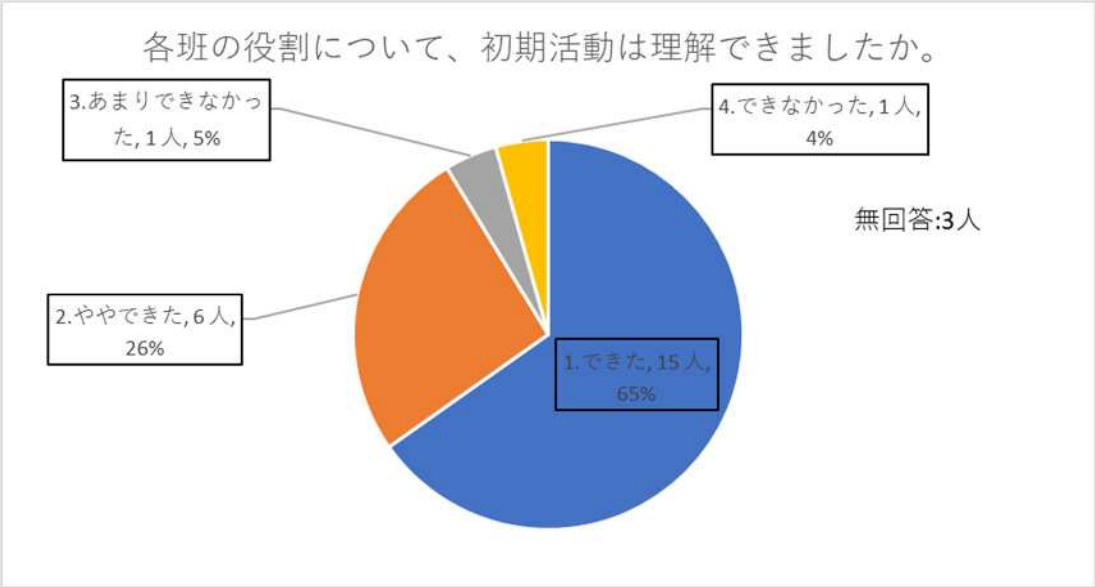




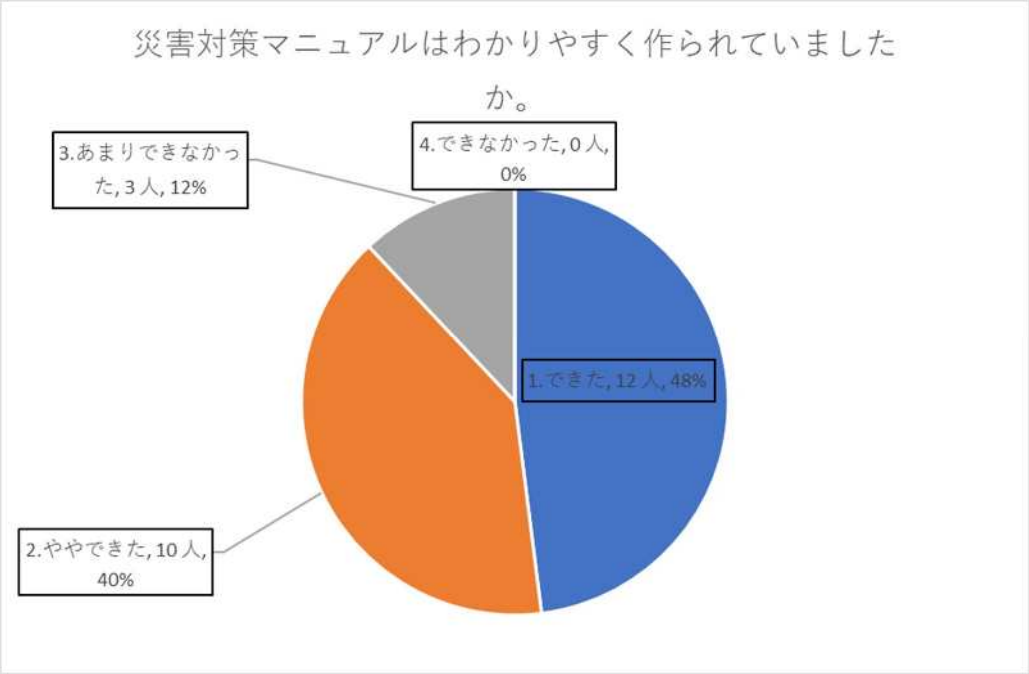
● 避難訓練・防災訓練について　　添付資料 3







● 災害対策マニュアルについて



● 自由記述

防災訓練事前学習会に関してお気づきの点がありましたらご記入ください。
● 事前学習会で、当日の流れを確認でき、どのように動くかが想像しやすかったです。
平成 30 年度防災訓練事前学習会で出た「資機材管理班」としての要望 ●資機材の中には重量や数量があるものも存在するため、班員に男性教職員を増員してほしい ●資機材（と非常用持ち出し品）の備蓄場所をまとめてほしい ・1 階の警備管理室と作業室とに分けて備蓄している資機材はどちらかにまとめたほうがよいのではないか ・災害時に 4 階から搬出するのは難しいと考えられる、しかしながら、資機材を水害から守るという観点から見ると、現状では 4 階しか備蓄場所がないから仕方がない、とも思う ●資機材を充実させてほしい 資機材管理班として優先順位が高いと思われるものは以下のとおりである ・マスク（感染症予防のため） ・ヘルメット ・懐中電灯（最低でも各階に 1 つは必要、あとは教職員それぞれに準備させては？） ・ラジオ（教職員それぞれに準備させてもよいのでは？） ・非常食料 ・保存水 ・紙おむつ、消毒薬（非常用トイレとして使用） ・ごみ袋

● 大規模災害の場合、アイーナやマリオスがあるため本学は一般的に考えられる避難所の役割をではなく、病気・障害等の方の避難所や看護の役割を求められるのではないかという意見がありました。今は学生の安全を守るには何が第一であるかに重きを置いているかと思いますが、いずれは地域に求められることについても考えることができれば、良いかと思います。
● 備えは大切なので、学生、教職員の安全を第一に、必要物品が準備出来ることを願います。 階段 2 つ、出入り口が 3 つあるので、関係者が全員一致して理解できるような呼び名（メイン階段、裏階段　正面玄関、裏玄関、職員玄関など）が定着すると良いと思います。
● 全員参加でしたか？任意でしたか？迷っている方がいました。任意だと思われて他のことをされていた方が「行けば良かったの？」と云ってました。学習会の冒頭で当日の訓練の流れを説明された方がよかったです。読めば分かる、と云われるかもしれませんが、火災の前に震度 6 の地震が想定されていましたが、そこ、とても重要でした。学習会のあの場で共有が必要だと感じました。それによって学生を机の下にもぐらせる指示が早く行えたと思います。ご検討をお願いします。
避難訓練・防災訓練に関してお気づきの点がありましたらご記入ください。
● 地震のタイミングがわからず、火災報知機が先に鳴った。
● 教職員の安否確認・点呼について 配布された「教員名簿」の並び順が順不同のため、確認に時間がかかった。 氏名順、または職位順、領域別、職員であれば所属課ごとの並びにするなどすばやく見やすい表が良いと感じた。 また、教員の不在など総務課が把握しているため、不在教員の確認にも時間はかかる。
● 使用していたメガホンの音量が小さく、後ろの学生には指示が聞こえていなかった。4 学年そろったときのためにも、大型のメガホンが必要ではないだろうか。
● 昨今の気象事情を考慮して、秋などの涼しい時期に訓練日を設定することが必要かと思います。
● 今回は訓練ということで、学内にいる学生数を事前に把握できたが、いざというときには点呼をとっても、その数が全員かどうかの確認が困難となる。
● 火事の想定であるのに、だれも煙の対策をしてなかった。もう少し、実際に火事だったらどうするか、倒壊が考えられる場合はどうするか、創造力をはたらかせる必要があると思う。 サイレンで避難訓練の開始を知らせるのであれば、サイレンと同時に「現在震度 6 弱の地震が発生しました。避難可能となるまで各自安全行動をとってください。」など状況を知らせるアナウンスを加える必要があった。
● 今回は訓練ということで、学内にいる学生数を事前に把握できたが、いざというときには点呼をとっても、その数が全員かどうかの確認が困難となる。

● 避難後、避難誘導班の教職員点呼がやりにくそうに感じたため、表の作り直しが必要と感じた

その他、防災関連でお気づきのことがありましたらご記入ください。
● 避難指示の放送後に消防署への通報をしたが、どの建物が燃えているのか、何が燃えているのか等、消防署より確認される事項が多く対応に時間がかかり避難するのに間に合わなかった。 今回は居残りをする職員が通報をしたので時間がかかっても対応できたが、次回は通報するタイミングをもう少し早めた方が良いと感じた。
● 水害の場合と、火災の場合で備蓄の保管場所が変わってくるという意見がありました。これから備蓄をそろえていくことになると思いますので、設置する際に検討が必要になってくるかと思います。
● 備蓄は必須です。
● 備蓄の検討をお願いします。
● 災害に備え、ヘルメットの整備、備蓄（少なくとも水、食料 2～3 日分）の備えが大学として必要であると感じました。また、外気温が非常に高い日においては、熱中症予防の配慮が必要と考えます。
消防からの意見
● 避難訓練時、教職員がシナリオの紙をもってそのとおりにやろうとしすぎていた。
● 非常ベルが鳴った時点で防火管理者が班関係なしに初期対応（館内放送、避難経路確保、初期消火、通報）を指示するようにすることで教職員の対応力がつくのではないか。

安否確認連絡システムテスト結果

● 安否確認(予行演習 20180831)

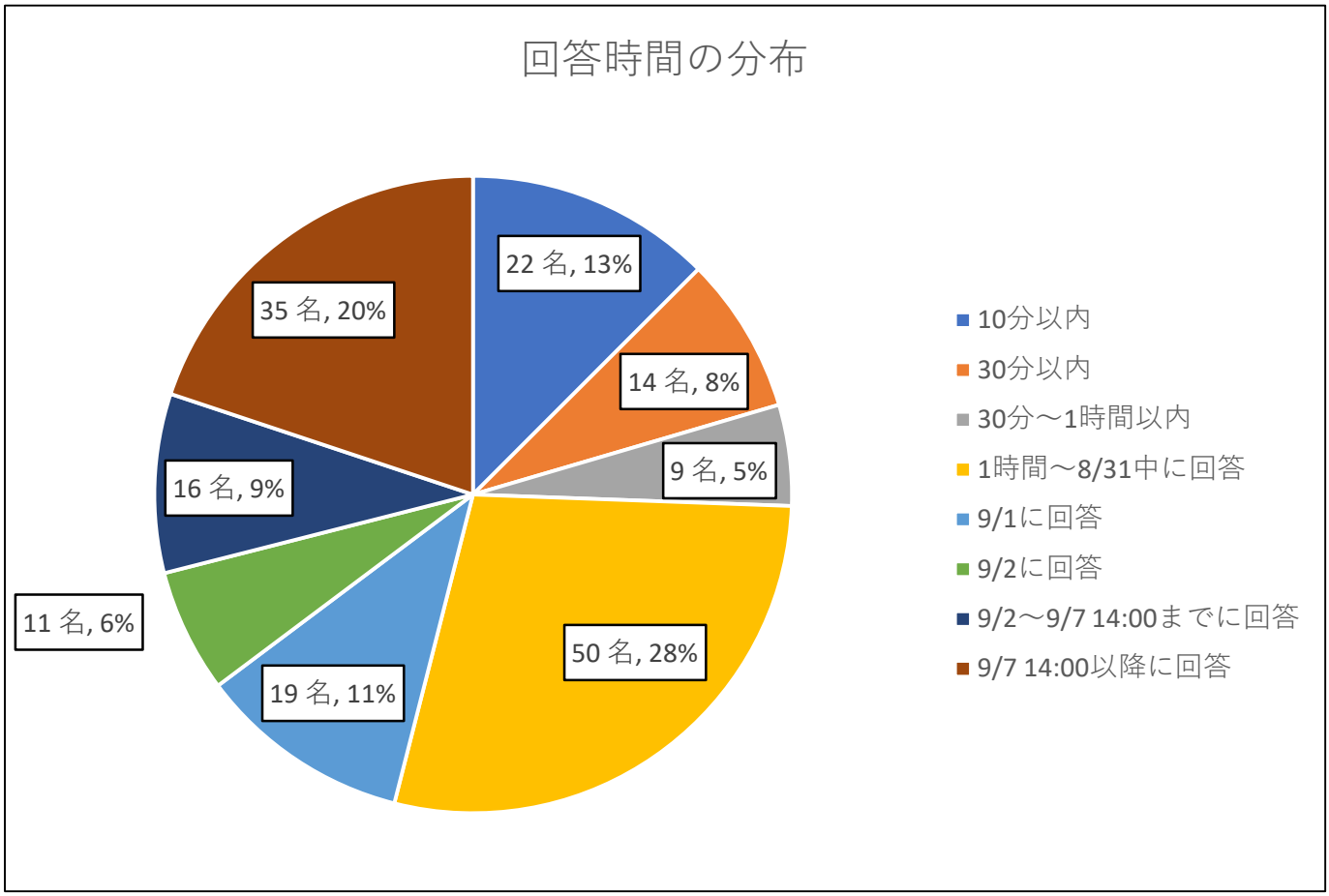
日　時：　8/31（金）　13：30 アンケート送付

→9/7（金）　未回答者に再度回答依頼メールの送付

対象者：　学生 153 名　教職員 38 名　計 193 名

回答者：　176 名

回答率：　91%

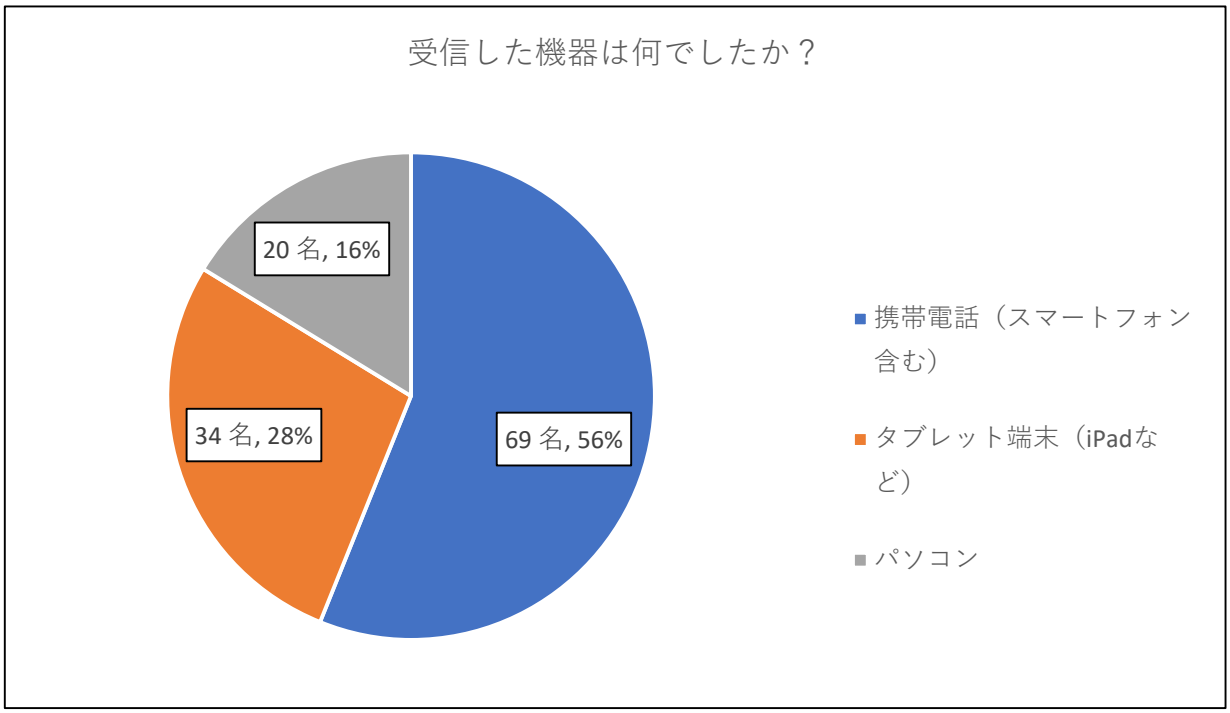


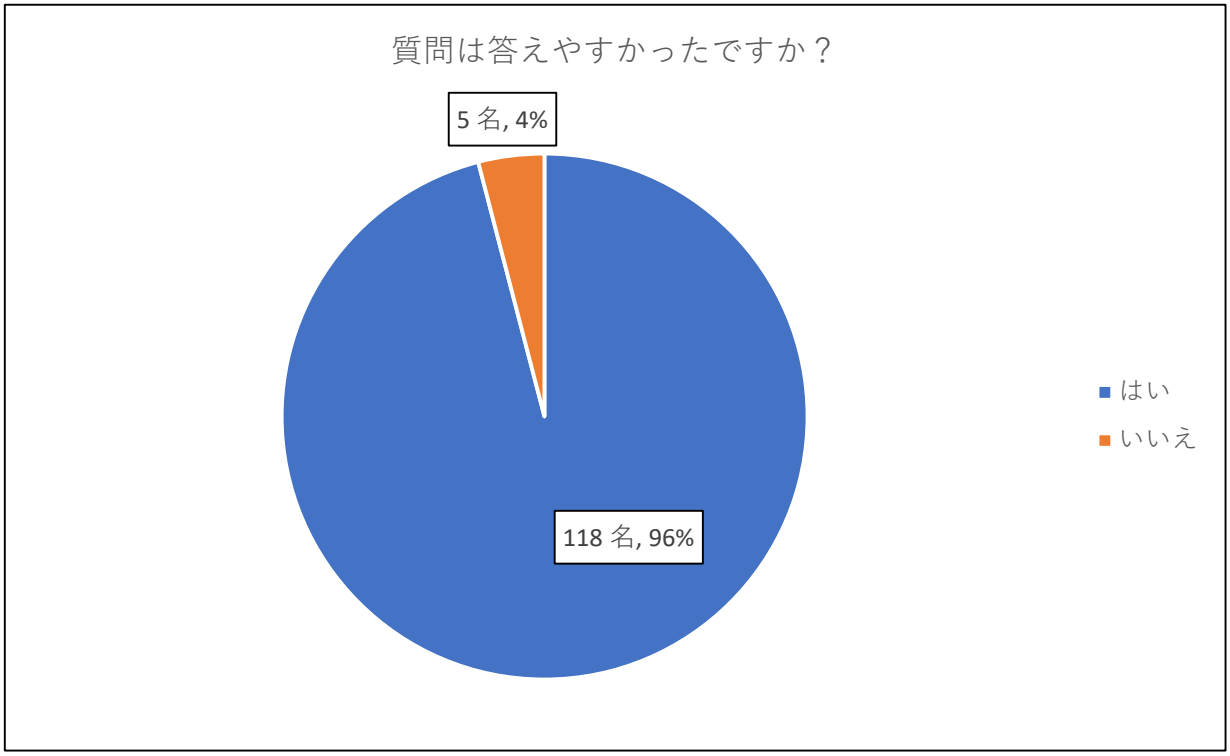
● 連絡訓練実施後アンケート

対象者：　学生 153 名　教職員 38 名　計 193 名

回答者：　123 名

回答率：　64%





訓練でお気づきのことがありましたらご記入ください（自由記述）

- 今回はログイン作業はなく、メールからそのまま回答できたので良かったです。
- 埋め込み式の場合、他の Gmail アカウントに転送設定にしていると「権限がない」となってしまう。
- 全部「はい」で答えられるような質問（「いいえ」で答えられる質問）にした方が良かったです。
- やはり有料でも返信された端末位置が明示されるシステムになるといいと思います。
- バイトしてて遅れました。
- 緊急時でも Google ログインしないといけない為時間がかかる点
- このアンケートも含め、スムーズにログインできず、再度送信しなければならなかった。
- 気づくのが遅くなりすみませんでした。

！！麻疹に注意！！

3 月に沖縄で発生した麻疹の集団感染は、本州でも感染が拡大しています！

麻疹（はしか）とは

麻疹は、麻疹ウイルスによって引き起こされる急性の全身感染症です。
麻疹ウイルスの感染経路は、空気感染、飛沫感染、接触感染で、その感染力は非常に強く、すれ違っただけで感染すると言われています。免疫を持っていない人が感染するとほぼ 100%発症し、一度感染して発症すると一生免疫が持続すると言われています。

麻疹（はしか）の症状

潜伏期間
感染後、約 10 日ほどです。自覚症状はありません。
カタル期（前駆期）
3 日程度続きます。
発熱（38～39 度）や咳・鼻水といった風邪のような症状、口の中の粘膜に白い斑点（コプリック斑）が出現します。
発疹期
一度解熱後、再び 39℃以上の高熱が出て、同時に発疹が出現します。

肺炎、中耳炎を合併しやすく、患者 1,000 人に 1 人の割合で脳炎が発症すると言われています。死亡する割合も、先進国であっても 1,000 人に 1 人と言われています。

麻疹（はしか）の予防法

麻疹は、非常に感染力が強いため、マスクや手洗い・うがいでは予防出来ません。
最も効果的な予防法は、抗体をつけることです。自分の抗体価を知り、抗体がない場合は直ちにワクチンを接種しましょう。
注：ワクチン接種後、抗体がつくまでに約 2 週間かかります。

H30 年 5 月 2 日現在、麻疹の患者発生は、沖縄・福岡・山口・大阪・愛知・山梨・静岡・神奈川・東京・埼玉・茨城で報告されています。（国立感染症研究所より）

注意

GW に USJ やディズニーランドに行った、関西・関東方面に行ったなど、接触した可能性がある場合は、症状の出現がないか注意し、症状があるときは、直ちに医療機関に受診するとともに、大学事務局学務課までご連絡下さい。

H30. 5. 11 防火防災・環境保全委員会

アデノウィルス感染症に注意しましょう！

流行性角結膜炎(EKC・はやり目)

【感染経路】
感染力が非常に強く、感染者が眼に触れた手で物を触り、他の人がそれに触れた手で眼をこするなどをすると高い確率で感染します(接触感染)。タオルなどを介しても感染します。
潜伏期間 ： 1～2週間
【症状】
・結膜の充血　・眼脂(めやに)　・涙目
・重症の場合、しょぼしょぼ感、異物感、光がまぶしい

※完治するまで、出勤・登校は禁止です(学校保健法　第3種)

注目！
いずれも、症状がある場合は、直ちに受診してください。
眼症状が強い場合は、眼科受診をお勧めします。
休む場合は診断書が必要になります。
受診時に発行してもらい、提出してください。

咽頭結膜熱(プール熱)

【感染経路】
咳やくしゃみなどによる飛沫感染と、眼脂などに触れることによる接触感染によって感染します。
潜伏期間 ： 2～14日
【症状】
・咽頭炎(のどの痛み)　・結膜炎
・発熱(39度前後)　・頭痛　・食欲不振　など
発熱による脱水症状予防のため、しっかり水分摂取しましょう。

※症状が消退した後2日を経過するまで出勤・登校禁止です。
(学校保健法　第2種)
※現在、例年より早く、患者数増加中です！！

【予防方法】

・感染者との接触を避ける
・タオルを共有しない
・こまめに手洗い、手指消毒・うがいを徹底する
・ドアノブなど触れた物は、消毒用エタノールで拭く
・感染者の入浴は最後にする

H30.6.5発行
岩手保健医療大学　防火防災・環境保全委員会

注意報

暑い日が続いておりますが、体調を崩していませんか？
「最近身体がだるくて・・・」「めまいがする・・・」
その体調不良、実は、熱中症、かもしれません！！

熱中症の症状とは ？

①めまい・立ちくらみ・顔のほてり・一時的な失神(熱失神)
体内に熱がこもり脳への血流が減少する、脳そのものの温度が上昇することで引き起こす。
②筋肉痛や筋肉のけいれん
手足の筋肉がピクピクけいれんしたり、硬くなる。
③身体の倦怠感・吐き気
④異常な発汗
汗が止まらない、もしくは暑いのに全く汗が出ないなどの発汗異常。
⑤体温の上昇、皮膚の異常
発熱・皮膚が赤く乾燥しているなど
⑥軽い意識障害があり、呼びかけに反応しない、フラフラと歩いている

熱中症を予防しましょう！

①喉が渇いていなくても「水分を」こまめに摂取しましょう。
②「塩分を」ほどよく摂取しましょう。

汗をかくと、身体から水分だけでなく
ナトリウムやカリウムなどのイオンが失われます。
スポーツドリンクや経口補水液(OS-1)の摂取が効果的です。

家庭で作れる経口補水液
水 1ℓ
砂糖 40g
塩 3g
混ぜるだけ！
※レモンを入れるとより美味しくなります。
是非、作ってみてください！

③「室内を」涼しくし、「衣服を」工夫しましょう。
④「丈夫な身体づくり」をしましょう。

熱中症かな？と思ったら・・・

①涼しい場所に移動して、身体を冷やしましょう！
冷やす場所は・・・「体表近くに太い静脈がある場所」です
具体的には、頸部・腋下・鼠径部
②少しでも変だな・・・と感じたら、直ちに受診しましょう！

もうすぐ夏期休業。
今年は全国的に既に猛暑が続いており、熱中症の患者も急増しています。
各々、身体の自己管理をしっかり行い、
暑い夏を乗り切りましょう！

H30.7.20 岩手保健医療大学　防火防災・環境保全委員会

！！風疹に注意！！

首都圏を中心に、風疹が急増しています！

風疹とは

風疹ウイルスの飛沫感染により発病します。感染力が強い麻疹とは異なり、感染力はさほど強くなく、感染しても 15～30％の人は症状が出ない不顕性感染です。

しかし、妊娠初期の妊婦が感染すると、胎児が風疹ウイルスに感染し、難聴・心疾患・白内障・精神や身体の発達の遅れ等の障害(先天性風疹症候群)をもった赤ちゃんが産まれる可能性があることから、注意が必要です。

風疹の症状

小斑状丘疹

□ 潜伏期間

潜伏期は 2～3 週間（16～18 日が多い）です。

□ 症状

- 初発症状は、桃紅色の小斑状丘疹です。
  初めは顔面に現れ、すみやかに全身に広がります。発疹は 3～5 日で消えます。
- また、発疹とともに微熱が出ますが、2～3 日で治まります。
  その後、再び 39℃以上の高熱が出るとともに、発疹も出ます。
- 耳下腺や頸部のリンパ節腫脹があります。
  リンパ節腫脹は発疹の前から認められ、発疹が消えてからも数週間続くことがあります。

※麻疹との見分け方：口の中の粘膜に白い斑点(コプリック斑)ができること、一度解熱後、再び 39℃以上の高熱が出るとともに、発疹が出現すれば、麻疹です。

□ 予防法

風疹は飛沫感染によって広がります。感染する可能性が高い人ごみを避けるようにしましょう。人ごみへ外出するときはマスクをつけ、帰宅したら手洗い・うがいを必ず行ってください。

次の年齢の方は特に注意！

① *昭和 37 年 4 月 2 日～昭和 54 年 4 月 1 日生まれの男性*

・ 定期予防接種制度が行われていないため、風疹の免疫がない人が多い世代です。

② *昭和 54 年 4 月 2 日～平成 2 年 4 月 1 日生まれの男女*

・ 予防接種の接種率が低い、または接種を受けていない人が多く、風疹の免疫がない人が多い世代です。

※ 自分や家族が抗体を持っているかどうか不明な方は、ぜひ抗体検査を行い、必要に応じて予防接種を受けて、自身や家族の感染と、感染拡大を予防しましょう！

注意 夏休みに首都圏を旅行したなど、接触した可能性がある場合は、症状の出現がないか注意し、症状があるときは、直ちに医療機関に受診するとともに、大学事務局学務課までご連絡下さい。

平成 30 年 8 月 23 日　防火防災・環境保全委員会

⚠注意報⚠

インフルエンザの季節になりました！！

インフルエンザウイルスに感染した場合、約 1～3 日の潜伏期間の後に発症します。続く約 1～3 日では、突然の 38℃以上の「高熱」や全身倦怠感、食欲不振などの症状が強く現れます。やや遅れて、咳（せき）やのどの痛み、鼻水などの呼吸器症状が現れ、腰痛や悪心（吐き気）などを訴えることもあります。通常は、10 日前後で症状が落ち着き、治癒します。

感染 → 潜伏期間 約1～3日 → 発症 → 約1～3日

- ☑ 飛沫感染
- ☑ 接触感染
- ☑ 空気感染

- ☑ 38℃以上の高熱
- ☑ 関節痛・筋肉痛・頭痛
- ☑ 全身倦怠感・食欲不振
- ・・・などの全身症状

→ 約1週間 → 軽快

- ☑ 咳
- ☑ 咽頭痛
- ☑ 鼻汁
- ・・・などの呼吸器症状

注意 インフルエンザの予防接種を受けましょう！

インフルエンザの予防接種は、接種 1～2 週間後に効果を発揮します。また、接種したからといって絶対にインフルエンザにかからないというものではありません！

予防接種を過信せず、

マスクの装着、手洗い・手指消毒・うがいを徹底し、

症状がある時はすぐに受診しましょう！

インフルエンザと診断されたら・・・

①不必要な外出はしないこと

②学務課（教職員は総務課）へ連絡し、指示に従うこと

③以下の期間は出席（出勤）停止です！

☑ 発症してから 5 日経っていること
（発熱した翌日を 1 日目とする）

☑ 熱が下がってから 2 日経っていること

※どの学年であっても、同じ校舎で学んでいるため、実習の時期に罹患者が出ると実習停止になる恐れがあります。

各々で感染予防に努めましょう！

H30. 11. 5 岩手保健医療大学　防火防災・環境保全委員会

注意報 Vol. 1

ノロウィルスによる胃腸炎の季節になりました！！

ノロウィルスとは？

ノロウィルスは毎年 11～1 月に流行する、感染性胃腸炎の原因となるウィルスです。

【感染経路】

① 経口感染：ノロウィルスに汚染された飲料水や食物による感染

② 接触感染・飛沫感染：ノロウィルスで汚染された手指、衣服、物品等を触る（接触する）

③ 空気感染：乾燥した汚染物が空気中で飛散して感染

接触後汚染された手指や物品を口に入れる（舐めるなど）ことにより、ノロウィルスが口の中に入ってしまいます。

ノロウィルスの感染力は非常に強く、わずかなウィルスが口の中に入るだけで感染します。

【ノロウィルスの感染力】

耳かき１杯（１ｇ）中
便：１億個
嘔吐物：１００万個

たった１０～１００個で感染！！
１回の便が 200g とすると
20 億人分！

潜伏期間・症状・対策

潜伏期間：24～48 時間

症状：吐き気、嘔吐、腹痛、下痢、37～38 度の発熱

※不顕性感染（自覚症状の出ない感染）でも、便にウィルスを排出しており、感染源となりえます。

【予防・対策】

① 手洗、消毒が重要です！
ノロウィルスは口からしか感染しません。調理を行う前、食事前、トイレの後に、流水と石鹸による手洗いを行いましょう。
また、手洗い場や水道が近くになく、すぐに手洗いが出来ない場合は消毒用エタノールを使って消毒を行いましょう。

② 日頃からトイレやドアノブなど、良く手が触れる部分を清潔にするとともに、感染者が出た場合は徹底的に消毒をする必要があります。

※正しい処理・消毒の方法は、Vol. 2 へ

H30. 12.　岩手保健医療大学　防火防災・環境保全委員会

注意報 Vol. 2

【消毒薬の作り方】

<次亜塩素酸ナトリウム水溶液の作り方の手順>

床・便座など用（10ml×約 5%／500ml＝約 0.1%）

1. ５００ml のペットボトルに水道水を半分くらい入れる。
2. そこに、家庭用塩素系漂白剤１０ml（キャップ２杯）を入れる。
3. 水をさらに加えて、全体を５００ml とする。
4. フタをしっかり閉めて、よく振ってかき混ぜれば完成。

取っ手・机など用（10ml×約 5%／2000ml＝約 0.02%）

1. 2L のペットボトルに水道水を半分くらい入れる。
2. そこに、家庭用塩素系漂白剤１０ml（キャップ２杯）を入れる。
3. 水をさらに加えて、全体を2Lとする。
4. フタをしっかり閉めて、よく振って混ぜれば完成。

※　ペットボトルは間違って子どもが飲んでしまうことがあるので、子どもの目の届かないところで保管しましょう！

【嘔吐物の処理方法】

1. 処理前の準備
手袋は、2 重に装着し、エプロン・マスクを装着する。

2. 溶液を作成
左の 0.1%の溶液を使用する。

3. 吐物を処理する
① ペータオルで嘔吐物を広く覆い、その上に 0.1%次亜塩素酸ナトリウム溶液を静かに注ぎ 10 分以上放置する。
② ビニール袋に 0.1%溶液を入れておく。
③ 嘔吐物をペーパータオルごと外側からかき集めるように回収し、0.1%溶液入りのビニール袋に入れる。
この時に外側の手袋をはずして捨て、ビニール袋は閉じて、別の大きなビニール袋に捨てる（ビニール袋は 2 重となる）。
④ 吐物を除去した床は、再度 0.1%溶液で広めにしっかり拭き取る。
この時に吐物を処理した人の靴等の裏も消毒する。（外側の大きなビニール袋に捨てる）
⑤ 最後に手袋・エプロン・マスクを、清潔に注意してはずして捨てる。
ビニール袋を閉じる。
⑥ 手をしっかり洗う。出来れば着替えもした方が良い。

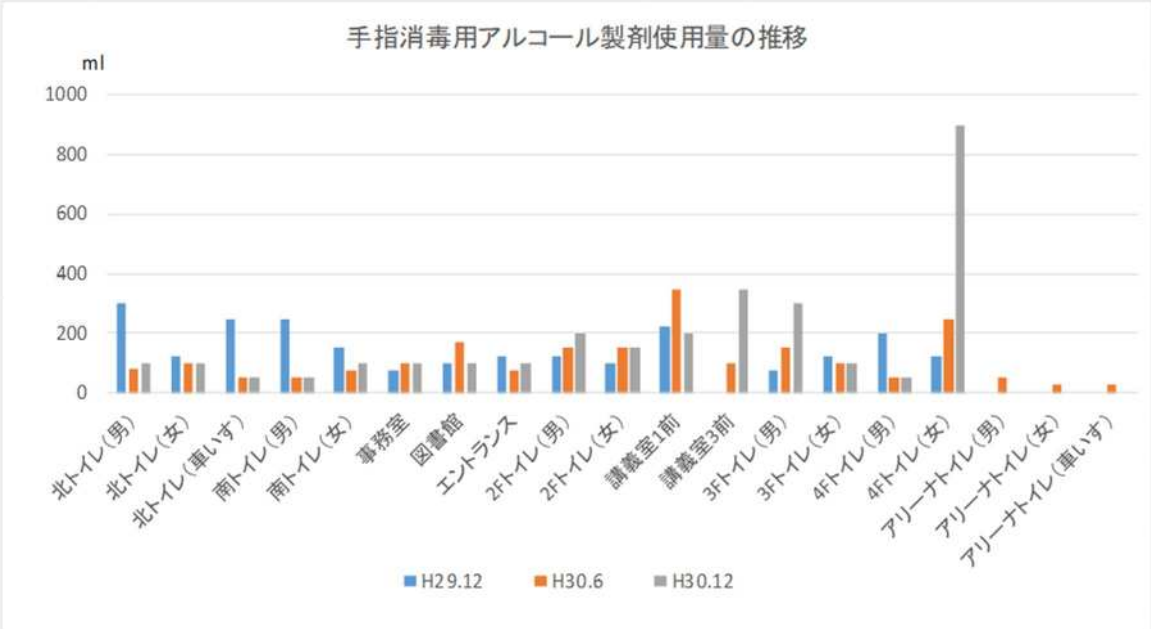
※処理中・処理後はしっかり換気しましょう！

H30. 12.　岩手保健医療大学　防火防災・環境保全委員会

手指消毒用アルコール製剤の使用量の推移

添付資料6

設置場所		交換月 H29.12	H30.6	H30.12
1F	北トイレ（男）	300	80	100
	北トイレ（女）	125	100	100
	北トイレ（車いす）	250	50	50
	南トイレ（男）	250	50	50
	南トイレ（女）	150	75	100
	事務室	75	100	100
	図書館	100	170	100
	エントランス	125	75	100
2F	2Fトイレ（男）	125	150	200
	2Fトイレ（女）	100	150	150
	講義室1前	225	350	200
3F	講義室3前		100	350
	3Fトイレ（男）	75	150	300
	3Fトイレ（女）	125	100	100
4F	4Fトイレ（男）	200	50	50
	4Fトイレ（女）	125	250	900
体育館	アリーナトイレ（男）	-	50	0
	アリーナトイレ（女）	-	30	0
	アリーナトイレ（車いす）	-	30	0
合計		2350	2110	2950
平均使用量(ml)		156.7	111.1	155.3



2018 年度　倫理委員会活動報告

1.　委員会構成

委員長：江守陽子

委　員：遠藤芳子、勝野とわ子、濱中喜代、松井照雄（総務）

庶　務：七尾明恵（総務）

研究倫理審査委員：児玉清隆

2.　委員会の開催

4/12、7/2、8/8、9/3、11/5、2/4　　以上 6 回

3.　委員会活動目標

1)　教員・学生の研究倫理審査

2)　研究倫理に関する教育・啓もう活動

3)　公正な研究倫理審査体制の整備

4.　活動内容と点検評価

1)　教員・学生の研究倫理審査の遂行状況

円滑な教員の研究倫理審査の遂行に努めた（現時点で学生からの研究倫理審査申請は無い）。

（1）研究倫理審査申請状況

2018 年度 第　1 回　締切日 4 月 27 日 0 件
2018 年度 第　2 回　締切日 5 月 31 日 0 件
2018 年度 第　3 回　締切日 6 月 29 日 3 件
2018 年度 第　4 回　締切日 7 月 31 日 2 件
2018 年度 第　5 回　締切日 8 月 31 日 2 件
2018 年度 第　6 回　締切日 9 月 28 日 1 件
2018 年度 第　7 回　締切日 10 月 31 日 0 件
2018 年度 第　8 回　締切日 11 月 30 日 1 件
2018 年度 第　9 回　締切日 12 月 26 日 0 件
2018 年度 第 10 回　締切日　1 月 31 日 0 件
2018 年度 第 11 回　締切日　2 月 28 日 0 件
2018 年度 第 12 回　締切日　3 月 29 日 0 件　　計 9 件

（2）研究倫理審査会開催状況

7　月 11 日　　3 件
8　月　8 日　　5 件
9　月 12 日　　2 件
10 月 10 日　　2 件(うち 1 件迅速審査)
11 月 14 日　　1 件(迅速審査)　　計 5 回

7、8、9 月の審査会においては申請者の説明を求め、質疑応答を含め審査を行った。

しかし、10、12 月の申請 2 件（うち 1 件は実施計画変更審査申請）は迅速審査希望であったため、書面による審査とした。

(3) 研究倫理審査結果

【受付】H30.6.27【承認】H30.9.3
【受付】H30.6.29【承認】H30.10.16
【受付】H30.7.19【承認】H30.9.3
【受付】H30.7.31【承認】H30.9.3
【受付】H30.9.26【取り下げ】H31.3.19
【受付】H30.11.12【承認】H30.12.18

2) 研究倫理に関する教育・啓もう活動

公正・公明・公平な研究方法に関する講習会開催または自己学習の促進に努めた。

・研究倫理審査申請にあたって、日本学術振興会による研究倫理 e ラーニングシステムを採用した。申請者の全員が受講済みであった。
・e ラーニングシステムと並行して、看護研究に関する倫理教育、講習会の開催を研究委員会、FD 委員会と共催した。

日　時：9 月 10 日(月)　13 時 30 分～15 時 30 分
講　師：斎藤有紀子(北里大学医学部)
テーマ：「看護研究における倫理的配慮　倫理指針と個人情報改正を踏まえて」

また、講習会参加をもって、研究倫理審査申請資格とした。

・その他、研究遂行上の被験者・被調査者からの問い合わせ、クレーム等は現時点では発生していない。

3) 公正な研究倫理審査体制の整備

公正・公明な研究倫理審査体制の整備に努めた。

・本年度の研究倫理審査件数は、9 件であった。
・審査手続きは 2 件が 1 か月以内、2 件が 2 か月以内で承認に至っている。しかし、1 件は 3 か月を要し、1 件は、再提出がないまま現在もなお、継続状態である。
・倫理審査申請 1 件が面接調査、2 件が介入調査、5 件が質問紙調査であったが、うち 1 件が研究方法の倫理性について改善を要すると判断され、研究計画変更の勧告を行った。その結果、研究手法を質問紙調査からインタビュー調査に変更し再審査となり、承認された。また、1 件が実施計画変更申請であった。
・迅速審査は 2 件であった。
・迅速審査のうち 1 件が、再審査の請求がされなかった。次年度から再審査請求の有効期間を審査日から 60 日以内とし、それを過ぎた場合は新規申請とする。
・本年行った 3 回の正規の倫理審査会には、「男性 2 名、女性 4 名」「本学所属研究者 4 名、本学所属有識者 2 名」の構成であり、複数の職種、両性による構成員となった。今後も引き続き、他研究分野、他機関、法律関係、一般人等の構成員について検討していく。

4)　その他

・研究倫理審査を申請した教員で、審査日に学内待機できない(所用のため)教員が1 名あった。今後、待機できない場合には次回に審査を延期する旨を周知徹底することとした。

5.　次年度の課題

1) スムースな研究倫理審査の体制

2) 研究委員会、FD 委員会と提携した研究倫理教育活動の展開

3) 研究倫理審査体制の強化

・外部審査委員、法律家等の専門職者からなる構成員の可能性の検討

・倫理審査委員の数の検討

4) その他

・ホーム・ページへの倫理委員会活動の公表について検討する

・学部生の卒業研究に関する研究倫理審査の方法・手続きについて検討する

(別紙添付：研究倫理審査受付状況)

以上

平成30年度　研究倫理審査受付状況

H31.2.1　更新

新規倫理審査締切日	研究課題名	研究者	審査経過	承認番号	通し番号
2018年度第1回受付 (締切日4月27日12時)	新規申請者なし	—	—		—
2018年度第2回受付 (締切日5月31日12時)	新規申請者なし	—	—		—
2018年度第3回受付 (締切日6月29日12時)	【課題番号　岩18-1】 「若年認知症家族介護者の身体的・心理的ストレス軽減のための効果的なケアの検討　―認知症ケアエキスパートの経験から―」	【研究代表者】 勝野とわ子 【共同研究者】 河原加代子(首都大学東京)、出貝裕子(宮城大学)、青山美紀子(亀田医療大学)	【受　付】H30.6.27 【審　査】H30.7.11 【審査結果通知】 H30.7.12 【再受付】H30.7.31－① 【再審査】H30.8.8 【再審査結果通知】 H30.8.9 【修　正】H30.8.10－② 【再修正】H30.8.24－③ 【承　認】H30.9.3	岩18-1	1 1－① 1－② 1－③
	【課題番号：岩18-2】 「積雪寒冷地域における身体活動量、食生活、筋力、骨格筋量の季節変化　―高齢者を対象としたパイロット・スタディ―」	【代表研究者】 青柳美樹 【共同研究者】 勝野とわ子、木内千晶、金谷優輝	【受　付】H30.6.29 【審　査】H30.7.11 【審査結果通知】 H30.7.12 【修　正】H30.7.24－① 【再修正】H30.8.7－② 【再審査】H30.8.8 【承　認】H30.8.9	岩18-2	2 2－① 2－②
	【課題番号：岩18-3】 「不妊治療後出産した女性の出産体験の受け止めに関する調査」	【代表研究者】 佐藤恵 【共同研究者】 大谷良子	【受　付】H30.6.29 【迅速審査】H30.7.11 【審査結果通知】 H30.7.12 【再受付】H30.8.30－① 【再審査】H30.9.11 【再審査結果通知】 H30.9.12 【修　正】H30.9.26－② 【再修正】H30.10.3－③ 【再審査】H30.10.10 【承　認】H30.10.16	岩18-3	3 3－① 3－② 3－③
2018年度第4回受付 (締切日7月31日12時)	【課題番号：岩18-4】 「高齢者施設の看護職のワーク・エンゲイジメント因果モデルの検証」	【研究者】 木内千晶	【受　付】H30.7.19 【審　査】H30.8.8 【審査結果通知】H30.8.9 【修　正】H30.8.10－① 【承　認】H30.9.3	岩18-4	4 4－①
	【課題番号：岩18-5】 「本学におけるタブレット端末(iPad)利用の向上に向けた基礎的研究 ―本学学生のタブレット端末(iPad)活用状況の実態―」	【代表研究者】 木内千晶 【共同研究者】 勝野とわ子、土田幸子、大井慈郎、甲斐恭子、齋藤史枝、金谷優輝	【受　付】H30.7.31 【審　査】H30.8.8 【審査結果通知】H30.8.9 【修　正】H30.8.24－① 【承　認】H30.9.3	岩18-5	5 5－①
2018年度5回受付 (締切日8月31日12時)	【課題番号：岩18-6】 「夫の海外赴任に同行している日本人配偶者の滞在生活におけるストレス反応軽減のための支援の試み」	【研究者】 青柳美樹	【受　付】H30.8.31 【審　査】H30.9.11 【再提出】H30.9.28－① 【再審査】H30.10.10 【修　正】H30.10.26－② 【再修正】H30.11.5－③ 【承　認】H30.11.6	岩18-6	6 6－① 6－② 6－③
	【課題番号：岩18-7】 「本学におけるタブレット端末(iPad)利用の向上に向けた基礎的研究　－本学教員タブレット端末(iPad)活用状況の実態－」	【研究代表者】 木内千晶 【共同研究者】 勝野とわ子、土田幸子、大井慈郎、甲斐恭子、齋藤史枝、金谷優輝	【受　付】H30.8.31 【迅速審査】江守・遠藤 【指摘事項】 【修　正】H30.9.26－① 【指摘事項】 【再修正】H30.10.3－② 【承　認】H30.10.16	岩18-7	7 7－① 7－②

新規倫理審査締切日	研究課題名	研究者	審査経過	承認番号	通し番号
2018年度第6回受付 （締切日9月28日12時）	【課題番号：岩18-8】 「学内演習への自己スケジューリング導入による看護実践能力向上の有効性」	【研究代表者】 作間弘美 【共同研究者】 成田真理子、佐藤恵、竹本由香里、菊池和子	【受　付】H30.9.26 【迅速審査】H30.10.10	―	8
2018年度7回受付 （締切日10月31日13時）	新規申請者なし	―	―	―	
2018年度第8回受付 （締切日11月30日12時）	新規申請者なし				
	【課題番号：岩保倫-1700003】 （※実施計画変更審査申請） 「岩手県内の看護学生と看護職者の職業的アイデンティティと地域志向の実態調査」	【研究代表者】 竹本由香里 【佐藤つかさ、大谷良子、作間弘美、青柳美樹、遠藤芳子、江守陽子】	【受　付】H30.11.12 【迅速審査】H30.12.12 【承　認】H30.12.18	岩保倫-1700003	9
2018年度9回受付 （締切日12月26日12時）	新規申請者なし	―	―	―	
2018年度10回受付 （締切日1月31日12時）	新規申請者なし	―	―	―	
2018年度11回受付 （締切日1月31日12時）	新規申請者なし	―	―	―	
2018年度12回受付 （締切日2月28日12時）	新規申請者なし	―	―	―	
2018年度13回受付 （締切日3月29日12時）	新規申請者なし	―	―	―	

Ⅱ　教育・研究年報

2018 年度　一般教養領域活動報告

1.　領域構成

清水哲郎（教授）、大井慈郎（特任講師）

2.　一般教養領域における教育に関する内容と評価

2018 年度は、清水教授は「探求の基礎」(1 学年)、「看護倫理」(2 学年、濵中教授、石井講師と共同)、「人間の生と死」(2 学年）を担当した。「探求の基礎」は、人間の知的営みの基礎となる見方を学習するものであり、昨年度の授業実践の反省を踏まえて、学生の関心と理解力に合った内容にするように工夫したが、なお改善の余地がある。「看護倫理」も清水担当分について「探求の基礎」との連続性を考慮したが、繰り返すことによる知識と考え方の定着を図る授業展開をさらに工夫したい。「人間の生と死」は、学生の事前・事後の学習を促すことに留意して行った。聞いたこと・読んだことを自分なりに考え、どういう性格の知であるかを併せ理解するように留意しつつ、授業展開をする必要があると分かった。

大井特任講師は「情報処理」を担当した。本科目は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。本年度は論文の剽窃などへの注意喚起のため、引用・文献リストの作成法について昨年度以上に時間を割いた。

3.　一般教養領域における研究に関する内容と評価

2018 年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(Ａ)（課題番号 15H01861）が最終年度であったため、新たな研究課題に乗り換えて、基盤研究（Ａ)（課題番号 18H03572）を開始し、次のような研究活動を行った。

- 臨床倫理の検討システムおよび本人・家族の意思決定支援の研究開発。ことに、日本におけるＡＣＰ（アドバンス・ケア・プランニング）の展開を、国際的動向を意識しながら進めていく方途の提言。
- 研究成果を本学の教育カリキュラムに活かす方途の研究開発（倫理関係授業の総合的テキスト作成)。
- 研究成果の臨床現場への還元として、臨床倫理セミナーの開催、医療・看護・介護関係諸団体の臨床倫理研修・ＡＣＰ相談員養成研修等への協力。日本医師会生命倫理懇談会における意見具申。
- 研究成果の発表として、学会招待講演や公募シンポジウムにおける発表等。

大井特任講師は科学研究費助成事業等の競争的資金を得、また地方公共団体との協働事業参加等により、次のような研究活動を行った。

・科学研究費助成事業若手研究（B）（課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎）による、インドネシアジャカルタにおける現地調査（関連してインドネシア大学客員研究員を継続している）。本年度は、現地のプレジデント大学とも協力し、工業団地周辺住民調査を実施。研究成果の一部は、ジャカルタ郊外の労働者に関する学会発表として公表。

・科学研究費助成事業 基盤研究（B）（課題番号 16H03319 代表者：内藤耕）による、インドネシアカラワンにおける農村の変容に関する現地調査。

・介護予防事業研究（東北大学教員等と協働）にて、宮城県富谷市保健福祉部長寿福祉課と連携し、各地域にて実施されている高齢者サロンへの訪問調査を実施。

・介護予防事業研究（東北大学教員等と協働）にて、宮城県富谷市総務部市民協働課と連携し、全町内会長に対してアンケート調査を実施。結果を平成 30 年度第 2 回とみやわくわく市民会議にて報告。

・盛岡市内にて、町内会の閉じこもり防止活動(主に高齢者対象)に年間を通じた参与観察を実施。

開学 2 年目であり､研究環境もそれなりに整ってきており､着実に研究を進めつつある。清水は本学の 4 年間の教育課程における倫理教育を体系的に整え、本学の教育の理念を具現化する研究を進めており、大井は宮城県富谷市の介護予防事業から盛岡市の高齢者を主な対象とした活動へと活動を拡げ、本学の地域貢献につながる可能性をもった研究を行っている。

以下論文等

【論文】

1）会田薫子，清水哲郎：高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン ― 人工的水分・栄養補給の導入を中心として,日本臨牀 76 増刊号 5，2018．p383－387.

【学会発表】

1）清水哲郎：意思決定支援の臨床倫理（招待講演），第 20 回日本医療マネジメント学会学術総会，2018.6.9 札幌市（ニトリ文化ホール）

2）清水哲郎：今から最期までの意思決定支援と臨床倫理（招待シンポジスト），第 7 回日本精神科医学会学術大会 シンポジウム「精神科疾患のエンドオブライフケアと生命倫理」，2018.10.5 長野市（ホテルメトロポリタン長野）.

3) 清水哲郎：医療・ケアに関する本人の意思と最善の間 ―本人の人生・価値観に基づく意思決定支援―(査読あり)，第30回 日本生命倫理学会年次大会　公募シンポジウム「人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援 ―ガイドラインの活用の実際と課題」，2018.12.9 京都市（京都府立医科大学）

4) OOI, Jiro：The Process of Expanding the Capital Region of Indonesia: Focusing on the Migration Pattern and the Wage Disparity of Employment Workers, The 14th Asia Pacific Sociological Association Conference, October 7, 2018, Seisa University (Refereed)

以上

2018 年度　基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

菊池和子（教授）、竹本由香里（准教授）、作間弘美（助教）、成田真理子（助教）、佐藤恵（助手）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

開学 2 年目となり、1 年生の科目は昨年度と同様の科目を担当し、今年から 2 年生の科目である療養援助技術論を担当した。看護学概論（菊池教授）、基礎看護援助論（菊池教授、竹本准教授）、看護理論（菊池教授）、ヘルスアセスメント論、生活援助技術論、療養援助技術論、早期体験実習、生活援助実習は、領域内教員が分担・共同して講義・演習、実習を担当した。2 年生前期の科目である看護過程論は領域内教員と他領域教員と共に担当した。通年科目としての基礎ゼミナールは、菊池教授が担当した。

基礎看護学で教授する科目は、看護学の基盤としての役割を担うため、学生のレディネスを把握し、各科目の教授内容について昨年度の授業評価を踏まえて教授した。

早期体験実習および生活援助実習の準備・調整・実施・評価については、基礎看護学領域教員全員が担当し大きな問題なく遂行することができた。特に今年度は、生活援助実習前の準備として、昨年度学生より情報収集と分析についての実習前学習の希望があったことから、冬期休業前 2 週間集中的に事例学習を実施した。

実習指導については、基礎看護学領域教員と、申請内容を踏まえ学内の教員が担当した。来年度は、学年も増えるため、実習と学内での授業が同時に実施されることから、実習担当教員の配置を見直し、計画する予定である。

昨年度課題として、1 年時の前期演習科目の「ヘルスアセスメント論」が形態機能学と並行して教授するため順序性の面で形態機能学の理解がほとんど進んでない段階で、フィジカルアセスメントの理解に時間を要することが挙げられた。今年度も昨年度と同様に前期後半に「ヘルスアセスメント論」を設定し、今年度は事前課題として解剖生理学の課題を課し、少しでも学生の学習効果をあげるようし学生の理解度が若干あがった。完成年度以降、開講時期を形態機能学終了後の 1 年後期に変更する等の改善が必要である。

また、生活援助実習は、冬季でありインフルエンザなどの感染症罹患のリスクが高いため、感染予防対策を徹底するように指導することが必要である。

3.　基礎看護領域における研究に関する内容と評価

それぞれの教員が学内プロジェクト研究に所属し、共同の研究活動を行い、その成果を全国学会で発表した。学内プロジェクト研究は次年度も継続して研究する予定であり、今後、学会発表及び論文としてまとめ公表する予定である。

昨年度、基礎看護学領域で行った研究を全国学会で発表した。今後、論文にまとめ投稿する予定である。その他、個人研究や他施設教員等との共同研究で取り組んだ研究を看護系学会で発表した。

基礎看護学領域は他領域に比較して、開学から授業や実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要するなかでそれぞれが研究活動を行った。今後は今年度取り組んだ研究を含

め、基礎看護学領域としての共同研究を行うこと、それぞれの教員がこれまでの研究成果を論文としてまとめるために努力していきたい。

以下論文等

【著書】

1) 菊池和子：糖尿病療養者の在宅看護過程，正野逸子，本田彰子編：関連図で理解する在宅看護過程第 2 版，64 - 85，メヂカルフレンド社，2018.

【論文】

1) Megumi Sato, Mari Sato, Nobuko Oyamada, and Kineko Sato：Development of a Japanese version of Salmon’s Item List suitable for comparing satisfaction with childbirth experience between different modes of delivery，日本助産学会誌，32 巻 2 号，p113-124，2018.
2) 遠藤芳子，竹本由香里：地域に暮らす障害者とその家族の災害発生時における支援ニーズ－近隣の看護系大学への希望に関する基礎調査－，日本災害看護学会誌，20(2)，48-55，2018.
3) 日當沙代子，菊池和子：介護老人保健施設における看護師・介護福祉士の看取り体験，岩手看護学会誌，12（2），15 - 28，2018.

【学会発表】

1) 佐藤恵，佐々木里絵，菅原純子，佐藤ツセ子，大坂暢子：岩手県助産師会　先輩助産師から知と技を教わる研修会「ミサホさんのお産を語る会」開催報告，第 74 回日本助産師学会，2018 年 5 月，金沢市.
2) 千葉くみ，今野貴子，菊池宏美，佐藤恵：A 病院の産後 2 週間健診の現状と課題，第 27 回母乳育児シンポジウム，2018 年 8 月，長崎市.
3) 成田真理子，佐藤恵，作間弘美，竹本由香里，豊嶋三枝子：看護中間管理職への部下からのハラスメントの実態（第 1 報）－職務満足とソーシャルサポートとの関連―，日本看護研究学会第 44 回学術集会，2018 年 8 月，熊本市.
4) 佐藤恵，成田真理子，作間弘美，竹本由香里，豊嶋三枝子：看護中間管理職への部下からのハラスメントの実態（第 2 報）－自由記述からの分析－，日本看護研究学会第 44 回学術集会，2018 年 8 月，熊本市.
5) 石井真紀子，佐藤恵，成田真理子，山本勝則，濱中喜代：学生の「ケア・スピリット」の認識と変化－ 1 年次後期看護学実習前後での比較－，日本看護学教育学会第 28 回学術集会，2018 年 8 月，横浜市.
6) 竹本由香里，大谷良子，作間弘美，遠藤芳子，江守陽子：看護学生の職業的アイデンティティと地域志向に関する実態調査，日本看護学教育学会第 28 回学術集会，2018 年 8 月，横浜市.

7）作間弘美，大谷良子，成田真理子，佐藤恵：重症心身障がい児をもつ母親が交流会に参加するための諸問題とその支援，第 49 回日本看護学会　慢性期看護，2018 年 9 月，静岡市.

8）今野貴子，菊池宏美，佐藤恵：孫を迎える祖母の育児支援および栄養方法に対する認識，第 59 回日本母性衛生学会学術集会，2018 年 10 月，新潟市.

9）佐藤恵，大谷良子：「出産体験」とされる期間の範囲に関する文献検討，第 33 回日本助産学会学術集会，2019 年 3 月，福岡市.

以上

2018 年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

土田幸子（准教授）、石井真紀子（講師）、齋藤史枝（助教）、大﨑真（助手）、
添田咲美（助手）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

2018 年度に担当した科目は、成人看護学概論、成人看護援助論、生活習慣看護論、早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・療養援助実習Ⅱ、基礎ゼミナール、看護倫理、人間の生涯発達の 10 科目であった。

1) 専門科目について

(1) 講義・演習について

今年度から 2 年次の科目（成人看護援助論、生活習慣看護論）が開講された。

2 年前期の成人看護援助論では、療養援助実習Ⅰ終了後から紙上事例を用いた看護過程を個人学習とグループワークを交互に組み入れ展開した。グループワークでは個人学習の成果を発表し、看護過程の各要素の理解を深めるように支援した。個人学習が浅い学生は、グループメンバーの学習成果から自分の不足していることに気づくことができ、自己学習の推進につなげられた。

2 年後期の生活習慣看護論では、生活習慣と疾病の関連を理解し、成人期における人々の疾病予防と生活習慣の改善の重要性について考えることができていた。また、生活習慣病と密接に関連する糖尿病についてセルフマネジメントに関する演習を行った。演習では、フットアセスメント、自己血糖測定、インスリン自己注射を各自で作成した手順をもとに実施した。手順の作成では、根拠が不明確で指導を要した。当日使用する器具については事前に触れる機会はあったものの、当日初めて触れる学生が多く、実際の場面では器具の取り扱いに時間を要した。フットアセスメントでは、既修のフィジカルアセスメントの復習をしながら行い、フットケアの必要性を再認識することができた。

今年度の 1 年後期の成人看護学概論では、人間の生涯発達の「成人期」との重複を避け、生活と健康障害に焦点を当てて構成した。成人期の健康障害をグループワーク中心に展開し、生活や生活習慣と疾病の関連を理解することにつなげられ、その後の生活援助実習でも活用することができていた。

齋藤助教が「看護過程論」を担当した。準備の段階から紙上事例の検討に加わり、演習で学生個人やグループの学修支援を行った。石井講師は「看護倫理」を担当し、倫理を学ぶ意義や守秘義務、看護専門職の職業倫理などについて教授した。また、倫理的意思決定の事例検討を展開し、個人学習やグループワークを支援し、発表の機会

を設け成果を共有することで学修を深めた。

(2) 実習科目について

1年生に対しては、早期体験実習・生活援助実習を領域内の全教員が担当した。

2 年生には対しては、療養援助実習Ⅰ・療養援助実習Ⅱを領域内の全教員が担当した。療養援助実習Ⅰについては、成人看護学領域が科目責任となり実習の準備から最終評価までの一連を担当した。この実習では、看護過程のプロセスを踏むことを目標とした。学生たちは担当教員からの助言を参考に、各過程や実習全体の振り返りにつなげられており、概ね実習目標を達成できたと考える。しかし、実習期間中に看護計画をもとに援助を実施し評価することに至らなかったことを考えると、実習目的と目標の修正が必要と考える。また、実習中の学修態度や実習記録への指導を要する学生があり、今後も継続して注視していく必要性を共有した。

2) 基礎科目について

今年度は、基礎ゼミナールに土田准教授、齋藤助教、添田助手(授業補助)の 3 名がそれぞれのグループを担当した。PBL の基礎となる文献抄読や文献検索、討議、レポート作成、発表などを通して学生が主体的に学ぶための技術の修得を支援した。これにより学生の探求心が刺激されディスカッションやプレゼンテーション能力の向上につながったと考える。一方で、1 グループ 10 名の学生では、課題学習の自己学習に差があり、共通認識を図ることに時間を要したが、共通理解の重要性と自分たちの不足部分に気づくことができていた。

また、石井講師が「人間の生涯発達」を担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで、学生にとって成人看護学概論の学修へとつながっていたと考える。

3. 成人看護学領域における研究に関する内容と評価

土田准教授と齋藤助教は「タブレット端末を用いた教育方法に関する研究」チームに所属し、昨年実施した結果から、今年度は学生と教員の双方から検討することとなり、土田准教授は教員側の調査を担当した。教員に対してタブレットに関する研修会の動画撮影と無記名 Web 調査を実施した。その結果、タブレットの使用経験のない教員が多く、授業に使用されている機能は一部に限られていた。今後、操作サポートシステムの整備、複数年での組織的段階的なタブレットを活用した授業デザイン開発にむけた取り組みが必要と考えている。また、齋藤助教は学生側の調査を担当し、昨年の結果との比較検討を行った。これらの成果は、次年度の看護教育学学会で発表予定である。

土田准教授と添田助手は糖尿病患者の継続治療につながる患者教育について文献検討し、その成果を「文献からみた糖尿病患者教育の実態」としてまとめ発表した（10 月、岩手県看護研究学会)。これは基礎的なもので、今後はこのデータをもとに治療中断者に焦点をあて、合併症や悪化を予防するための教育のあり方を検討していきたい。

石井講師と添田助手は「ケア・スピリット教育に関する研究」チームに所属し活動して

いる。昨年度末の研究成果を学会（日本看護学教育学会 第 28 回学術集会）で発表している。今年度は 2 年目を迎え、計画に則り 1 年生と 2 年生に対する質問紙調査を実施し学生のケア・スピリットに対する認識を明らかにするとともに学年間の比較、1 年次と 2 年次の経年的な比較を行った。また量的調査では捉えきれない学生のケア・スピリットに対する認識をインタビュー調査で明らかにするために、今年度も 2 年生に実施している。引き続きデータを分析し考察を加え、国内の学会で発表する予定である。

以下論文等

【著書】

1） 石井真紀子：大腸がん 看護プロセス，疾患別看護過程セミナー上巻，172-183，サイオ出版，東京．2018

【学会発表】

1） 石井真紀子，佐藤恵，成田真理子，山本勝則，濱中喜代：学生の「ケア・スピリット」の認識 ―1 年次後期看護学実習前後での比較―，176，日本看護学教育学会第 28 回学術集会，2018 年 8 月，横浜市．

2） 添田咲美，土田幸子：文献からみた糖尿病患者教育の実態，46，公益社団法人岩手県看護協会創立 70 周年記念事業看護研究学会，2018 年 10 月，盛岡市．

以上

2018 年度　老年看護学領域活動報告

1.　領域構成

勝野とわ子（教授）、木内千晶（准教授）、金谷優輝（助手）

2.　老年看護学領域における教育に関する内容と評価

１．　老年看護学領域科目

「老年看護学概論」は、1 年生の後期に開講し、勝野教授が授業を担当した。本科目では、学生の高齢者観・倫理観を深化させるとともに加齢に関連する諸概念と理論を教授した。また、高齢者を身体的・心理的・社会的側面から総合的に理解し、高齢者の健康レベルに合わせた質の高い看護を提供するための基礎知識を教授するとともに、対象者の成長と発達の過程、人口統計および社会構造の変化、災害時のニーズ、高齢者への保健・医療・福祉サービスの現状と課題を教授し、老年看護実践における専門的な看護者の役割と機能を概観した。授業内容の工夫点として、心理的な介入方法としてのレミニッセンスプロジェクトを課し、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。学生の取り組みの姿勢および達成度は高かった。

「老年看護援助論」は、2 年前期に開講し、勝野教授、木内准教授が授業を担当した。ヘルスプロモーションの活動プランを演習に取り入れる工夫を行い、金谷助手もこの演習指導に加わった。この科目は、高齢者の生活を支える諸制度および社会資源、ヘルスプロモーションについて理解し、健康生活を支援する基礎的知識を修得する、また、認知症などについて理解を深め高齢者と介護家族に対する看護方法について基礎的能力を修得することを目的とした。学生の取り組みの姿勢および達成度とも良好であった。

「老年看護技術論」は、2 年後期に開講した演習を含んだ科目で、勝野教授、木内准教授、金谷助手が担当した。高齢者の残存機能を活かした生活援助技術、高齢者に対するヘルスアセスメント技術について、技術演習を通して実践に即した方法が修得できるよう物品を整備し授業展開の工夫を行った。次年度は老年看護援助論とのつながりをさらに考慮し、講義と演習の組み合わせにより効果的な授業と演習を展開する予定である。

２．　看護基礎科目および臨地実習

「基礎ゼミナール」は、1 年の通年科目で、勝野教授と金谷助手、木内准教授がそれぞれグループを担当した。学生の科学的思考力を醸成すること、また、活動の中でグループダイナミクスを引き出せるよう学生を支援した。木内准教授はレポートの書き方・提出方法、討議の方法についての一斉講義を担当した。担当グループの取り組みの姿勢および達成度は高かった。

「看護過程論」「人間の生涯発達」は、1 年の科目で木内准教授が担当した。「看護過程論」は関連図、看護問題の統合、全体像の描写、看護目標と計画の立案、実施、評価についての講義を担当した。授業の工夫としては、複数の担当教員と授業前から打合せを重ね、具体的な事例展開ができる内容となるようにした。

「人間の生涯発達」は 2 コマを担当し老年期の発達理論、発達課題について講義した。老年期の発達における身体的、精神的、社会的特徴について諸理論を交えて教授し、生活援助実習で多くの学生が受け持つ高齢患者の理解につながる内容とした。
「療養援助実習Ⅱ」は 2 年の後期に行われた臨地実習である。実習責任領域として、勝野教授、木内准教授、金谷助手の協力体制のもと 8 実習病院と連携し、打ち合わせを密に行いながら計画的に事前準備を行った。さらに、担当教員と調整し学生が実習前に看護技術の復習を行える機会を整備した。実習中は勝野教授が全病院の統括として担当教員と密に連絡を取り合うとともに、実習委員会委員長および学部長の指示のもと、スムーズに実習が進行するよう工夫した。引き続き実習の円滑な運営と学生に対する教育の質の向上へ向けて努力が必要である。
1 年の「早期体験実習」および「生活援助実習」、2 年前期の「療養援助実習Ⅰ」を木内准教授と金谷助手が担当した。それぞれの実習において、臨床指導者との調整を行い、学生が実習目的を達成し、看護実践から学びが得られるよう支援した。

3. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

勝野教授、木内准教授、金谷助手の 3 人は、学内のプロジェクト研究のメンバーとして、本学におけるタブレット端末利用状況向上に向けた取り組みをテーマに、タブレット端末を活用した授業展開に向けての基礎研究を行った。本年度の活動内容は、本学教員と学生を対象としたタブレット端末（iPad）活用状況に関する調査で、現状を明らかにした。研究成果は 2019 年度の日本看護教育学会で発表予定である。
勝野教授、木内准教授、金谷助手の 3 人は、学内共同研究のメンバーとして、積雪寒冷地域における身体活動量、食生活、筋力、骨格筋量の季節変化をテーマに、積雪寒冷地域 65 歳以上の高齢者を対象に身体活動量、食生活、筋力、骨格筋量を夏季と冬季に調査した。季節変化について分析し、研究成果の発表を計画中である。

以下論文等

【論文】

1）岩瀬和恵，勝野とわ子．何が介護老人福祉施設で看取りを可能にするのか―看取りを行う看護師のインタビューから―．川崎市立看護短期大学紀要、24（1）、1-9, 2019.
2）Chiaki KINOUCHI, Yuko TAKAYAMA，Mediating Effects of Work Engagement of Nurses Working in Long-Term Care Beds in Japan，Annual international conference proceedings on worldwide nursing, 84-89, 2018.
3）Yuko TAKAYAMA, Chiaki KINOUCHI，Factors Related to Burnout of Japanese Male Nurses，Annual international conference proceedings. Annual international conference proceedings on worldwide nursing, 59-66, 2018.

【学会発表】

1）木舟雅子，遠藤百合子，小野寺敦志，宮永和夫，比留間ちづ子，勝野とわ子．　全国の若年認知症家族会ならびに支援者団体同士をつないでいこう！！　第 19 回日本認知症ケア学会，2018.

2）森優貴乃，勝野とわ子．　急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践と関連する要因の検討．第 38 回日本看護科学学会学術集会，2018.

3）末永裕代、勝野とわ子．　日本語版 Tilburg Frailty Indicator の作成と信頼性と妥当性の検討．第 38 回日本看護科学学会学術集会，2018.

4）青山美紀子，勝野とわ子．　若年認知症に関する研究動向と課題．第 38 回日本看護科学学会学術集会，2018.

5）Yamagishi, N. & Katsuno, T. Status of nursing care for elderly patients with type 2 diabetes living alone in Japan. 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars, 2019.

6）根岸貴子，木内千晶，中澤明美，認知症の妻をもつ夫の介護初期の介護課題とその克服プロセス，第 19 回認知症ケア学会，2018.

7）Chiaki Kinouchi, Yuko Takayama, Mediating Effects of Work Engagement of Nurses Working in Long-Term Care beds in Japan, Worldwide Nursing Conference, 2018.

8）Yuko TAKAYAMA, Chiaki KINOUCHI, Shigeko SHIBATA, Naoko SHIOMI，Factors Related to Burnout of Japanese Male Nurses，Worldwide Nursing Conference, 2018

9）甲斐恭子，齋藤史枝，木内千晶，豊嶋三枝子，医療系大学教育においてタブレット端末を活用している文献の動向，日本看護学教育学会第 28 回学術集会，2018.

10）三浦奈都子，遠藤良仁，相澤純，小松恵，小坂未来，木内千晶，岩手県医療系 3 大学合同多職種連会シミュレーションプログラムの試み，第 11 回岩手看護学会学術集会，2018.

11）木内千晶，高山裕子，小檜山敦子，療養病床の看護に関する研究の動向と課題，第 38 回日本看護科学学会学術集会，2018.

12）髙山裕子，松尾まき，木内千晶，小檜山敦子，男性看護師のバーンアウト因果モデルの作成と検証，第 38 回日本看護科学学会学術集会，2018.

13）Chiaki Kinouchi, Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Mika Takano, Hitomi Setoguchi, Saori Nakazawa, Naoko Shiomi，Causal Model of Work Engagement of Registered Nurses and Licensed Practical Nurses with Different Educational Backgrounds, The 17th Annual Hawaii International Conference on Education, 2019.

14）Yuko Takayama, Eiko Suzuki, Chiaki Kinouchi, Hitomi Setoguchi, Saori Nakazawa, Naoko Shiomi，Strategies for Preventing Burnout Among Japanese Male Nurses - from a Viewpoint of Mental Health Education in the Workplace，The 17th Annual Hawaii International Conference on Education, 2019.

以上

2018 年度　母性看護学領域活動報告書

1.　領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（助教）

2.　母性看護学領域における教育に関する内容と評価

2018 年度は、1 年次科目の「基礎ゼミナール」（江守・大谷）「早期体験実習」（大谷）「生活援助実習」（大谷）「人間の生涯発達（2 コマ）」（江守）、2 年次科目の「看護過程論」（大谷）「療養援助実習Ⅱ」（大谷）を担当した。さらに、大学教員として１・2 年生の看護専門基礎科目の学修や学生生活を支援した。

母性看護学領域に関する科目としては、母性看護学概論（1 単位：前期）、母性看護援助論（2 単位：後期）を開講した。また、次年度以降の準備として母性看護学実習室の整備、備品・物品購入、次年度以降開講予定の「母性看護技術論」「セクシャルヘルス・アセスメント」「母性看護学実習」のシラバス、授業・演習・実習の学修内容について検討・準備を進めた。

次年度以降、1～3 年生を対象に、母性看護学領域をはじめとする看護専門科目について、興味を持って聞ける、よくわかる授業と臨地での本格的な教育を提供する必要がある。

3.　母性看護学領域における研究に関する内容と評価

江守教授による 2019 年度科研費の継続研究：「育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連 QOL および育児ストレスとの関係」については、データ収集を終え、分析を進めている。

また、江守と大谷がともに参加する学内プロジェクト研究：「看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する研究」では、前年度実施した看護学生アンケートの分析とその学会発表、看護職者対象のアンケートの分析とその報告書の作成及び報告書発送を完了し、さらなる研究の継続と進展を目指している。

大谷助教は、佐藤恵助手との学内共同研究：「不妊治療後妊娠した女性の出産体験の受け止め」について研究を開始し、対象者に対するインタビュー調査の実施とその中間報告として、2019 年 3 月、福岡で開催された第 33 回日本助産学会において口頭発表を行った。

次年度以降は母性看護学担当教員が 1 名補強されることから、本格的な母性看護学領域としての教育・研究活動を始動させる必要がある。

以下論文等

【学会発表】

1)　竹本由香里、大谷良子、作間弘美、遠藤芳子、江守陽子：看護学生の職業的アイデンティティと地域志向に関する実態調査、第 28 回日本看護学教育学会学術集会、2018. 8.29　横浜市

2) 佐藤恵、大谷良子：「出産体験」とされる期間の範囲に関する文献検討、第 33 回日本

助産学会学術集会、2019. 3.3　福岡市

3) 作間弘美、大谷良子、成田真理子、佐藤恵：心身障がい児を持つ母親が交流会に参加するための諸問題とその支援、第 49 回日本看護学会－慢性期看護－学術集会、2018. 9.27　静岡市

以上

2018 年度　小児看護領域活動報告

1.　領域構成

濱中喜代（教授）、遠藤芳子（教授）、甲斐恭子（助教）

2.　小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2018 年度も、基礎ゼミをメンバー3 人が担当した。1 年生の学習状況や到達レベルの確認に役立ったと考える。関連科目として、「人間の生涯発達」の科目を濱中教授が責任者として担当した。小児の発達段階、発達理論、各期の特徴について概説できた。その学びを踏まえて 2 年次前期の小児看護学概論を展開した。後期には遠藤教授が小児看護援助論を担当した。3 年次に向けて、新しい科目の講義及び演習内容を検討した。また予定していた実習場所の小児科医が辞職する事態が起こり、再度実習場所の確保に向けて、病院施設との折衝し、具体的な学習内容についても検討した。次年度に向けての準備が整ったと考える。

3.　小児看護学領域における研究に関する内容と評価

2018 年度は、濱中教授が本学、清水哲郎教授代表の科研の分担研究者として、昨年度に引き続き、看護倫理教育に関して情報収集を行った。また西南女学院大学の谷川教授との科研の研究成果を小野氏とともに医療と保育に投稿し掲載された。

遠藤教授は科学研究費助成事業における挑戦的萌芽研究（代表者：遠藤芳子）において、研究をまとめ、学会誌に投稿し掲載された。そして挑戦的萌芽研究の最終年度報告を行った。また、基盤研究（C）（代表者：佐藤幸子（山形大学））では、共同研究者として研究論文を学会誌に投稿し掲載された。もう 1 編の論文を北日本看護学会誌に投稿中である。

そのほかに、メンバーが本学の３つのプロジェクト研究それぞれ担当し、データ分析等に取り組んでおり、濱中教授は「看護学生のケア・スピリットの認識に関する研究」（石井筆頭）の一部を日本看護学教育学会にて発表した。遠藤教授は、「学生が地域志向性を持てるようなアイデンティティ形成のための教育方略に関する研究」（竹本筆頭）の一部を日本看護学教育学会にて発表した。それをまとめた論文を日本看護研究学会誌に投稿する予定であり、研究の他の一部（遠藤筆頭）を第 22 回北日本看護学会学術集会で発表し、論文として投稿する予定である。さらに研究の一部（大谷筆頭）を第 29 回日本看護教育学会に演題登録する予定である。甲斐助教は、「タブレット端末を用いた教育方法に関する研究」の一部を日本看護学教育学会第 28 回学術集会にて発表した。また、タブレット端末に関する研究は継続中で、その後の内容を日本看護教育学会第 29 回学術集会に演題登録しており、それらをまとめたものを今後投稿する予定である。

総括として今年度は個人の研究活動はあまり推進できなかった。次年度以降は向上的に取り組んでいきたい。

以下論文等

【論文】（全部査読あり）

2）小野鈴奈、谷川弘治、濱中喜代：小児医療の現場で多職種が連携・協働していくために保育士に求められること　医療と保育　17（1）pp28-40　2019.3

3）遠藤芳子、竹本由香里：地域に暮らす障害者とその家族の災害発生時における支援ニーズ－近隣の看護系大学への希望に関する基礎調査－.日本災害看護学会誌.20（2）pp48-55　2018.12

4）佐藤幸子（山形大学）、塩飽仁（東北大学）、遠藤芳子、今田志保（山形大学）：心身症・神経症児の学校等の仲間集団における対人関係で困難感が高まる場面の検討.北日本看護学会誌.21（2）pp17-24　2019.2

【学会発表】（全部査読あり）

1）石井真紀子、佐藤恵、成田真理子、山本勝則、濱中喜代：学生の「ケア・スピリット」の認識－1 年次後期看護学実習前後での比較　日本看護学教育学会　第 28 回学術集会講演集 p176、2018　パシフィコ横浜

2）甲斐恭子、齋藤 史枝、木内千晶、豊嶋三枝子：医療系大学教育においてタブレット端末を活用している文献の動向　日本看護学教育学会　第 28 回学術集会集　p157、2018　パシフッコ横浜

3）竹本由香里、大谷良子、作間弘美、遠藤芳子、江守陽子：看護学生の職業的アイデンティティと地域志向に関する実態調査．日本看護学教育学会第28回学術集会、ｐ156、2018　パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）

以上

2018 年度　精神看護学領域活動報告書

1.　領域構成

長南幸恵（講師）、佐藤つかさ（助手）

2.　精神看護学領域における教育に関する内容と評価

前期実習科目として、佐藤助手が「早期体験実習」、「療養援助実習Ⅰ」、後期は、長南講師および佐藤助手が「療養援助実習Ⅱ」を担当した。

基礎科目授業として、佐藤助手は、基礎ゼミナールの授業補助を行った。

専門科目授業は、今年度前期は専任助手一名の分野体制だったため、非常勤講師が「精神看護学概論」を行い、精神医療の歴史や法体系を教授して頂いた。

後期は、長南講師が「精神看護援助論」を担当し、佐藤助手は授業補助を行った。講義は、精神看護の原則・姿勢や精神疾患に対する具体的な看護方法を中心に教授し、次年度の精神看護技術論および精神看護学実習へ向けた知識や思考方法のラダー教育を目指した。

3.　精神看護学における研究に関する内容と評価

今年度は、精神看護分野としての研究着手には至っていない。分野の人員刷新に伴う新体制への過渡期であったことが大きな要因である。次年度以降は、分野としての研究着手が課題と考えている。

個人研究活動として、佐藤助手は、本学プロジェクト研究のメンバーとしてデータ収集および分析等に取り組んだ。

長南講師は、日本学術振興会から研究助成を受けている研究課題（K1612158）を継続遂行中である。今年度は、学会誌への論文投稿を行い、学会誌に発表された。次年度は、更なる調査および分析、論文発表等を行い、研究活動を活発化させる予定である。

以下論文等

【論文】

1）長南幸恵：発達性協調運動障害（DCD）が併存していた自閉スペクトラム症（ASD）のある子ども 1 例の運動感覚特性と行動の実際、精神科治療学、33(9)、1123-1129、2018.

以上

2018 年度　地域看護学領域報告書

1.　領域構成

青柳美樹（講師）

2. 地域看護学領域における教育に関する内容と評価

平成 31「年度授業計画を立案した。来年度授業は、前期にヘルスプロモーション論、後期に地域看護学概論、地域看護学援助論が開講される予定である。次年度着任予定の教授と授業展開について連絡を取り合い、平成 32 年度 4 年次に開講される地域看護学領域の科目を含めて展開方法について検討した。

平成 32 年度に実施する「地域看護学実習」「公衆衛生看護学実習」「総合実習」の準備を行った。教育委員会、県内保健所・市町村担当課を訪問し、実習の実施時期や実施内容について調整を始めた。また、県内 3 大学の情報交換会に出席し、次年度の実習配置や実習方法について情報交換を行い、次年度早期に実習調整の必要性について相互確認ができた。

3. 地域看護学領域における研究に関する内容と評価

科学研究費助成事業　基盤研究（C）課題番号 16K12314（代表者：青柳美樹）の研究課題に取り組んだ。今年度は、インドネシアジャカルタにおいて、海外赴任者帯同配偶者のボランティアグループの支援を受けて、渡航後 1 年未満の配偶者に対し、ワールドカフェ方式のワークショップを実施した。

学内共同研究として、老年看護学領域の教員と協働し、岩手県盛岡市在住の高齢者の筋肉量や筋力、食生活と身体活動量の季節変化の検証研究を実施した。次年度は、着任予定の本領域教授・助手を含め、老年看護学領域との共同研究として研究を進める予定である。

学内プロジェクト研究では、「看護学生の地域志向性を高める教育方略の検討－岩手県内の看護学生と看護職者の職業的アイデンティティと地域志向の実態調査―」に新メンバーとして参加し、分析に参加した。

【論文】

1) 青柳美樹, 山崎 恭子, 島田 直樹, 大屋 晴子. 事業場における女性労働者の子育て支援制度の利用に関連する要因の検討、日本健康学会誌、84(3)95-108, 2018
2) 青柳美樹、多賀昌江、髙山裕子. 夫の海外赴任に同行する配偶者における渡航前の不安と渡航後の困りごと －Web 調査における自由記述から－. 日本渡航医学会誌、12(2), 2019

【学会発表】

1) 三澤眞理子. 青柳美樹. 保健専門職のいない事業場における産業看護職のかかわりの影響の検討 ～メンタルヘルス対策としての管理職研修の効果の評価～. 第 7 回日本産業看護学会　第 7 回学術集. 2018.11.3
2) 青柳美樹、多賀昌江、髙山裕子. 海外派遣労働者帯同配偶者のストレス反応とコミュニティ参加、相談者の推移　2016 年と 2017 年のインターネット調査から. 第 22 回日本渡航医学会学術集会. 2018.7.22
3) Miki Aoyagi、Masae Taga, Yuko Takayama. Factors Based on Length of Stay Related to Stress Response of Japanese Spouses Accompanying Husbands Posted Overseas. The 33rd Congress of International Communternational Commission on Occupational Health. 2018.5.3

以上

Ⅲ　外部資金獲得状況

外部資金獲得状況一覧

清水哲郎　(一般教養：教授)

1)　基盤研究(A)(代表)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組込み

濱中喜代　(小児看護学：教授)

1)　基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組込み

江守陽子　(母性看護学：教授)

1)　基盤研究(C)(代表)

課題番号：17K12284

研究課題名：育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連 QOL および育児ストレスとの関係

遠藤芳子　(小児看護学：教授)

1)　基盤研究(C)(分担)

課題番号：16K12134

研究課題名：心身症・神経症児のための動画によるソーシャルスキルトレーニングツールの開発

勝野とわ子　(老年看護学：教授)

1)　基盤研究(C)(代表)

課題番号：15K11474

研究課題名：若年認知症家族介護者の健康支援に関する看護技術開発

2)　基盤研究(C)(分担)

課題番号：15K11821

研究課題名：独居の高齢 2 型糖尿病患者への Rerson-centred Care モデルの開発

木内千晶　(老年看護学：准教授)

1)　若手研究(代表)

課題番号：18K17616

研究課題名：高齢者施設の看護職のワーク・エンゲイジメント因果モデルの検証

大井慈郎　(一般教養：特任講師)

1)　若手研究(B)(代表)

課題番号：17K13838

研究課題名：東南アジア都市における工業団地労働者の地域・階層移動研究

2)　基盤研究(B)(分担)

課題番号：16H03319

研究課題名：インドネシアにおける日系工業団地進出と地域社会変容に関する研究

青柳美樹　(地域看護学：講師)

1)　基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12314

課題研究名：海外派遣労働者の配偶者における生活適応状況の特徴の明確化とコミュニティ支援の検討

長南幸恵　(精神看護学：講師)

1)　基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12158

研究課題名：ASD 児の各感覚の特性と生活の困難さに関する研究

以上

自己点検・評価報告書　2018 年度版

2019 年 5 月 23 日　発行

発行者　岩手保健医療大学
　　自己点検評価委員会
住　所　〒020-0045
　　岩手県盛岡市盛岡駅西通一丁目 6 番 30 号
電　話　019-606-7030　（代表）